
悪魔とゼロとガンダールヴ

魅鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔とゼロとガンダールヴ

【Nコード】

N5070F

【作者名】

魅鈴

【あらすじ】

悪魔の公爵家使い魔キリ、異世界の平民使い魔サイト。そして、公爵家にして魔法が使えない少女ルイズ。またの名をヴィンダールヴ、ガンダールヴ、虚無の担い手！

1 悪魔の子

ハルケギニア大陸、トリステイン王国。

心地よく晴れた日に、空とは正反対に暗い部屋で過ごす一人の少女がいた。

カーテンを開けず閉きった日の入らぬ部屋のベッドの上で魔法書を広げている。

彼女の名は「キリ・リスレム・ド・キセイント」公爵家キセイントの次女である。

キリには、自分ではどうしようもない問題があった。

ハルケギニアには、ごくまれに「悪魔の子」と呼ばれる子供が生まれる。首に黒い星のマークがあるのが特徴で、その子は無条件に嫌われていた。

「人間の出来そこない」
そう呼ばれている。

キリはその悪魔の子であった。なので、公爵家であったが余りいい扱いを受けていなかった。

両親に危険な任務を与えられ、キリはそれを実行する。

両親にとって、家紋を汚す原因であるキリには早く死んでほしかったのだった。

だが、自分たちで殺すわけにはいけないので、任務で自滅するのを待っていた。

「はあ……」

キリの溜息は日本海溝よりも深かった。（日本海溝などないが……）両親が、死んでほしいと思っっているのは知っていた。姉は、魔法学校を卒業していたが、自分は、遠視の呪文などでしか視たことがなかった。行かせてもらえなかったのである。

それに、姉はドレスを着ているのに対し、自分はドレスなどではなく、平民が着ているような膝丈のスカートと使い込まれてボロボロになったブラウス。

両親が、自分を大切にしていなかったことは、嫌でもわかる。そんなわけで、キリの溜息は深かった、もの凄く。

キリは魔法書から顔を上げ、腕上げて伸びをする。

今日は任務もないし一日寝ていようかな、そう思いベッドに寝転がろうとしたとき、目の前に青白く光り輝くゲートが現れた。キリはこのゲートを見たことがあった。

どこでだっけ？ ああ、姉さまが使い間を召還したときに見たんだ。
……でも、なぜここに？

そんな疑問なんてもうでもよかった、キリはこの家、この状況から逃げ出したかった。

迷うより前に、体が勝手にゲートを潜っていた。

同時刻、キリが住む世界とは、別の世界の少年の前にも同じゲートが現れていた。

彼の名は「平賀才人」日本の東京に住む高校生だ。

友達と別れ、サイトは家に向けて全速力で走っていた。サイトの家には門限があった。

その時刻まで、あと10分。急いで帰らねば、今日は母と父の怒鳴り声を聞くことになる。

それだけは、避けたい。

そんなふうに、必死で走っていると目の前に輝くゲートが現れたのだった。

サイトはもの凄く好奇心の強い少年だった。門限があるといえど、そんなものは好奇心の前には石ころ同然である。

これはどんな自然現象かと立ち止まってまじまじと見てみると、突然そのゲートに吸い込まれた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。われの運命に従いし使い魔を召還せよ」

同じく同時刻。

トリステイン魔法学院。

今日は、二年生の使い魔召還の儀式の日であった。

クラスメイトが見ている中、最後の順番であるルイズに番がまわってきた。

ルイズは公爵家ヴァリエールの三女である。だが、魔法の才能はゼロ。

ついたふたつ名は・・・

「ゼロのルイズ」

ルイズは、桃色の長い髪を風にたなびかせ、杖を振り下ろした。

すぐに目の前の空間が爆発し、土ぼこりが舞う。周りで見ていた、クラスメイトが野次を飛ばした。しかし、土埃がはれたあと、野次が止んだ。

そこには、一人の少女と少年がいた。

ルイズは自分の開いたゲートから出てきたモノを冷たい視線で見下ろした。

次に周りのクラスメイトを見回すと、クラスメイト達は、必死に笑いをこらえていた。

最悪だ。

「ルイズ、あなた最高ね、人間を召還しちゃうなんて」

真っ赤な赤髪を振り回すような勢いで笑い続けるキュルケ。周りの笑いがいつそう濃くなる。

「やっぱり、ルイズだ」「期待を裏切らないよね」周りからそんな声が聞こえたが、ルイズの耳には届いていない。

「ミスタ・コルベール！もう一度やらせてください！私にもう一度召還させてください！！」

私は、ミスタ・コルベール（先生）に訴えた。ものすごい勢いで。

「ミス・ヴァリエール。サモン・サーヴァントは神聖な儀式だ。やり直しなど考えられないし、認めることはできない。」

ミスタ・コルベールは、私におっしゃった。

サモン・サーヴァントは、神聖な儀式…わかっている、そんなことは。やり直しなど考えられない…わかっている。それは始祖ブリミルに対してとても失礼な行為になることも、わかっている。

「とにかく、やり直しは認められない。続けなさい」

そこで、私の召還した使い魔だと思われるもの（認めたくない）が、目を覚ました。

「痛ったあ」

どうやら、腰をうつたようだ。腰がひりひりと痛んでいる。

私は、目を開けて辺りを見回す。そこは、私の薄暗い部屋とは違う。開けた草原…

どうやら、召還されたみたい。貴族の証であるマントを羽織った、みんな同じような服を着た男女がたくさんと、一人の年配の男。それと、大きな塔のような建物が見える。ここには、この塔とこの服装には見覚えがある。お姉様が通っていた

トリステイン魔法学院。

確か、二年生に「使い魔召還の儀式」という、行事があったような。

そんなことを考えていたら、隣にいた少年が目を開けた。

「痛えー」

俺は、目を開けて周りを見渡した。そこで、ギョツとする。

ここは、どこだ？俺は家に帰る途中で…ていうか、何で太陽が！？
今は夜のはずなのだが…

周りには、マントを羽織った男女がたくさん。なんだ？コスプレか？
どこかの宗教団体か？

俺、拉致られた！？

「あなた、平気？」

いろんな考えにふけっていたら、隣にいた女の子が声をかけてきた。
「うわあー！」

いきなりで驚いて、思わず後ずさる。…後ずさっては見たが、この子はマントを羽織ってはいるが、周りのコスプレ野郎達とは、どことなく違う感じがした。

「ねえ、平気？」

「あ、ああ。平気だ。ちょっと、腰を打っただけだから」

周りのやつらは何かわからなくて、怖いけど…この子の雰囲気はなんとなく安心できた。

「ちょっと、あんたたち！」

突然上方から、罵声が聞こえた。

「ちょっとあんたたちなんなの？もしかして、私の使い魔？」
そこで周りの声がやんだ。

最悪だわ。こんなのって。

「ええ、そう。あなたが、召還したメイジさん？」

女のほうที่答えた。

ということは、やっぱり使い魔かあああああ……！……！私は、ドラゴンとか、グリフォンとか、そういうの！そういうのがああああ欲しかったのに……！！！！

1 悪魔の子（後書き）

初めての投稿で、あまりうまく書けた気がしませんが、ちまちまと最後までかけるようがんばります！

2 初めて・・・

この二人が私の使い魔として、召還された・・・認めよう・・・

「ええ、そうよ。私があなたを召還したメイジよ」

「ミス・ヴァリエール。そろそろ、コントラクト・サーヴェントを。時間がないもので」

「あっはい。・・・あのミスタ・コルベールあの・・・どちらと・・・ですか？」

「・・・」

コルベールは、黙ってしまった。

「両方とすればいいんじゃない」

ツエルプストーめ、何言ってるのよ。

よくみると、女のほうはマントを着ている。どうやら貴族のようだ。でも、

男のほうはこの辺では見ない顔をしている。マントを着ていないから平民だと思うんだけど・・・

そう私が想像をめぐらせていると

「ミス、ミス・ヴァリエール！」ミスタの声が強くなった。

そういえば、時間が押しているんだったかしら。

私は、杖を男の額に当て、呪文を唱えた。

「五つの力を司るペンタゴン。このものに祝福をあたえわれの使い魔となせ」

「な、何！？」

いきなり額に棒を当てられ変な呪文みたいなのを唱えられた。

もしか、生贄！！！！！！

俺脱出を試みようと思つて後ろへ後退するが、

「な、何よ。やりづらいじゃない」何がやりづらいんだよ・・・
生贄か！俺を殺しづらいとでも言うのか、この・・・少女は！・・・
でも、意外と可愛いかも

俺が、そう思つた瞬間だった。

少女が、俺に顔を近づけて・・・ああああああああ！！
こいつ、こいつ~~~~俺のファーストキスを・・・

「さて、次はあなたね」

ルイズが私のほうを向いた。

ルイズは耳まで真っ赤だった。ふふっ自然と笑みがこぼれる。
「な、何笑つてるのよ！！じゃ、じゃじゃあいくわよ。」

五つの力を司るペンタゴン。このものに祝福をあたえわれの使い魔となせ」

私はルイズと契約のキスをした。（女同士つてのもどうかと思うけどあくまで契約だから）

「熱っ、なんだこれ身体が何か変だ。てめ、何しやがった!？」

「すぐ終わるわ。使い魔のルーンが刻まれるだけだから」

「そんなもん、刻むなっ」

2人の会話が聞こえた。その直後、私の身体が熱を放った。
「っ！」

こらえ切れなくて、声が漏れる。けど、熱はすぐに治まった。

熱くなった右手を見ている。そこには、古代文字のルーンが刻まれていた。

・・・私、使い魔になれたのかな?・・・まるで実感がわかない。
本当に私は使い魔に?・・・

でも、そんなこと考えるのは後にしよう。今はこのルイズと、不思議

議な少年についていかなきゃだから。

私は、少年をかかえおこし、ルイズについて魔法学院の校舎へ歩き出した。

さすが、貴族の部屋。

自分もだけど、私は悪魔だしこんな豪華な部屋で生活してだなんてすごい！私の心は拍手喝采だった。

学生寮がまさかこんなだっと思って思ってもみなかった。

ここは、ルイズの部屋。私と少年はルイズに案内されて部屋へとやってきた。

天蓋付のベッドに大きな出窓、木のテーブルに、立派なドレッサー。こんな部屋に住んでいるだなんて本物の貴族はすごいなあ、とうっとり見つめてしまう。

つれてこられたここは、この少女の部屋なんだろうか？こんな部屋ゲームとかでしか見たことないぜ。大昔の貴族とか、王様とかが、住んでそうな感じ。

しかも、ここ日本か？日本にはさっきのただっ広い草原はなかったような気がするし、こんな部屋だって、住んでる奴いないぜ？きつと・・・

「さて、まずはあんたたちの名前を聞こうかしら？」

私は、部屋につれてきてから、不思議そうな目で部屋を眺めていた2人に話しかける。

「才人。平賀才人」

「変な名前」

「うっせっ」

こいつ、貴族に対する礼儀ってもんがなっていないわ。平民みたいだし。

「あなたは？」

次にマントを羽織った少女の方に話しかける。わたしと同年か15、6ぐらいだと思う。同じくらいの背丈だし。でも、あんまり見かけない髪の色してる。黒色なんて、トリステインでは、珍しい。

「キリ・リスレム・ド・キセイント」

ド・キセイント……どこかで聞いたことがある気がする。何だっ
たかしらええと……

「あ！公爵家の！」

「はい」

まずいわ、使い魔は床で寝かせておけばいいや、とか思ってたのに
公爵家じゃ。

でも、主人になるべきメイジが何故召還されたのだろう……

とにかく、オスマン学院長のところに。

「いいかしら、使い魔。ちよつと出かけてくるから部屋にいなさい」

私は、ドアをあけて駆け出した。

「おい、ちよつと待て！」

後ろから声が聞こえたけど無視！学院長室に向けて全速力！

生意気な少女が、出て行ってしまったドアを見る。

ここは、絶対日本じゃないと思ったから聞こうとしていたのにどっ
か行っちゃったし……

ていうか、公爵ってあの貴族階級のか？使い魔って一体！？

「頭なんか抱えて平気？」

つい俺は頭まで無意識に抱えて悩んでいたらしい。

深刻だからなあと自分で言い訳してみるが、別に何か解決するわけじゃない。

「おおい。何悩んでるの？ここがどこかって話？」

「えええー！」

この子俺の考えてることわかった？でも、まあいいや。この子に聞けば済むことじゃないか。

「そうそれ、ここがどこか説明してくれるか？」

「うん。いいよ」

そういつてニコツと微笑んだ。可愛い。さっきの桃色髪も可愛かったけど、この子もなかなか。

「じゃあ、ここはどこだ？」

「ハルケギニア大陸トリステイン王国のトリステイン魔法学院」

「は？」反射的に聞き返してしまう。トリスなんとか？世界中探してもそんな地名ないだろ？

「トリステイン王国」

「ああ、トリステインね。・・・さっきから、思ってたんだけど何で俺の考えていることがわかるんだ？偶然じゃないだろうに。」

「えつと、ね、えつと・・・驚いたり怖がったりしない？」

なんとも自信なさげに聞いてくるな。

「しないよ」

「誰かに言ったり、捕まえたり、殺したりしないって約束できる？」

そんなやばいことなのか・・・

超能力ってそこまで危ないものか？

少々絶句しながらも頷いた。

「・・・私が悪魔の子だから」

・・・何？悪魔？

何だよ悪魔って冗談ならもうちょっとうまいのにしとかなきゃだろ。

「冗談じゃない」

顔を真っ赤にして反論かよ。けど、悪魔って・・・

「このハルケギニアには悪魔の子って呼ばれる子供がまれに生まれるの。家族とかの遺伝とか関係なしに、悪魔の血が流れるっていう・・・知らないの？」

そんなこと知らない・・・やはりここは違うところなのだろうか・・・

・
「悪魔の血・・・」

ここまで、真剣に話しているんだから本当の話だよな。

悪魔の血かぁ、ゲームで出てきそうだな。

「それで、悪魔の子には、相手の考えていることがわかる・・・相手の思考を覗ける、そういう力があるの」

「だから、俺の考えていたことがわかったってこと？」

「そうよ・・・怖がらないの？」

「え、なんで？」

「私、悪魔の血を引いているのだよ。悪魔の子なのだよ？」なんて、そんなこと聞くのだ？

「だからなんなんだよ」

「・・・信じらんない」

え、信じらんない？どういう意味だそれ。俺、変な事言っただか

「ちがう、変な事・・・な・・・なか・・・ぐすん」

私の頬には、涙が流れていた。悪魔の子を怖がらないなんて・・・嬉しい。たとえ、この世界の人じゃないから、知らなかったとかでも、初めて私を怖がらない人に出会えた。それだけで、自然と涙が流れていた。

「お、おい。どした？なんで、泣く？」

あせった感じでサイトが聞いてくる。私がいきなり泣き出したのだから驚くよね。

ブラウスの袖で涙をぬぐって、笑みを浮かべる。

「大丈夫。ちょっと嬉しかっただけ」それ故に嬉しすぎて、つい素直な気持ちを口にしてしまう。

「嬉しかった？」

「うん。今まで怖がらない人なんて、いなかったから。父様も母様も私を邪魔者扱いだったの。領地の人たちも怖がって話したことなかったし」

「なんで、怖がんだよ。おかしいだろ、そんなの。同じ人間じゃない！」また、泣きそうになる。私生きていてよかったあ！！！！

「ありがとう。ところで、なんでそれを知らなかったの？」

「俺、初めて聞いたよ？そのトリステインっていうのも」

そのとき何か鳴き声のようなものが聞こえた。
それは鳴き声というよりは・・・

「ねえ、今の鳴き声みたいなのって何の？」
恐る恐る聞いてみる。

「何って、ドラゴン以外の何があるの？」

ドラゴン・・・

「異世界！ここ異世界！？」

「い、異世界？サイトはこの世界とは違うところからきたの？」

「ああ、俺の世界にドラゴンなんていない・・・そっかあやっぱり」
数秒の沈黙。

「えーと。私のことキリでいいから。これから、同じ使い魔として宜しくね」

「お、おう」え、使い魔？

結局、その日桃髪の少女が戻ってくるまで俺の質問攻めは続いた。

3 親近感

しゃかしゃかしゃか ジャボジャボ

「っ、冷てえっ」

俺は洗濯をしていた。なぜかという朝起きたら、

「使い魔でしょ！洗濯や雑用やるのは当然よ。さっさと洗濯に行つてきなさい！」

というルイズの罵声のせいである。昨日は床だったから腰が痛いし・

・

でも、まあ異世界に來たんだなっで感じた。

昨日のキリの話を整理すると・・・ここは、ハルケギニア大陸のトリスティン魔法学院でルイズは公爵家キリもたけどで、偉い・・・ってゆうか俺のご主人様なわけだし。

そんで、使い魔つてのは主人に仕えている生き物(?)で主人の目となり耳となり、主人の身を守る・・・つまりは用心棒ってところで・・その使い魔を俺がやるんだよな。はあ、なんか憂鬱。でもこの世界もなんか面白そうだし、ちよつと頑張ってみようかな。

「サイト、おはよう」

「おう、おはようキリ。・・・お前その格好・・・」

「驚いた？」

キリはルイズ達生徒と同じ制服を着ていた。マントは少し赤っぽい色だけど、

「似合ってるじゃん」

俺は素直に感想を言う。昨日着ていた使い込まれたような服より、綺麗で清楚な服のほうが似合う。

「ホント？ありがとう」

そう言つて笑つたキリの顔は異世界に來た俺に安心をあたえた。この子と一緒にならんだか、どうにかかなりそつな気がする。

「どうしたんだ。その服？」

「ルイズがね『貴族ならそれらしい綺麗な服を着るべきよ。オスマン学院長に戴いてきたからこの服を着なさい』って渡してくれたの。」

「こつちでは、貴族と平民ってけっこうな差があるんだな。俺は寝るのも床だし」

「確かに、差はけっこうあるね。でも、私も名前だけ出しね」そういつて寂しそうに笑った

「そんな顔すんなよ。・・・よし、終わったぞ」

洗い終わった洗濯物をかごに入れて、俺は立ち上がった。

「持つよ？それくらい」

「へ？いいよ、そんな重くないし。」

女の子に持たせるつてもなんか変だし

「私はメイジなんだから、そんなこと気にしないで甘えなさいよ」
キリは杖を取り出して、先をかごに向けた。

「レビテーション」

ふわっ。かごが途端に軽くなる。それはそのまま宙に浮いて俺の手を離れた。

「えええ！」俺は仰天する。種も仕掛けもない。魔法ってすごい！
「魔法ってすごいって？それがわかったら、メイジを頼りなさいな。あつそうだ、いい？サイト、メイジに頭きたり、むかついたとしても、決闘とかしちゃだめだからね」

「なんで？」

「生身じゃ魔法にかなわないの。まあ、一応武器は渡しておくけど」
キリが貸してくれたの是一本のナイフ。

「ダガーよ。何も持っていないよりはいいから。でも、しないほうがいいんだからね」

え？これで戦えと？

「だから、そう言ってるじゃない。」

俺、ナイフなんて使えたっけ？

「何も持っていないよりはって言ってるの。ちゃんと使えるはずよ。」

まあ、何かあったら使って「何か知ってるような口ぶりだけど、教えてはくれないか。俺はダガーをホルスターに入れベルトにさしておいた。これなら、パーカーに隠れるし。」
その後、洗濯物を干し俺とキリはルイズの部屋に戻った。

「遅ーい！」

私たち二人が部屋に戻るとルイズがベッドに座って待っていた。私
が起きたとき着替えはさせたからもう行く準備は終わったみたい。
少ししゃべり過ぎちゃったかな。

「さあ、行くわよ。使い魔ついてきなさい」

ルイズは扉を開けて先に出て行った。

どこ行くんだ？ってサイトの思考が伝わってきたから

「朝食を食べに行くのよ」

そう言つて、私はルイズのあとを追った。続いてサイトも駆ける。
昨日までの生活はなんだったんだろうって思うぐらい、今日は朝か
ら・・・いや、昨日召還されたときから楽しくてしょうがない。召
使たちに変な目で見られて、父様に悪態つかれるようなことは無い
し。ここでの生活は楽しそうになりそうっ。

そんなことを考えているうちに「アルヴィーズの食堂」についた。
大きい。また、目があちこちに移ってしまう。窓にはまったステン
ドグラスが朝日を受けてきらきら輝いていた。

私はルイズの席を引く。そこに座らせて・・・ええと私はどうすれ
ばいいんだろう。

「キリ、あなたはここに座りなさい」ルイズが右隣の席を指差した。

「へえ、豪華な食事だな」

「あんたは、ここよ」そういつて床を指差す。

「えっまた床!？」

「そうよ。平民がここで食事をするって言うだけでもものすごいこ
となんだから」

一応私は貴族だからだろうか。この制服もだし、悪いな。サイトは
かわいそうだし。

「有難う、ルイズ」いいながら私は席に着いた。豪華な食事だ。生
まれて今までこんなものは食べたことない（見たことはあるけれど）
。

俺は床かあ。これでも、地球ではって考えて馬鹿らしくなった。そ
ういや貴族と平民つてももの凄い差があるんだっけ。でも、さすがに
床つてのは・・・悪態をつきながらも床に座る。

そこには小さなスープと硬そうなパンが二つ。上の食事と見比べて
・・・ううん。少々うなる。なんだか虚しい。

そのうち、手を合わせて何かを言い出した。お祈りだろうか。それ
が終わると生徒たちは一斉に食べた。

「おい、鳥よこせ。肉よこせ」そう言っではみるけれどルイズは聞
く耳を持たなかった。

なんだか泣きたくなってきた。
ほんと。突然皿に肉がふってきた。上を見上げると、どうやらキリ
が落としてくれたみたいだ。

「あつ、キリダメよ。肉なんかあげちゃ。くせになったらどうすん
のよ」

ルイズがすぐに文句を言った。

自分はそんな豪華なの食ってるくせに・・・

「いいじゃない。同じ人間としてあれだけでは、可哀そうよ。平民
だつてもつとましなものを食べてる。それにこんなに食べられない
でしょ」

お、ナイスだ、キリ。まったくもってその通り！

「あなた、公爵家でしょ？こんな毎日のことじゃないの？」

「私小食なの」

俺は飯を食べ始めた。パンは固くて食べられたものじゃなかったけど、肉は旨かった。

朝食後、ルイズについて俺とキリは教室に向かった。

なんだか、教室というより大学の講義室的な感じだった。ほとんどが石でできている以外は変わらない。

ルイズの席に行くと椅子が三つあった。

もしかしてこれは期待しちゃっていいのだろうか？

「キリは私の左、サイトは私の右に座って」キター！！椅子だぜ！床ばっかりだったから、なんだか自分がおかしくなった気がする。

しばらくすると中年の男性が現れた。

昨日の召還のときもいた、確か・・・コルベール先生だっけ？

「みなさんおはようございます。では、火の授業を始めたいと思います」

日本とあまり変わらない、ただ数学の公式が魔法の呪文になっただけ。最初は興味しんしんって感じで聞いていたけど、すぐに飽きた。だって、覚えたって魔法使えるわけじゃないし。

「火の系統はどんな魔法ですか？」

コルベールがクラスに質問する。すると、一人手を上げた人がいた。

「ミス・ツエルプストー」

真っ赤な赤毛と真っ赤な瞳、それと女性らしい魅力的な体つき。ええと、キュルケだっけか。

「火は破壊がモットーですわ」

「確かに火はすべてを燃やし破壊することが出来る。だが、それだけでは寂しいと思わないかい？」

「それは、どういう意味ですか？」

「これを見てください」

コルベールは机の下からなにかを取り出した。
小さな機械のようだ。

「これは私が、作ったヘビ君というもののなんだが……。ここにこうして火を入れると。ヘビ君がぴよぴよこと顔を出すのだ！」

コルベールは杖を振ってやって見せた。
それが何？

とでも言いたげなクラスの視線。だが、俺はそうとは思わなかった。
あれは魔法というよりも科学に近いと思う。
なんとなく、親近感がわいた。

キンコンカンコン

授業が終わりコルベール先生は教室から出て行った。

俺はその後を追って教室を出て行こうと席を立つ。

「ちよつと、どこ行く気？」

少々声色を低くしたルイズの声が背中に響いた。

「ええーと、コルベール先生のところ」ダッ！！次の返答を聞く前に
教室から飛び出した。

行く寸前に「キリ、あと頼む。」と思考を飛ばして（俺、いつの間
にそんなことが出来るようになってたんだ！？）。

コルベール先生と話してみたい。

俺はそう思ったから、見失わないように必死に後を追った。

この距離だったら聞こえるはず……。そう思った瞬間

「コルベール先生！！」

俺は、叫んだ。

4 イヌだけど腹が減っては戦は出来ぬ

「もう、あんの馬鹿使い魔！ミスタ・コルベールのとこつて何よ？」

「さっきの授業で気になることでもあつたんじやないかな？」

私は悪態をついてひじをたてた。

「主人の言葉くらい最後まで聞きなさいよね」さすがは平民。なつてないわ。

なんであんなのが私の使い魔なのかしら。あんなの犬で十分よ。

そうよ、犬でいいわ、犬、イヌ・・・

「君は確かミス・ヴァリエールの使い魔の」

「平賀才人です。あの、コルベール先生と少し話がしたいんですけど・・・」

すると、コルベール先生は人懐こそうな笑みを浮かべ

「ああ、いいよ」と言った。

「この先に私の研究室があるんだ。そこでいいかい？」

「はい」

俺は先生の横について一緒に歩き出した。

「さっきのヘビ君・・・あれが少し気になつたんです。それで、すこし話してみたいなあなんて思つて」

「本当かい！！？サイト君にはあのヘビ君の凄さがわかるのかい！？」

もの凄い歓喜をあげた。あのクラスの様子だと、理解してくれる人はいないだろうからな。

「あれはエンジンのような感じでしたから」

「えんじん？」

俺は先生の実験室で、自分が異世界から来たことを話した。意外と

すぐに理解してくれた。

さすがエンジンを作っただけはあると思う。

「じゃあ君の世界には、そのクルマ、フネ、なんかあのへび君にあるようなえんじんと呼ばれるもので動いているのかい？」

「はい、そうです」

「それは、ぜひ見てみたいな」

コルベール先生は明後日の方向を見ながらそういった。

きつと、日本を想像して言ってくれたんだと思う。

「才人君、困ったことがあったら私のところにきなさい。力になる」

コルベール先生は最後にそういつてくれた。

く

コルベール先生と別れルイズのところに帰ろうとしていた俺だったが、校舎が大きすぎて迷ってしまった。それだけでも困っていたのだが、さらに追い討ちをかけるように腹の虫が鳴ってきた。

困ったなあどうしようと思っていたとき、腹をくすぐるようないい香りが鼻をついた。

これは、カレーのにおい・・・

俺はにおいに誘われるがまま歩いていった。

するとある部屋の前にたどり着いた。どこだかはわからない。

看板はあったが、ミミズがのたくったような字が躍っていた。こっちの世界の文字だろうけど、本当にこれが文字か疑ってしまう。

ぐ

再度腹の虫が鳴った。我慢してルイズを探すのもなんなので、ここは正直になることにする。

ドアノブを回して押す。少しだけ隙間を空けて、中を覗いてみる。

どうやらキッチンみたいだ・・・数人の男がフライパンや包丁、なべを持って料理を作っていた。

見ているだけで涎がたれそうになる。旨そうだ。朝の固いパンと肉（少し）、スープだけだったし・・・

「あの、どうかしましたか？」

いきなり後ろからかかった声に前につんのめり扉を全部開けてしまった。

何事かと、料理人たちがこっちを見てくる。

「あ、ええと・・・」

突き刺さる視線が痛い。

「おい、どうした小僧」

一番ここで偉い人だろうか、ひげを生やした男が声をかけてきた。どうしよう。

ぐ

この場でこのタイミングでまた腹の虫が鳴ってしまう。

ああ、俺かつこ悪・・・

「おなががすいているんですか？」

ドアのところで声をかけてきた女の子が俺の顔を覗き込んで問いかけてきた。

「うん」

誤魔化すのもなんなので正直に言う、すると。

「小僧お前貴族じゃないな？」

「・・・そうですけど」

「シエスタ、まだスープが残っていただろうかくれてやんな」

「はい」

どうやら、さっきの女の子はシエスタというらしい。メイド服が良く似合っている。

「どうぞ、こちらに」

俺はシエスタに手を引かれて、スープをもらった。

朝食の残りを作り直しただけらしいが、とても美味しかった。

「シエスタ、何かお礼がしたいんだけど。」

俺がそういうとシエスタは、

「じゃあ、生徒さん達の夕食を準備するのを手伝ってもらえますか？」

シエスタと一緒に貴族達の夕食のケーキを配っていたとき

「おーし。これで最後だな」

最後のケーキを机におく。

「はい。サイトさん助かりました。どうもありがとうございます」

「おい、メイド。僕のケーキを置き忘れてるぞ」

振り向くとキザッぽいような顔立ちの少年が椅子に座っていた。

「す、すいません。すぐにお持ちいたします」

シエスタがすぐにそいつの元へ走って行って謝る。

「まったく、何やってるんだ、君は。これだから平民は」

俺はその一言にカチンときた。

「おい」

キザ野郎に近づく。

「何だい？君は？・・・ああルイズの召還した使い魔か。」

「おい。シエスタは謝ってんじゃない。何でそんなこと言っただよ」

「そんなこと？平民が役立たずって言ったことかい？」

俺はキザ野郎の胸倉をつかむ。キザ野郎は、すぐに俺の手を払った。

「君は貴族に対する礼儀つてものを知らないのかい？」

「あいにくそんなものは持ち合わせてねんだよ」

「ふん。ならば僕が教えてやろう。広場に来い。決闘だ」

そういつてキザ野郎は出口に歩いていった。

「あ、あ、ダメ。サイトさん殺されちゃう」

シエスタが顔を真っ青にして震えていた。

「平気だよ。シエスタ。あんなキザ野郎、俺が殴ってきてやる」

「私が、私が謝れば済むことだから」

「大丈夫、大丈夫」

だが、シエスタは走ってどこかへ行ってしまった。

なんで、あんなに震えてんだ？と疑問もあったが近くにいた奴に場所を聞いて、俺はそこに向かった。

広場に着くとそこは生徒で溢れていた。

「諸君、決闘だ」

キザ野郎が声をあげる。すると周りから歓声が沸いた。

「逃げずにきたことはほめてやろう」

「誰が逃げるか」

「じゃあ早速はじめようか」

キザ野郎はバラの花を構えた。あれが杖らしい。どこまでもキザな奴だ。

「まって、ギーシュ！」

声が広場に響いた。声のしたほうを見ると、肩を上下させたルイズが立っていた。

こっちへ、歩いてくる。

「何やってんのよ、馬鹿使い魔！」

「何って見りゃわかるだろ？決闘だよ」

「そんなのわかってるわよ。ほら、早く謝っちゃいなさい」

「はあ？なんでだよ。平気だから、下がっててくれよ。」

ルイズの肩をおす。

「ルイズ。彼はそう言ってるんだ。やらせてやればいいさ。さて、改めてはじめようか」

杖を振ると青銅でできた人形が一体現れた。

「僕は青銅のギーシュ。君の相手はワレキユーレがする。いけっ」

ギーシュの声をあいずにワレキユーレが一気に間合いをつめてくる。
「がっ！」

一瞬のうちに俺の腹へ拳が当たる。速え。こんなのありかよ。

キリがどうして喧嘩するなって言ったのかわかった気がした。
よろよと立ち上がり、ギーシュの方を向く。

「今、謝れば許してやるぞ?」

挑発気味に口の端をあげた。

「誰が!」

そう言ったものの、あれにどう勝てばいいんだ?

「サイト!」

キリの声が聞こえた。辺りを見回す余裕はない。ワレキューレが向かってくる。

「ナイフを使って!」

考える暇なんてなかった。俺は腰からナイフを抜く。

すると、左手のルーンが光った。そして、

ナイフのもち手が手になじんだ。身体から力が満ち溢れた。身体が軽くなるった。

今なら空が飛べそうだ。比喻ではなく本当に飛べそうだった。

ワレキューレを見据える。

驚いた。速くて見えなかった動きがスローモーションのようにゆっくりに見えた。

いける!ナイフをワレキューレに突き刺した。崩れ落ちて、土に戻る。

「な、」

ギーシュは驚いて杖を振った。するとワレキューレが7対出来上がる。

だけど、ほとんどとまっている人形を見るに変わらない。

一番前にいた奴をナイフで引き裂く。

次に左右から来た2体を跳躍してかわし、その頭を踏んづけてさらに跳躍。

真下に見えた4体目には、ナイフを脳天から突き刺してやった。刺したナイフを引っ抜きすぐ正面に来ていた5体目は、横に薙いだ。手首を返して6体目も。

最後にギーシュの前にいたワレキューレを裂き、ギーシュにナイフを向ける。

「ひい！……！」

ここまでほんの数秒。ギーシュは杖を投げ捨てて、両手を挙げた
「僕の負けだ」

「勝ったぞ……！平民がギーシュに勝った……！」
広場が歓声に沸いた。

5 いきなりそんなこと言われても・・・

ふわぁー

気づくとまたあくびが出ていた。ギーシュとの決闘に勝って、その夜。

まだそんなに遅い時刻ではないのに、あくびが耐えない。

まあ、いろいろあったし。と簡単に片付けておく。

あるとき、左手のルーンが光っていた。握ったこともないナイフが上手く使えたのも、このルーンのせいなのかもしれない。それに、身体が軽くなって、走るのも速くなった。

運動神経はそれなりにあったほうだが、あんなに速くはなかったし、あんなに高く跳べなかった。

腰のホルスターからナイフを抜き、握ってみる。

決闘のときほどではないが、ルーンが輝きだした。一体このルーンには、どんな力があるんだろう・・・考えてもわかるわけがなかった。俺はこっちの知識なんてろくにないし。

というわけで、必然的に聞きに行くしかない。

俺は腰を上げて歩き出した。

さっきのサイトはなんだったんだろう。ベッドのふちに腰掛けて私は1人考えてみる。

最初は殴られて、でも、ナイフを持ったら速くなって・・・あつという間にフレキュレを倒してしまった・・・わからない。
ぶほ

ベッドに身体を投げ出して横になる。すると、自分の髪が視界に入

った。

お母様譲りの桃色の髪だ。それを見て思い出す。ゼロのルイズと馬鹿にされていた私だったけど、メイジに勝ってしまっ平民を召還できるなんてすごいのではないか。それに、普通は1人のところを2人も使い魔を召還したのだ。

そうよ、私はすごい。なんたつて、公爵家だもの！今まで馬鹿にされていた分、始祖ブリミルが与えてくださったものなの！

おお、偉大なる始祖ブリミルよ。感謝いたします。

もう、サイトの力のことなんてどこかに吹っ飛んでしまった。ルイズは顔に満面の笑みをうかべ、枕に顔をうずめた。

一方、サイトはあるところに向かっていた。

魔法学園の端のほうにある、小さな小屋。そこはコルベール先生の研究室。

困ったことがあれば来ていいと言ってくれたのもあるし、この教師なので物知りだろうと考えたからだ。

「コルベール先生！」

俺は勢い良く扉を開け放ち研究室へ足を踏み入れる。薬品特有の匂いが俺の鼻を突いた。その匂いに顔をしかめながらも、中を見渡す。椅子に腰掛けていたコルベール先生が手をあげていた。

「やあ、サイト君。どうしたんだい？何かあったのかい？」

「少し聞きたいことがあつて」

「構わないよ。今日は研究室がにぎやかになってくれて嬉しいな」
コルベール先生は目を細めて笑った。

「え？どういうことです——」

「あれ？サイト、どうしたの？」

俺が言い終わる前に奥から、声の主が顔を出した。

「キリ！？」なんでここにキリが？

「コルベール先生に頼んで研究室にある本を見せてもらっていたの。」

珍しい本屋に売っていないようなのがたくさんあるから」

へえー。いつの間にコルベール先生と打ち解けていたキリに思わず関心。昨日は悪魔がどうかいってたし、いつも1人だったって聞いてたから他人と話すの苦手かなって思っていたけどどうやら、そうでもなさそうだ。

「ところでサイト君、私に聞きたいことというのは？」

「ええと、使い魔のルーンのことなんですけど・・・」

「ルーン？」

俺はコルベール先生の向かいに腰掛けて、話し始めた。ギーシュとの決闘のときルーンが光って握ったこともないナイフが扱えたことを・・・

「なるほど。サイト君はそれが一体何なのかを聞きに来たということかな？」

コルベール先生が話を整理する。

「はい。そんな感じです。で、使い魔になると不思議な力がつく、とかあるんですか？」

「まあ、言葉を理解したりとか出来るから力はずくと思うんだが・・・人の使い魔は前例がなくてね。私にも詳しいことはわからないんだ。力になれなくて、すまないね」申し訳なさそうに言葉を濁した。

「そうですか・・・」

コルベール先生にはわからないか・・・

「ガンダールヴ」

キリが本から目を離さずにそう呟いた。

「ガンダールヴ・・・まさかあの伝説のものかい？」

コルベール先生は目を見開いた。キリは持っていた本を机に広げた。うつつ読めない。なんて書いてあるんだろうか？

「サイト、ここ」

キリはある挿絵を指差した。その挿絵は――

「俺のルーンと同じ」

「ここには、伝説の使い魔について書かれているの」

「伝説の使い魔あ？」

また、意味のわからんことを・・・

「確かに同じだ。珍しいルーンだとは、思っていたがまさか。ガンダールヴ！」

えっコルベール先生勝手に納得しないでくださいよっ！

「ガンダールヴはね、始祖として崇められているブリミルが用いた使い魔だと言われているの。このルーンはそのガンダールヴのルーン。同じってことはあなたがガンダールヴってこと・・・ええとついてこれてる？」

ショートしかけてる俺を見かねて言うてくれたんだろうけど、ぜんについていけない。わかったのは俺がその伝説のガンダールヴって力を持っているってことだけ・・・あれ？そういう話だっけ？「合ってる。簡単にするとそんなところ」

「すごいぞサイト君！現代に舞い戻ったガンダールヴ！」

コルベール先生は歓喜の声を上げた。

「ガンダールヴはあらゆる武器を使いこなした、と言われているわ。だから、ナイフが使えたの」

「あらゆる武器ってことは、剣とか銃とかも？」

「そうなるね」俺はあらゆる武器を使いこなす力を手に入れたってことか！！すげえ！！！！

「そういえば、ミス・キセイントは一体どんな力を？」

「その呼び方はちょっと。キリでいいですよ、先生」

「ああそうかい？まあそういうなら・・・ミス・キリは一体なにを？二人ともミス・ヴァリエールの使い魔なのだろう？サイト君だけと言うわけではないのだろう？」

呼び方あんま変わってない気がするけど

「ヴィンダールヴ。あらゆる生物を操ったと言われている使い魔です」

「それも伝説？」

口をあんぐりあけている先生はほおつておこつ。

「そうよ。伝説ぞろいね」

キリはニコツと笑った。

ガンダールヴにヴィンダールヴ・・・

良くわからないけど凄いことなんだろう。

まあいきなり伝説なんていわれても実感わかないし。

「凄いよ！才人君、ミス・キリ！」

「先生・・・そんなに喜ばなくても・・・」

「珍しいのよ、伝説だし」

まあ一応伝説だしね・・・

「2人ともついてきてくれ。学院長に報告に行く！」

扉を勢い良く開けて走っていった。扉を勢い良く開けて走っていった。

先生の目にはもう俺たちは映ってないんじゃないか？

「多分ね」

呆れたような声なのに表情はにこにこしていた。

「何ボーっとしてるのよ、追うでしょ？」

「お、おう」

俺とキリは先生の後を追った。

「ミス・ヴァリエールの使い魔の二人がガンダールヴとヴィンダールヴだとおおお！！！」

コトを話し終わる前にオスマン学院長は椅子から立ち上がり、コルベールに歩み寄った。

「はい、そうです。これは大発見です！！すぐに政府に報告を」

コルベールもオスマンに負けず劣らずといった具合に興奮はつづい

ており、声を張り上げた。

「おっ」

こちらを向いたオスマンが咳払いした。俺とキリが2人の剣幕に引き気味なのをわかってくれたんだろうか。

「おほん。それはならんぞ、ミスタ」

「えっ何故ですか？」

コルベールは不思議そうな表情で質問する。

「暇をもてあましている政府のことじゃ。大事な生徒が暇つぶしの道具にされたらたまらんからのう・・・サイト君、ミス・キセイント」

キリがそこで言葉をさえぎった。

「キリで結構です。私も今は使い魔です。貴族扱いしてもらわなくて構いません」

「ではサイト君キリ君、二人は自分が伝説の使い魔ということは出来るだけ言わないで欲しいのじゃ。物騒なもので何があるかわからないからのう」

「はい。わかりました」

俺とキリはそろって頷いた。

「宜しい。ではついてきなさい」

オスマンは引き出しからどこかの鍵を取り出すとそれを持って歩き出した。コルベールもそれに続く。

俺とキリも顔を見合わせると2人の後に続いた。

俺たちが向かったのは宝物庫というところだった。扉に大きな鍵がついていて、大事なものが入っているということがわかる。何故ここに？

その疑問はすぐに解決した。

扉を開けて中に入ると、不思議なものがたくさんあった。オスマン

は立ち止まることなくどんどん進むので尋ねることが出来なかった。
いくつか小さな部屋を通り抜けたところで、立ち止まる。

「サイト君、見てくれ」

オスマンは俺の前に一本の剣を差し出した。ずいぶん大きくて太い剣だ。

「こ、これっ！」

その剣を見たキリが驚きの声を上げる。

「何？」

「この剣はデルフリンガーといって、大昔ガンダールヴが用いたという剣よ」

「デル・・・なんだって？」

「デルフリンガー。てか、わかって言ってない？」

「言ってない」

俺とキリが少々口論していると、どこからか年のいったオヤジの聲が聞こえた。

「なんだい？うるせえなあ。せつかく人が気持ちよく寝てんのによ。う。ああ？」

「え？」

俺は剣を凝視する。オスマンが持っていた剣が鞘から少し飛び出しカシャカシャと音を立ててしゃべっていた(?)

「この剣は意思を持つインテリジェンスソード。だからしゃべるまじすか——！！どれだけ常識破りなんだよ異世界はっ！！」

俺がしゃべる剣に驚いていると今まで口を閉じていたオスマンが口を開いた。

「サイト君。この剣を君に上げようと思うのじゃが」

俺のほうにオスマンが剣を差し出すと、カシャカシャとしゃべる剣デルフリンガーが口を挟んだ。

「何言ってんだい、おりゃこんなばうずの持ち物なんぞ・・・おでれーたおめえ使い手かー！！」

「へ、使い手？どゆこと？」

「まあいいさ。俺様を握ってみな」

「ああ」

オスマンからデルフリンガーを受け取り柄を握った。すると、ギースュと決闘したときのようにルーンが輝きだす。

「貰ってくれるかな？ここにあってもしようがないしのう」

「はい、しゃべる剣なんて面白いです。ありがたくいただきます」
コルベールに鞘を背中にベルトでとめてもらいデルフを納めた。

オスマンはデルフの下段にある木箱を今度はキリに差し出した。

「開けてみなさい」

キリは木箱を開けた。そこには青白い一本の横笛が入っていた。

「わあ。綺麗な笛・・・」

キリはそつとつかんだ。俺の世界の単位でいうと20センチメートルくらい。

「その笛はヴィンダールヴが使っていた笛なのじゃ。詳しいことはわかっておらんが、たくさんの獣を一度に扱うときに使われたといわれておる」

オスマンが説明をしてくれる。

「これは、私が持っていていいんでしょうか？」

「うむ。置いてあるだけより、使ってもらえたほうがその笛も嬉しいじゃろう。大切にしておくれ」

オスマンはしみじみと言った。

「はい。ありがとうございます」

俺とキリはもう一度オスマン学院長とコルベール先生にお礼を言つて宝物庫を後にした。

6 飯抜きを使い魔がすること

コルベール&オスマンに剣と笛をもらい、部屋に戻るとベッドですやすやと寝息を立てるルイズがいた。2人はすばやくベッド……いや、床につき眠りについた。

「翌日」

「こら！いつまで寝てんのよ、この馬鹿使い魔ああ！！！」

耳を裂くようなルイズの罵声でたたき起こされた2人の使い魔「ルイズの言う馬鹿使い魔」は、ルイズの雷2発目が落ちる前に不機嫌顔ルイズに剣&笛をもらった経緯を話し、雷を防いだ。

ルイズの言うところ「ミスタ・オスマンに貰ったならいいわ」だった。買いに言ったならば怒られただろう。

そのことで、寝坊したことを忘れたかと思いきや「帰りが遅い！飯抜き！」のお言葉を頂き、俺らの飯抜きが決定した。

「うう腹減ったあ」

ぐぐと俺の腹の虫が己の空腹を知らせる。

「まあ、我慢するしかないんじゃない？」

キリに軽く流され俺の腹の虫はもう一度鳴く。俺は捨てられた子犬並に惨めだと思う。

「朝だけじゃない。昼はきつと食べれるわ。捨てられた子犬より扱いはいいと思うんだけど……」

「あの娘っこは性格ひん曲がり気味かい？」

会話の途中でいきなり口を挟んできたのは、昨日から俺の相棒となったデルフリンガーことデルフ。かしやかしやと俺の背中言葉を発す。しゃべる剣インテリ……なんとかソード。

「インテリジェンスソード」

とつさにキリが訂正。俺の記憶力はそんなに悪かったっけ？と疑ってしまふ。こつちに来てからもう1週間になるけどまだ脳は慣れないんだろうか？

「ところでサイト、剣の練習でもしたら？」

「練習？持ったらこないだみたいによつつけられるんじゃないか？」
キリが呆れたような顔をする。

「こないだ持ったのはナイフ。今背負ってるのは大剣よ。構えるだけでも大変じゃない？それにガンダールヴの力は運動能力やスピード、反射神経が上がるだけで、剣の扱い方とか覚えておかないと、レベルの高いメイジは倒せないと思う」

そうなのか、てかそんな真顔で言うなって。

「この娘っこのいうとおりだぜ。せっかくあの退屈ところから出られたんだ。早死にされて逆戻りなんておりゃ勘弁だ」

キリに加えてさらにデルフも・・・はあやるのか練習・・・でも、どうやってだ？

「私は少し剣を使える。まあホント少しだけど。でもまずは体力をつけたほうがいいかもね。」

サイトじゃまだデルフは振り回せない」

「な！俺はそんなへなちよこじゃねえぜ。ほらちゃんと・・・うわあ！」

俺はデルフを鞘から抜き振り下ろす、がデルフの重さに負け前のめに倒れた。

「うわあ相棒！いきなりなんだよ！」

「はあだからいったのに・・・」

地面にどかっと落とされたことに対して不満を言うデルフと溜息をつくキリ。誰か俺の心配しろ・・・

「レビテーション！」

いつの間にか杖を出していたキリがルーンを唱えデルフを持ち上げてくれる。俺も服についた汚れを手で払い、立ち上がってデルフを受け取る。

「ありがとう。・・・キリの言うとおりみたいだ」

「わかってくれればいい。じゃあはじめましょうか！」

早速俺はキリに教えてもらってトレーニングを始めた。なかなか立派なトレーニングメニューだった。走ったり腹筋や背筋・・・終わったとたんに地面にぶっ倒れた。

「サイトお無事？」

「も、もダメ・・・」

明日には盛大に筋肉痛になりそうだ。

「継続は力なり！毎日やってね」

「嫌っ無理だから！」

とつさにそんなことをいったが、ニコツと無邪気に笑っていたキリが悲しそうな目をするので

「・・・冗談だって、わかった。毎日やるよ」と口が動いてしまった。

「ホント！？頑張つてね、サイト！」

そこでもう一度、満面の笑み。うっと俺が息を呑む。どうやら俺はこの表情に弱いようだ。

これが見れたんだしいいだろう。とか、キリにそういわれたら頑張るしかないかと思ってる。・・・まあいつか。デルフが使えなかったの、くやししい・・・明日も頑張りますかっ

「うん。頑張るよ。」

だから俺も笑顔でキリに答えるのだった。

あの後、朝食を終えたルイズと共に今日の授業を受けた俺たちはようやく昼飯にありつくコトが出来た。

「サイト！そんなにガツクんじゃないわよ！」

昼飯のサンドウィッチを豪快に食べている俺。そんなの気にしてらんねえだって・・・

「腹へってたんだもん」

そんな俺にルイズは更に怒りだし

「綺麗に食べなさいって言ってるでしょ!!」

・・・爆発した。

「まあしょうがないでしょ。ルイズ・・・」

そんなルイズをなだめるキリ。でも、まだ苛々は収まらないようで

「晩御飯抜きよ!」

「えええええええええつ。そんなあ」

俺は肩を落とした。

「ご主人様の言うことを聞けない使い魔にはご飯なんて食べさせてあげない!」

これは決定事項だ、と言わんばかりのルイズを見て俺はキリに救いの手を求めるが、キリは顔の前で手を頭の前で下げた。
そんなこんなで俺の晩御飯抜きが決定してしまったのだった。

「腹減ったー」

夕日に染まった魔法学院に背を向けて俺は木の幹に寄りかかって声を漏らす。

「災難だったな、相棒」

俺の独り言とも言える言葉に返信をくれるデルフは木に立てかけてある。

「はぁーまったく食べ方でグチグチいうなってんだ」

俺の腹はもう限界で黙っていることは出来ないらしい・・・次々と愚痴を漏らす。

うじうじしているのはらしくないと思うけれど、人間だもの腹が減っちゃ仕方ないっ!

「こらっ開き直るな」

幹の後ろからひよいと顔を出したキリに頭をこづかれた。口ではあ

あ言いながらも表情は苦笑気味だ。

「飯終わったのか？」

「うん。今日も美味しかった、ここに来てから毎日満足に食べられて幸せよ」

真直ぐ夕日を見ながら言うキリが羨ましい。だから、俺はいつもならしないすぎる様な目を向けてみた。

「何？」

いかにも作ったような顔でキリは俺を見てくる。

・・・絶対、わかってやってるよな

「腹が減った」

そのキリの態度が空腹の腹を刺激し、俺はちよつと怒り気味。

俺の答えに反応せずキリは視線を絡めてくる。

数秒の沈黙・・・キリが口を開いて唐突に前の会話を繋いだ。

「どれくらい？」

「はい？」

予想外の言葉に反射的に答える。

「だから、どのくらいお腹すいてるの？」

キリが主語を入れてもう一度問い直した。

「えっと・・・ハンバーガーを10個入れても満腹にならない位？」

「はんばーがー？」

それって何？と聞いているんだろうか。こつちの世界にはハンバーガーがないのか

「パンの間に野菜とか肉とかを挟んだものなんだ。俺の世界のポピュラーなファーストフード」

キリは何度か無言で頷き

「・・・多分わかった」

「言葉が足りないか？」

「私の理解力が足りないだけかも・・・今サイトの思考を読んだけどハンバーガーって美味しそうだね」

再び視線を夕日に戻し、俺の隣にキリは腰を下ろした。

「思考って映像を含んでるのか？」

「いやそうじゃないけど、集中すれば読めるから。本当に好きなだね、ハンバーガー」

「まあな」

俺も腰を下ろして夕日を見た。半分以上もう沈んでいた。振り返ると校舎の向こう側は空がもう赤くなかった。

「あ、忘れる前にこれを」

キリが手に持っていたものを俺の前に出した。

「おにぎり？」

「当たり前」

あげるといって感じで俺の手にそのおにぎりを落とす。すると丸いそれは手の上をころころと転がった。

「マジ？さんきゅー」

空腹の腹に飯を送り込むためそれを口に放り込む。塩がかかっていて美味しかった。

「メイドの子ににぎらせたの。一皿持ってくるとルイズにばれそうだったから。美味しい？」

「ああ。本当に助かるよ。悪いね、迷惑かけっぱなしだよな」

「いいの。気にしないで。私が好きでやってることだし。・・・それにね、こうやって普通に話すの凄く久しぶりなの。同年代の男の子はサイトが初めてかもしれない。前に話したよね？」

俺に目を向けてくるキリ。

「家のことだろ？」

だからちゃんと目を合わせて答える。

「うん。多分サイトが迷惑をかけるとかそれ以前に私が楽しんでいる、ここでの暮らしを楽しんでいるんだと思う。だから、気にしないでね」

俺から目をそらし、うつむいてキリは言葉を繋げる。

「・・・サイトは私が悪魔でも気にせず接してくれる。それがね、なによりも嬉しい」

そう言つて、キリは笑顔を見せてくれた。頬をうつすらと赤く染めて・・・こんな顔をみせられると守つてあげたくなるな。悪魔だからって辛い事をたくさんさせられてきたって聞いたから余計にそう思う。俺よりまだ若いのに心はすごく大人だ。なのに・・・凄く脆そう。飯をもらつて、遊んで、守られて、そうやって暮らしてきた俺なんかとは違う何かがあるんだ、キリには。こっちの世界にいるうちは、出来るだけそばにいてあげよう。それで、何かが変わるといいな。もっと嬉しいって言ってもらいたい。

「お前が悪魔とか全然気にしないしつ。これから改めてよろしくつて事で」

「うん！よろしくね、サイト」

俺の言葉に再びキリの笑顔がはじけた。

7 買い物

数日後

俺はもう悲しかな日課になってしまった朝の仕事を終わらせ、キリがルイズの着替えをさせているときその部屋の前の廊下で休憩中。このときはひと時の安らぎでもある。廊下にある窓から、外を眺めて、空を飛び交うドラゴンやらなんやらを眺め「やっぱもとの世界に戻ってないか」と思う・・・これもそろそろ日課になってきたなふつと俺は苦笑する。

まあ今日も無事始まったしめでたしめでたし・・・と開き直るところは俺らしいと思う。キリのためにももうちょっといてやんなきゃなんだけど。

「サイト、終わったよ」

背後のドアを開いてキリが着替えの終了と俺の休憩の終了を宣告する。

「おう」

一言だけそう言って共に部屋の中へ戻る。すると仁王立ちしたルイズが視界に入った。

われながら様になっていると思うこのポーズ。腰に手をあてて足を肩幅に開く・・・今日も決まってますよご主人様。

「・・・使い魔、そこに並びなさい」

その命令口調の迫力に負けて俺はルイズに指差された場所に立つ。

「何？ルイズ」

いつもの口調でキリはルイズに問う。こういうところ、やっぱ貴族だなって思う。

「今日、欲しいものがあるから町に行ってもらいたい。ていうか

行つて来なさい」

「今日つて授業があるんじゃないか？」

ルイズの言葉を不思議に思った。

「何言つてるの？ 私は授業があるから、あなたたちに言つて貰うんですよ？」

俺の質問にルイズは綺麗に答えてくれた。

「何を買つてくればいいの？ 私1人でもいいんだけど・・・サイトはルイズについていたほうがいいんじゃない？」

キリは俺に視線を一度投げる。

俺が邪魔つてコト？ 1人のほうがいいってことなのか？？

「どうせいたつていびきかいて寝ているだけなんだし、連れて行つてくれる？」

ルイズは腕をくんでフンと鼻を鳴らす。その仕草に息を呑む俺・・・無意識だからな。と否定はしておく。

「わかつた行つて来る。馬は借りても平気？」

「ええ。馬小屋のところにいるメイドに言つて。じゃあこれメモだから」

ルイズは机の上におかれた紙と袋に入つたお金を差し出す。

「わかつてると思うけど、掏りには気をつけてよね。それとサイト！」

勝手に流れていく話を右から左へ受け流していた俺にルイズから声がかかる。

「町でキリに迷惑をかけないように。それと、寄り道をしないようにね、出来るだけ早いほうがいいけど、夕方には遅くても戻つてきて頂戴。それは今日の夜のパーティで使うものだから」

そつえばパーティがあるつて昨日先生が言っていた気がする。でも、何か余裕ないなあ。使うの今日の夜とか

「サイト、返事は？」

「はい。行つて来ます」

ルイズの命令で行くというのはなんだが、町には行きたいと思つて

いたからよしとしよう！

ファンタジーの世界だからなきつとレンガ造りの店が並んでいて、噴水があつて、ものすごく大きくて広くて・・・ああ楽しみだ。

その後朝ごはん（いつもの固いパン）を食べ俺とキリは町へと出発した。

「この馬暴れすぎじゃないのか？もう尻が痛い・・・」

もう学院から１時間は走っているはずだが見えるのは木のみ。太陽に照らされてきらきらと光って見える木の間を馬で駆け抜ける。頬にあたる風は春を感じさせる。こっちの季節はわからないが、もうすぐ日本という春なんじゃないか？

馬に落とされないよう首にしがみついて、キリに助けを求める。

そんな俺を見てキリは笑っている。

「サイトが首つかんでるから苦しいって言ってるよ」

「誰が？」

「その子、サイトが乗ってる馬。落ちないから首を離してあげて」俺は首から手を離し手綱を変わりに握る。すると馬は安定した走りを見せた。

「そのほうが楽でしょ？」

「うん。・・・ところで馬の言葉がわかるのか？」

「ヴィンダールヴは動物を操ることが出来るっていったよね？それと同時に言葉もわかるみたい」

「そりゃ便利だな」

「そう思う。・・・サイト、もうすぐ見えてくるよ」

それを聴いた瞬間視界が開けた。その眩しさに思わず目を細める。目の前には町が見えていた。もう、学院を出てから１時間半はかかっていた。

馬を塀に綱で結んで、早く行きたくてうずうずしていた俺はキリを
おいて町へと飛び込んだ。

「何だここは!？」

町を見た俺は想像との違いに啞然・・・。

店はレンガじゃなくて木のつくりだ。

道はとても狭い。

活気はあるようだが、想像とは全然違う。

「それは残念ねっ」

立ち尽くしていた俺の前に肩を上下させているキリが現れた。

「もうっ勝手に行かないでよ」

「走って来たのか？」

はあはあと荒かった息を整えながらキリが答える。

「見たとおり」

少しすねているみたいだ。

「悪かったな。早く見たかったんだ」

でも、少し可愛い。

「サイトのはハードルが高すぎると思うよ」

俺は苦笑した。

「俺も今そう思ったよ」

一度、ゆっくり一呼吸してからキリが顔を上げる。

「じゃあ、行こうか」

「おう」

もう少し期待してもいいだろうか。俺にとってのファンタジーが壊
されてしまいそうだ。

「店によって色々看板があるんだな」

次々に見えてくる看板を見ながら、キリに聞いてみる。

「サイトの住むところはそうじゃないの？」

「いや、そうだけど・・・文字のほうが多いからさ」

ハンバーガー屋にハンバーガーの絵は書いてないし、靴屋に靴の絵は描いてない。

「こっちではね、文字が書けない平民が多い。だから絵が描いてあるの」

「なるほどな」

「えっと、この店であつてみたいね」

キリが立ち止まったそこは、雑貨屋さんみたいなところ。ほかの店と違ってかわいい造りをしている。貴族相手の店らしい。

カランカランとドアを開けるとそこについていた鈴が店に客が来たことを知らせる。

店の奥から人のよさそうな顔をした男が姿を現した。

「いらつしやいませ、今日は何をお探しですか？」

「パーティーにつけていく髪飾りを探しに来たの。あるかしら？」

キリは素早く目的を言い品物を取ってこさせる。俺だけではこうはいか無いだろうな。一人じゃ来ないだろうけど。

「どうしたの？サイト」

キリは不思議そうな表情。こういうことは慣れているんだろうか？貴族のお嬢様は買い物なんかしないんじゃない？・・・キリは別か。

「いや、俺の世界と買い方違うから」

「興味がある。後で聞かせてもらおうかな」

「お持ちいたしました」

戻ってきた男が俺とキリの会話を遮る。

その手には二つの髪飾りが見えていた。赤と青。正反対の2色の飾り。

「どちらが宜しいでしょうか？」

じっとキリは2つを手にとって見比べる。交互に眺めてそれを俺に見えるように出す。

「どっちが似合うと思う?」

「俺に決めるって?」

その行動に驚く。こういうのって、さっと選べるものかと思っていたから。

ルイズの顔を想像して考えてみる。

「うーん・・・赤・・・じゃないか?」

「赤ね。わかったそうする」

うなずいて青を男に返し、

「この赤い髪飾りをいただけるかしら?」

赤をお買い上げした。

「ありがとうございます」

男の一礼とカランカランという音を残して俺たちは店を出た。

「思った以上に早く終わった気がする」

店を出たときキリがそんな言葉を漏らした。

「だな。てかさ、そういうのってキリ得意なんじゃないのか?」

さっき思った疑問を言ってみる。

「そういうの?何の話?」

キリはわからないようだった。不思議そうな顔をする。

「髪飾りだよ。そういうの選ぶのって得意じゃないのかなと思って

俺の世界では女の子は買い物とかお洒落とか大好きだから」

「ああそのこと?私はあんまりそういうことしないから、ただそれだけ」

笑みを崩して悲しそうな・・・いや、儚げな顔をする。またこの顔だ。キリには笑顔が似合う。こんな顔して欲しくない・・・

「変なこと聞いてごめんな。買い物はこれだけなのか?」

その顔を見ていたくなくて慌てて話を変える。

「これだけみたい・・・ねえサイト」

「何?」

「お腹空いたから、何か食べない?」

確かにまだ早いけどもうすぐ昼だ。言われてみると小腹が空いているかも。何か食べたい・・・でも・・・

「お金なら気にしなくていい。それくらい奢るよ?」

「・・・じゃあお言葉に甘えて」

「美味しいお店を知ってるの。行こう」

俺の前に立って、歩いていく。

一瞬見えた、キリの顔にはいつもの笑顔が浮かんでいた。良かった。安心して、キリの後を追おうとしたとき

「きゃーー」

甲高い悲鳴が響いた。

「なんだ!?!」

8 やっぱり街には・・・

突然あたりに響いた、甲高い悲鳴。

何があったのか？

2人は疑問に思ったが、それはすぐにわかった。

数メートル（ハルケギニアでは数メートル）先の交差点、左から大慌てで走ってくる男を発見した。

「大変だ！魅惑の妖精亭のこのジェシカちゃんが、貴族に絡まれてる！！！」

それを聞いて町行く人が口々に「可哀想」だとか「災難だ」とか言うが「助けに行こう」という言葉は出てこない。

平民にとって貴族が怖いモノ、敵わないモノだということがわかる。

「サイトっ何ボーっとしてるの！助けに行くよ！」
キリが俺の肘辺りを掴む。

「場所はどこ？」
走ってきた男に聞くと

「き、貴族様！」

質問の答えになっていない。

今まで慌てていて視界に入っていなかったらしい。

「貴族だ」「杖持ってるぞ」「じゃあメイジ様か！」

周りにいた人々もキリに気づいたらしく、口々にいい始める。

「質問に答えて！」

杖を男の眼前に突きつけていつものキリからは想像できない鋭い声

と態度。

その迫力に負けたのか男はおどおどした態度で答えた。

「は、はい。あの角を曲がってすぐです・・・」

「サイト、行くよ！」

俺の肘を掴んだまま、人を掻き分け走り出す。

「お、おう」

あつけにとられながらも、キリに引つ張られながらその場所に向かった。

「おい嬢ちゃんよー。貴族にぶつかつたいて謝っただけで許される
と思つてんのかよー」

1人の黒髪の女の子を取り囲むようにして男たちがそんなことを言
つていた。

貴族といつても魔法学院にいるようなのがすべてではないらしい。

まるで不良のような言葉遣い・・・

上品とはかけ離れた態度・・・

小も無いことで文句を言うその態度・・・

本当にそっくりで・・・むかつく・・・

「ねえあなた達何してるの？」

町を歩いていたら好奇心旺盛な少女という感じで、キリが声をかける。

「ああん？なんだてめえ」

一番図体がでかい男が顔を上げた。

「おお、貴族だったか。この嬢ちゃんがぶつかつて来て俺の服を汚
したのに弁償しなんだよ。おかしいと思わねえか？」

気持ち悪い笑い顔で同情を求めてくる男。

「そうね」

その同情を涼しい顔で受け流すキリ。

その言葉を不思議に思ったが、次の言葉を聞いて安心する。

「あなたのほうがおかしいんじゃない？」

それとともに素早く暗唱を済ませ1発目を飛ばす。

「ライトニング！」

威嚇攻撃として男の目の前の地面に当たってはじけた。

「・・・生意気なガキだな。お前らやつちまえ！」

威嚇を気にせず仲間とおもいき周りの男達に命令を出した。

「おおお！」

雄叫びを上げてそれぞれが杖を構える。

「サイト、あの子をお願い」

キリが男たちから目を逸らさずに小声で言う。

「うん・・・あいつらは？」

女の子に目に向けて場所を確認してから同じく小声で聞く。

「・・・まかせて」

そう呟いて俺とは反対方向に駆け出した。

・・・一人じゃ危ないだろう。相手は5人。

急いであの子を助けてキリのところへ行かなければ。

俺はデルフを鞘から抜いてガンダールヴの力を発動させ、猛ダッシュをかけた。

女の子を掴んでいた男に近づき、素早く腹に柄をめり込ませる。

「ウゲっ・・・」

うめき声を上げて崩れ落ちる男。

アニメでしか見たことがなく、初挑戦だったが案外上手くいったようだ。

倒れそうになった女の子を支えてしっかり立たせ、近くにいたおばさんに預けた。

「この子をお願いします」

キリに教えてもらって毎日続けていたトレーニングが効いているらしい。

デルフは重いと感じないし、思い描いた通りに体が動く・・・なにより、気持ちがいい。

「早くキリを助けなきゃ」

振り向いてデルフを構えなおすと、目の前に氷の矢が現れた。

「あの魔女っ子なら心配要らないと思うぜ、相当の実力者だ。あんな奴らじゃ手も足も出ないはずだ」

「ウインディアイシクル！」

キリが杖を下ろすと氷の矢は貴族向^{チンピラ}かって飛んでいく。数はゆうに10本近くあるんじゃないか。

「ぎゃあ!!!」

貴族^{チンピラ}の声が聞こえる。

氷の矢が地面に縫い付けた。

最後に残ったのは始めにキリと話していた図体のかいリーダー格の男。

そいつはみつともなく大口を開けて立っていたが、しばらくして。

「てめえよくもやりやがったな！」

キリに杖を向けて火球を放った。

このままじゃキリに当たっちゃう。

「キリっ！」

飛び出そうとした俺をデルフが止めた。

「相棒。あの魔女っ子に任せときな」

「ブレイド」

次の瞬間キリの杖の先端が眩い光に包まれる。

それで飛んできた火球を叩き割った。

「ヒイっ！」

火球の爆風が収まらないうちにキリは駆け出して、男の顔面にそれはもう素晴らしい跳躍で膝蹴りを叩き込んだ。

男は後ろに吹っ飛ばされ倒れた。鼻血が出ていた。

周りから感嘆の声が上がる。

貴族が平民を助ける、それは思っていた以上に珍しいことなのかもしれない。

「サイト、女の子は？」

俺の目の前に駆け寄ってきて問う。

「無事だよ。・・・キリは？」

「私に心配は不要」

どうやら思っていた以上にキリは強かったらしい。俺より年下で身長がルイズより小さい女の子。なのにそんなのが近くにいると俺はかっこがつかないな。

「あ、ありがとう」

助けた女の子がちがついてきて俺に頭を下げた。

「あの、私の家に来てくれませんか？お礼がしたいです」

これは、キリに向かっていった言葉。

この子の見た目に合わない敬語だった。それに、背の低いほうに敬語を使う。その不似合いに俺は堪えきれずにふいた。

それをじつと目でみるキリ。

「・・・私はキリ。あなたはジェシカだっけ？その言葉遣いはいいよ。これが笑うから」

その言葉にジェシカは笑みをこぼした。

「・・・じゃあ。よろしくキリ。さっきは助けてくれてありがとう。どうなるかと思った」

「無事でよかった・・・魅惑の妖精亭に案内してくれる？ちようどお腹が空いて何か食べようと思ってたから」

「それは、ぜひ！ついてきて、こっちだよ」

それから俺たちは、お礼ということで飯をご馳走してもらった。

美味しかった。でも、それより女の子を見てるほうが俺としてはご馳走になった。

太陽が真上から少し傾いたころ・・・といってもまだ2時を過ぎたところだが。俺たちは店を後にし、馬のところへ向かった。

そこで俺はあるものを発見した。

それは、キリの右腕のシャツが破れたところから見えた、血。

さっきあの男たちにつけられた傷なのだろうか。馬の紐を解いているときに指摘した。

「キリ、それあいっらにつけられた傷じゃないか」

「本当だ。気づかなかった」

腕を持ち上げて、そこを見る。それだけだった。

「・・・ばかつ黴菌はいるだろ」

その腕をとってポケットに入っていたハンカチを巻く。血は固まっているけれど、しておいたほうがいいだろう。

「いいのにこれくらい」

巻き終わるとキリはそんなことを言った。

「もつと自分の身体を大切にしなさい」

そんなキリについて保護者口調になる俺。

確かにキリは強かった・・・けど、それでも女の子なんだからもつと自分自身を大切にしたいと思う。

俺がかっこつかないとかそういう問題じゃない・・・そう自分に言い聞かせておく。

「わかったか？」

キリの頭をぼんぼんと叩く。

「・・・」

すると、無言で頷いた。

それから、馬に乗って俺たちは学院へと戻った。

9 力 感情 変化

「私と一曲踊ってくださいませんか？」

頬を赤く染めたルイズが俺に優雅な動作で礼をして・・・まるで夢の中じゃないかって思う。

試しに太ももを抓ってみる。

ー痛いー

やっぱり現実。

もう一度ルイズに視線を戻して、俺も頬を赤く染めた。

「・・・勘違いしないでよね！今日助けてもらったお礼なんだから・・・あと助けてくれたのに邪魔しないでなんて叫んで悪かったわ」

返事をしない俺の手を強引に握って音楽に合わせてステップを踏み始めた。

「ルイズ、俺ダンスなんてやったこと無いぞ」

そのステップについていけないわけじゃないと思う。でも、いきなりルイズが「一緒に踊ろう」なんていうから、なんかグチャグチャしている、俺の心。

「私に合わせて。ほらっ」

ルイズが俺の手をぎゅって握って引っ張る。すると心臓がばくばくと加速していくのがわかった。

可愛い、可愛すぎる。なんなんだよこの変わりようは・・・

何故ルイズがこんなことを言い出したかというと、それは数時間前にさかのぼる。

買い物から帰ってきた俺とキリが見たのは、巨大なゴーレムだった。まだ学院までは距離が少しあるところで「このまま少し離れたところを通り過ぎよう」と言っていた俺たちだったが、ゴーレムの上空に見覚えのあるドラゴンを発見した。

「あれ、タバサのじゃないか？」

タバサとはルイズのクラスメート。使い魔に青いドラゴンを連れている、読書好きの無口な女の子だ。

「本当だ、シルフィードみたい。でもなんで？」

俺とキリが顔を見合わせた。
そのとき、

「ファイヤーボール!!」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「ルイズの声・・・」

キリが呟く。やっぱり、でも何でルイズが!?

すぐさま方向転換をしてゴーレムのほうに走った。

ドン、重たい音が辺りに響く。

木々の間から一瞬ルイズが見えた。

ドン、ともう一度音が響いた。その音と同時にゴーレムが前に進んでいた。どうやら歩く音のようだ。

ゴーレムがルイズの目の前に来て、拳を落とした。

もう一度ルイズが魔法を放とうと杖を振り下ろすが、あれでは間に合わない。

「まったく、あいつはっ」

独り言をもらして俺はデルフを鞘から抜くと馬の上から飛び降りた。左手のルーンが輝いて1歩でトップスピードにのって走り出す。

「ルイズー！」

ゴーレムの下へ走っている途中キュルケの声が聞こえた。タバサとルイズとキュルケの珍しい組み合わせだ。一体何をしてるかルイズを助けたら問い詰めなきゃなんねえな。

ゴーレムの拳がルイズに当たる前にルイズを脇に抱えて近くの林に逃げ込んだ。

瞬間、ものすごい地響きがして土煙が俺とルイズを襲った。すぐにデルフを地面に放ってルイズが煙を吸い込まないように口を抑えてやる。

「ルイズ！平気か？」

土煙が止んで視界が少しずつ晴れてくると上空からシルフィードが降りてきた。

「ええ。無事よ、ていうか何であんたがここにいるのよ！？」

ゆっくりとルイズは目を開けた。愚痴愚痴言い始めたが、とりあえず俺は安堵の息を漏らす。

「おいルイズ逃げるぞ」

「嫌！」

そう叫んで、俺の腕から逃げた。

眼前でルイズがゴーレムに杖を向ける。

「ここで逃げたら馬鹿にされるでしょう。またゼロって言われるでしょう。嫌なの！そんなの嫌！だから逃げたくないの！・・・私はあのゴーレムを倒すの。だって敵に背中を向けたら貴族じゃないもの」

ルイズはまったく怖がっていなかった。ゼロと馬鹿にされていたけれど、自分が魔法を使えると信じていた。その背中は、とても大きく見えた。

「だから邪魔しないで……ファイヤーボール!!」

もう一度、ルイズのファイヤーボールが放たれた。ぼんと音がして、ゴーレムの体から岩が落ちる。確かに効いてはい

けれど、ゴーレムは再生してさらに身体を大きくした。これじゃ勝てない。壊しても再生してしまう。

ゴーレムが動いた。ルイズを潰そうと、拳が降ってくる。

「サイト!!」

キリが叫ぶ。俺はルイズを担いでその攻撃をかわす。暴れていたが、この際そんなの無視だ。

すると、頭上を飛んでいたシルフィードが目に残った。その上でタバサがシルフィードを指差している。

乗れってコトか!?

もう一度ゴーレムの拳が飛んできて。今度は逃げ切れない!

とっさにルイズをかばう様にして抱きかかえる。

「ライトニングクラウド!」

突然視界の端から雷撃が飛び出してきてゴーレムの腕をもぎ取った。酷い地響きがして腕が地面に落ちる。確認している暇は無いが多分キリだろう。

上空からシルフィードが降りてきた。

「サイト、ルイズ早くのつて!」

逃げようとするルイズの首根っこを捕まえて、キュルケに渡す。

「サイトも……」

タバサが言うが

「早く飛んでくれ」

そう俺は言い切って、ゴーレムのほうへ駆け出した。ゴーレムが迫ってきて、シルフィードが飛び立った。

「サイト！」

迫ってきた拳をかわすとキリが走りよって来た。

「今のところ無事？」

「一応。キリ、あのゴーレムはどうしたら止まるんだ？」

「壊すしかない」

「だよな」

跳躍して攻撃をかわしながらここまで話した。

やっぱりあれを壊すのか。

「まあ、ルイズがあそこまで言ったんだしやらなきゃだよな」

不思議だ。今気づいたけど俺はまったく恐怖を感じていない。これもガンダールヴの力なんだろうか？まあ今はそんなことどうでもいいや。

「今はとにかくこいつをぶっ壊す！！」

叫んで気合を入れる。

「よし！その意気だ相棒！」

デルフも答える。

「うおおお！！」

叫びながら走って、ゴーレムの前で跳躍。頭上からデルフを振り下ろした。

ガキンッ

「き、切れねえ」

「相棒！来るぜ」

顔を上げるとゴーレムの腕が変な方向に曲がって俺めがけて飛んできていた。

すぐに跳躍してかわす。そして離れたところに着地。

「切れないじゃんか。どうすんだよデルフ！」

「・・・」

これで伝説の武器なのか？何かの間違いじゃ無いのかよ。

「何黙ってんだよ！なんか言えって」

「うーん。なんか引つかかるんだよなあ」

「ん？何がだよ」

「うーん。なんだっけ？」

「じれったい！はつきりしろ」

「サイト、何してんのよっ！！」

その声に顔を上げるとゴーレムが拳を放っていた。おいおい、何度目だよこれ。

「カッタートルネード！」

キリの魔法が飛んできて、ゴーレムを飲み込んだ。竜巻がゴーレムを包み込み岩が砕ける。

俺の眼前にキリが飛び込んできた。

「キリ、ちよつと時間稼いでくれ」

「わかった」

キリが杖を振ると竜巻の威力が増した。

「・・・おお！思い出した！」

「なんだ？デルフ」

すつきりした声のデルフに聞く。

「気だぜ。ガンダールヴは気を放ってた」

気って・・・波動か？えつとつまり遠隔攻撃ってことか

「多分そうなんじゃない？この際、やってみたら？」

キリは振り向かずそのまま言う。

まあ試してみるか、魔法があるんだから出来るかもしれない。

「よし」

デルフを構えなおして、力をルーンに集中させる。すると、すべての音が遠ざかっていった。もう何も聞こえない。デルフリンガーの刀身が少しずつ光っていった。青白く光り輝いた。

なんとなく放てる気がする。

「相棒、振りな！」

音の無い空間にデルフの声だけがやけに大きく響いた。

光り輝く刀身をゴーレムを破壊したいという想いを込めて振り下ろした。

青白い光は刃のような形になってゴーレムに向かって飛んでいった。
どひゅん

俺が放った光はゴーレムを打ち抜いて大きな穴を開けた。砂になつて地面に落ちる、ゴーレム。

そんなことが今日あったからルイズは俺に踊ろうなんていつてきたのだろう。

俺はあの時のルイズに一目惚れをした・・・と思う。一目惚れとは違うかもしれないけどルイズに惚れた。だから、ルイズと踊れて凄く嬉しい。もっとその顔を見せて欲しい。

だから踊ろう、楽しもうと思う。

10 どの世界も知りたいやつは図書室に

授業が終わり、日が傾きかけたころ図書館でページをめくる少女が1人。

少女の名はキリ・リスレム・ド・キセイント。トリステイン王国でも指折りの貴族、公爵家の次女である。

ただし「人間の出来損ない」・・・悪魔である。

ただそれだけ・・・自分に足かせがついていた。これさえなければキリは長女と同じ魔法学院へ共に通うことが出来たのだ。

しかし、彼女の中で少しずつ何かが変わってきていた。

彼女にとって悪魔だと知っている人は自分を邪魔扱いする人・・・つまり必要の無いものでしかなかった。

けれど彼女と共に召還された男の子だけは違ったのだ。名はサイト。異世界からきたといっていた。悪魔というものを知らないからかも知れないが、怖がらないまたは邪魔扱いしない人と初めて会った彼女にとっては心強い見方であった。

そんな彼はガンダールヴ、彼女はヴィンダールヴ・・・どちらも伝説の使い魔である。

・・・ただしその主人は魔法が使えなかった。

主人の名はルイズ・フランソワーズ・ルブラ・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン王国で喧嘩を売ってはならない貴族に入る・・・彼女もまたキリと同じく公爵家の生まれだった。

なのに魔法が使えない・・・ついた二つ名はゼロのルイズ。キリはここに目をつけた。

この世界において貴族というものは魔法を使える。まして、彼女の父も母も国で活躍する（した）魔法使い（メイジ）である。その血

を引くルイズが魔法を使えないなどおかしいことだった。
ましてや使い魔は伝説がつくほどである。主人もそれなりの腕の立つ魔法使い（メイジ）でいいはずなのだ。

今その疑問を解決すべくキリは本のページをめくっている。本のタイトルは「虚無について」。

彼女はこの状況を整理しルイズが何故魔法を使えないかを考えた。考え付いた先は幻の系統「虚無」であること。

この世界で多くの人が崇めている「始祖ブリミル」その人は書物によって伝説の使い魔ガンダールヴを従えていたことがわかった。なので同じ使い魔をもつルイズも虚無を使うことが出来るのではないかと考えたのである。

最後のページをめくり終わりキリは本を閉じた。両手を重ねて一度伸びをしこった体を解す。

すると、後ろから足音が聞こえてきた。振り向くと

「よお」

気安く手など挙げてこちらをみる男が1人。

「サイト」

彼の顔を見てキリの顔が一瞬綻んだ。

「どうしたの？」

「トレーニングが終わったからどんな様子かなと思って覗いたんだけど・・・ああー邪魔だったらすぐ戻る」

「別に平気。なんとなくだけど目星はついたから」

ふーん。そういいながらキリの隣の椅子へ腰をおろす。

「何調べてたんだ？」

「ルイズのこと。魔法を使えないのがおかしいと思ったから」

「そんなこと!？」

サイトは驚いたように声を上げる。周りで読書をしていた生徒の視

線が集まり、しまったというような顔をして声を小さくする。

「・・・そんなこと調べてたのかよ」

呆れ顔でいうサイトに、説明しなくちゃかあと溜息を漏らした。

「メイジが魔法を使えないのはおかしいことなの。それにルイズは公爵家、ますますありえない」

キリがそういうと「言われてみれば、確かに」と納得したような声で呟いた。

「で、なんでだったんだ？」

どうやら長ったらしく話をしなければならぬようだ。しかし日は落ち、そろそろ閉館の時間に近づいていた。なので部屋に戻りながら長い説明をすることにした。

「なるほどな」

説明が終わったとたんサイトは妙な顔でうなずいた。

結局部屋の前に行っても話しが終わらなかったでそのまま部屋を通り越して暗くなったヴェストリの広場の芝生に座り込み説明をしていた。

虚無のことも説明をしなくてはならなかったので余計に大変だった。

「でも信じられないな。ルイズがそんなに凄い魔法使いだなんて」

「私も」

そういった自分の声がかすれているのに気づいて短く呪文を唱えて杖を振る。

すると目の前の空間から水の塊が現れた。

「なんだ!？」

その現象に驚いてサイトが声を上げた。

現れた水の塊は目の前で形を変えながらふわふわと浮いていた。普通はコップなどに入れたりするのだが今はないので悪魔の力を使わせてもらう。

「浮いてるでしょ?これ悪魔の力・・・」

「えっ」

いつもより低い声になってしまったので、自分でも少し驚いた。サイトも驚いているようだった。

「ああごめん……」

「別に……」

会話が切れてしまつて夜風が頬をなでるのに気がついた。それに静けさが2人を包んでいることも。

その静けさは自分が作つてしまったもので……居心地が悪くて魔法で作り出した水を口の中に押し込んだ。

ごくんと音を立てて飲み込んで明るい声を意識して言葉を発した。

「このものを浮かべる能力は悪魔がもっている力のひとつ」

「……サイコキネシス？」

「サイトの世界ではそういうんだ」

ふーん、興味があるわけではないので軽く流す。

「他にもいろいろあるのか？」

好奇心というものだろうか？ サイトはそういう部分が旺盛だと思う。だけど、聞かれた事を答えるつもりは無いので

「そのうち必要になってきたら使うときがあるかも。でもあんまり使いたくないし……」

「ああ！もう、その顔すんな！」

サイトはキリの頬を両手で覆う。

「へ？……あ……ごめん」

顔を上げるとサイトと真正面で向かい合うようになってしまったので目を伏せた。

「わかればいい」

そういつて頬を覆った手をどかす。

無意識にまたサイトの言うその顔をしてしまっていたらしい……
気をつけなければ……。

「話し戻すんだけど、ルイズのこと」

キリが当初の話題であるルイズの虚無についての話に戻す。

「ああ、そうだった。そんなもんルイズが使っわけ無い！」

きっぱりとサイトは断言する。

「断言されても困る。まああくまで仮定だけど、多分そうだと思うよ？」

「俺もそう思うぜ」

今まで黙っていたサイトの相棒デルフリンガーが口を挟んだ。

「デルフ。なんだよいきなり」

「俺の前の相棒、つまり前ガンダールヴだな。そいつの主人は虚無の担い手だったぜ」

「担い手つまり使い手のことね。デルフがいうなら私の考えはあたってているかも」

キリの声が自信を含んでいたのでそれ以上否定するのはやめて思いついた疑問をぶつける。

「それってどうやって確かめるんだ？ルイズの魔法をそんなにするのはいい杖とかマジックアイテムとか何かしら道具が要るんじゃないのか？」

「確かに。今日はもう遅いし寝ることにしますか」

次にやることはつきりしてすつきりした顔で立ち上がると部屋に向かつて歩き出した。

「だな」

キリを追ってサイトもすぐに立ち上がり共に部屋に戻って行った。

「ねえサイト。今日調べてみてわかったんだけど・・・」

太陽が頭上で輝いて、学院の広々とした高原に風が吹いている。その風が、キリやサイトの頬を通り過ぎた。

今はちょうど午前が午後になった時間。ルイズは午後の授業のため、

教室に行った。

サイトとキリは今のうちに仕事を済ませておこうと奉仕に励んでいた・・・と、言っても奉仕に励んでいるのはサイトだけである。

「ん？それって昨日の続きか？」

冷たい水でルイズのシャツを洗濯しながら、視線はシャツに固定したままキリに問い返す。

「そう。なんだかいろいろ必要だったみたいで大変かもだけど」

洗われているシャツを眺め、溜息をつくキリ。

「午前中調べたのか？」

「そう」

キリは午前中、ルイズに無理を言って授業を休ませてもらった。もともとこの生徒では無いので休ませて貰ったも無いが。

昨日調べたことでまた課題が見つかったらしく、まあ俺は授業に出るということでルイズは渋々、了解した。

確か課題はどうやってルイズが幻の系統虚無であることを確かめるか、というものだった。

「大変って一体どういうことだ？」

洗濯の手を止めてキリに視線を移した。

「道具が必要みたいで・・・私たちが今いるトリステインと隣国のガリア、ロマリアそれと空に浮いている国アルビオン。その4国の王家に伝わる指輪。それと始祖と名のつく4つのアイテム」

「ああ・・・俺に言われてもさっぱりだけど」

「・・・だと思った」

ちよっとは期待していたようでキリは2度目の溜息を漏らす。

「この国の国王が持つてるんじゃないのか？魔女っ子は公爵家の出だろう？頼めば貸してくれるんじゃないのかい？」

相変わらず会話に割り込んでくるのが好きらしい。いつの間にか壁に立てかけておいた剣の柄が少し持ち上がっていてデルフが顔を見

せていた。

「デルフには言って無いっけ？私が悪魔だつて」

「そりゃ初耳だぜ。お前さん悪魔の子かい？」

驚いた声を漏らすデルフ。

「まあそういうことだから、あの女王に頼むなんて無理な話よ」

どんだん話が詰まっていくな話に耐えかねてサイトは中断していた洗濯を再開した。すると、キリの言葉が引っかった。

「なあキリ、さっき女王って言ったか？」

折角再開した洗濯をまたしても中断して、手を止める。

「うん。名前はアンリエッタ」

「ふーん。お姫様か」

そこでまたしても引っかった。普通自国のお姫様なのだから様とかけけるものではないかと。さっきキリは女王と言った、そしてアンリエッタと言った。何故だろうと考えていると、キリがボソッと何か呟いた。

「様なんてつけなくていいのに・・・」

うつむいていて表情はわからなかったが、いつものキリの声ではなかった。たまに聞く悲しいと言う表情より作り笑いみたいな表情を見せるときの声。サイトが聞きたくない、見たくないと思ったあの声だった。見えていないだけできつと・・・

お姫様は悪魔と呼ばれるキリのような人達に何かしている、もしくはしていたのだ。だからキリはまたあのときの顔と声でそんなことを言ったのだ。

しょうがないことかもしれないが、自分がもう少しちゃんと考えていれば今のはさせなくて済んだのかもしれないのにとサイトは思った。

「お前さんがダメなら娘っ子に頼んだらどうだい？娘っ子も公爵家なんだろう？」

「・・・」

キリは一瞬悩むような顔を見せたがすぐにいつもの顔に戻った。

「そうしますか」

「じゃあ、授業から帰ってきたら聞いてみようぜ」

かつんこつんとローファーで歩く音が廊下から聞こえた。どうやらルイズが帰ってきたらしい。

「今戻ったわ」

とても上品とは言えない豪快に勢い良く扉を開けてルイズが部屋に入ってきた。

「お帰り」

サイトとキリははもってそう言った。

キリが椅子から立ち上がってルイズの下へ行き

「ルイズ、お願いがあるんだけど・・・」

頭を下げた。

キリがルイズから読み取った情報によるとルイズとアンリエッタ女王は幼馴染らしい。なので、頼めばどうにかなるのではないかと考えた。

「アンリエッタ女王に会いたい。でも、私じゃそんなこと出来なくて・・・ルイズは幼馴染でしょう？会わせてくれない？」

サイトにはどうしてルイズが虚無かどうか確かめるのかがいまひとつ理解できなかった。選択の後聞いた話によると、お姫様は罪の無い悪魔の子を見つけ次第殺しているらしい。悪魔がいると評判が悪くなるとか、住んでいる民から苦情がくるから・・・など。どれも自分勝手に日本で生きてきたサイトにはいまひとつ理解できないのだった。それにそのお姫様に会うと言うことは殺される危険を伴うと言うことである。つまり城に行くこと自体がキリにとって危険な

ことなのだ。

「まあ、話を聞こうかしら」

ルイズは椅子に腰を下ろし、キリも座るようにと促した。サイト、キリ、デルフで話し合った結果ルイズ本人にも虚無のことを話しておくべきということで話がまとまったので、一通り話すことにした。話し終わるとルイズは信じられないという顔をしていたが、お姫様に話をつけてくれることになった。

そして伝書鳩を飛ばした次の日の夜、来てもいいとの許しがお姫さま本人からだされ3人はアンリエッタ女王に会いに行くことになったのである。

11 やはり女王は・・・

トリステイン魔法学院から馬で半日ほど走ったところにこの国の女王「アンリエッタ・ド・トリステイン」が住まう城がある。

その城の一室で青空を眺める女性が1人・・・。

肩で綺麗にそろえられた赤毛、ふくよかな胸、純白のドレス、そして頭の上に輝くティアラ・・・そうこの人がアンリエッタ女王陛下である。

彼女は先月女王になったばかりでまだまだ未熟者である。

が、彼女は女王としてそれなりに頑張るつもりだ。今の王の血縁は自分だけ、つまり王位後継者は自分だけと言うことだ。それに・・・自分は小さなころから早く王女になりたいと思っていた。

自分が王になったら・・・貴族だとか平民だとか関係なしに能力のある人が仕事をする、そんな社会が作りたいと思っていた。その気持ちは今でも揺らぐことは無い。

今までの王たちとは違う、伝統に縛られない社会を作ることが今の目標だ。

今日は久しぶりに幼いころの遊び相手であり、幼馴染である「ルイズ」が魔法学院からはるばるたずねてきてくれる。

女王になってからまともな休暇など取っていなかったから、楽しんだ。

それに進級のとくに召還した使い魔もつれて来ると言っていた。

「あのルイズの使い魔なのですから、普通ではありませんよね」
ぼそつと呟く。

「陛下、ミス・ヴァリエールがお見えになりました」

「こんこんと短いノック音と声が聞こえて

「わかりました」

その返事と共にアンロックの呪文を唱えドアの鍵を解除する。

「今、行きますわ」

ドレスの裾を持ち上げて枢機卿の下へと向かう。

さて、ルイズはどんな使い魔をつれてきているのかしら。そんな期待を持って枢機卿に続き客

間へと急いだ。

この時アンリエッタはこれから起こる事件を予想もしていなかったのだった。

「アンリエッタ女王陛下がいらっしゃいました」

声とともに大きな扉が開かれて、純白のドレスを着込んだ女性が現れた。

頭の上にはティアラが輝いている。この人がアンリエッタ女王、キリや悪魔を殺そうとしている……いや、どうみてもそんな風には見えない。

てか、綺麗な人というのが第一印象。これほど綺麗な人は始めて見たと思う。

ルイズも綺麗だと思うけれど、幼さが残っているが、この姫様は美しい女性といった感じ。

こんな人が殺せだなんて命令を本当にするのだろうか？

「ルイズ！久しぶりね！」

姫様は勢い良くルイズに抱きつこうとした。

そんな姫様に対してルイズは、一歩下がって片膝をつき恭しく頭を

下げた。

「お久しぶりです、女王陛下。ごきげんうるわしゅう」

その立ち振る舞いは貴族のそれであった。こういうときのルイズは突然大人になったみたいに見える。

「ルイズ、どうか頭を上げて。あなたに低頭などされたくは無いわ。それに姫様でいいわ」

頭を軽く傾けてニコリと微笑む。やばい。マジで可愛い・・・

「あ痛っ」

突然俺の太ももにつままれたような鈍い痛みがした。

なんだ！？とそちらに視線を移すと、本当にキリが俺の太ももをつまんでいた。

「キリ、一体なにすー」

そこまで言ったところで片耳を引つ張られた。

キリのほうを見ようと視線を上げると

「目的忘れてないよね？」

耳たぶに息がかかった。くすぐったい。

固く口を閉じて声が漏れるのを防ぐ。

「わかってる。でも、俺にはあの姫様がつて思っちゃうんだ」

それを聞いてキリの手から力が抜け、俺の耳は開放された。

「・・・本気でそんなこと言ってるの？」

キリの冷めたような声が耳に響いた。その声に

「使い魔！あなたたちも姫様に挨拶して」

ルイズのいつもは聞かない敬語が重なった。

キリの声から耳を遠ざけるようにしてルイズに視線を移すと

「はじめまして、使い魔さん」

隣に並んだ姫様のほうに目が行った。

「えっとー。サイトです」

頭を下げる。

「よろしく願いますわ。そちらの女の子は？」

「キリ・リスレム」

途中で名前を切った。姓の部分が入っていない。

キリに視線を移すと、その目には明らかな殺気が浮かんでいた。

これは・・・まずいんじゃないだろうか・・・。

「・・・・・・・・」

ほら見る、姫様黙っちゃったじゃないか

「そのマントは公爵家のマントですね。あなたは公爵家の血縁の方ですか？」

「・・・・・・・・」

「そうなんです。彼女はキセイント公爵家の次女なんです」

黙り込んだキリを見かねてルイズが助け舟を出した（つもりなのだろうが決してそうではないと思う）

キリは頭のいい子だと思っている。そのキリが姓を名乗らなかったのは理由があつてのことだと思う。だから、これは・・・

「キリ・リスレム・ド・キセイント・・・キセイント公爵家の次女・
・・・」

キリの唇から血が見えた。噛んだんだ。じゃあやっぱり・・・

「あなた、悪魔・・・？」

アンリエッタの冷めた声、けれどその声には明らかな殺気が煉り込まれていた。

「っ 姫様？キリは私の使い魔です。そんなことはありません」

まあ悪魔って知ったら驚くんだろうな。それにしても名前を聞いただけでわかるなんて・・・

驚きだ。それに、ありえないって思ったのに・・・なんなんだ！？

この殺気は！？

12 キリ絶体絶命!?

「枢機卿。あの紙を持ってきてくださいますか？」

「は、はい」

姫様のその声に驚きびくびくしながら、何かを取りに枢機卿は部屋を飛び出していった。

「ひ、姫、様・・・」

数秒の沈黙の後、ルイズが口を開き何かを言いかけたが戻ってきた枢機卿の足音にかき消された。

枢機卿から受け取った紙をルイズに渡す。それを広げ、食い入るように見るルイズ。

その瞳には動揺が浮かんでいた。
横から覗き込むと

“ トリステイン王国に存在する悪魔のリスト ”

という怪しい文字が躍っていた。

リストを上から下に流し読みしていると

“ キリ・リスレム・ド・キセイント ”

の名前を見てしまった。

ルイズはさつきから少しも動かず立っているキリに視線を移すと、その瞳に恐怖の色を移した。それに
なんで？

とでも言いたげな表情。

「キリ殿。首筋を見せていただいて宜しいでしょうか？」

それは、悪魔であるという確認を取るため・・・悪魔には首に黒点のようなものがついている。名前で確認は取れたが、万が一と言う

ことなのだろう。

つまり、姫様はこの場で殺すつもりなんだ・・・キリを。

姫様が一步ずつキリに近づいていく。

助けなければならぬ。そもそもこんなことになるのは予想がついていたんだ。

なのに・・・。

「ねえキリ・・・あなた本当に悪魔・・・なの？」

ルイズが声を絞り出す。

姫様が首筋を見ようとした瞬間、いきなりキリは片膝を折って口を開いた。

「本日は私のようなものが敷居を跨いでしまい申し訳ありませんでした。陛下に大切な話があつてこんなことをしてしまいました。ご無礼をお許しください・・・」

「やはりあなたは」

「陛下のおっしゃるとおり悪魔の子でございます」

「ッ」

「ルイズ！」

突然倒れたルイズを支えてやる。

気絶していた。

いきなりこんなこと聞いて驚いているんだろう・・・

「ならば、あなたは解つていらつしやいますよね」

姫様のその言葉にはあるべき疑問符が無かった。解っていることが当たり前とも言いたげな瞳。このとき初めて怖いと思った、この姫様が。

「陛下！私の話を聞いてください！」

キリの焦った声が飛んだ。視線はもう、姫様を見てはいない。キリも怖いのだ。

「悪魔の言葉など耳に入れる気はありませんわ」

姫様の手には杖が握られていた。

まずい！と思つて、ルイズを片手で支えなおしてもう片方の手をデルフへと回す。

いざとなつたら飛び出るしかない、と思つて。

だが、俺の手はデルフに触れなかった。

頭は落ち着いている（考えられるだけ）だが、身体のほうは姫様の殺気に怯えていてデルフまで腕が伸びなかった。

「相棒、俺を使おうとしてるなら辞めときな」

鞘からちよこんと抜けてきたデルフ。

「なんでだ？」

「あの女王様に剣を向けたときはこの国に居場所が無いと思つたほうがいい。いくら魔女っ子を助けたいと思つてもそれだけはやつちやいけねえ、絶対にだ」

こんなときだからこそデルフの妙に冷静な声が頭に来る。

「じゃあどうすればいいんだよ」

「そもそもここにきたのがいけねんだ。別に魔女っ子がわざわざ来る必要は無かつたのによ」

確かに俺も思つたさ。けど、もう遅いんだよデルフ。いまさらそんな事言つたつてもう過去には戻れないんだ。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンディ」

姫様の口から呪文が漏れる。同時に、杖に冷気のような白い煙がまとわりつく。

それは、きらきら光って・・・やがて氷になった。その先端はキリの細い身体を簡単に貫けるくらい尖っていた。

「陛下・・・残念です」

キリがぼつりとそんな言葉を漏らした瞬間、姫様の杖はキリに向か

つて下ろされた。

空中に赤い液体が舞った。

ただしキリのもではなかった。

キリの左にルイズが横倒れになっていた。
そこには赤い液体が広がっていて・・・
ルイズの肩に姫様が作り出した氷の矢が刺さっていて、液体はそこから滴っていた。

しばらくして、俺はルイズがキリを庇ったのだと理解した。

「ルイズ！！」

姫様の甲高い悲鳴。

すぐにルイズに駆け寄り治癒魔法をかけ始める。

さっきまで気絶していたルイズは、姫様が杖を下ろす瞬間に目を覚

まし飛び出したのだった。

そして、矢に刺さり倒れた。その結果としてキリの前からルイズの倒れている場所に向かって血しぶきが飛んでいる。

俺は驚いて腰を抜かせているキリに駆け寄った。

そこで混乱しているキリの手を握り落ち着かせてやる。あと安心もさせてやる。

落ち着いてきたのかキリは俺に視線を絡めた。

平気そうだな。

「どうしてなの、ルイズ」

治癒魔法をかけ終わったのか姫様はルイズに問う。

「私の・・・使い魔だから、キリは・・・悪魔だとしても・・・キリは・・・私の使い魔だから」

回復させてもらったばかりでまだ痛むのか起き上がって肩を抑えながら、ルイズは答えた。

姫様は絶句した。

俺もまさかルイズがキリを庇うなんて思って無くってすごく驚いた。でも、ルイズだなんて思った。

ゴーレムを倒した時だって、ルイズは魔法を使えないのに前に立つて杖を握っていた。

「敵に背中を向けないものを貴族って言うのよ」
そう言っていた。

落ち着いたのか姫様は立ち上がってベルを鳴らす。

「紅茶を4人分お願いできるかしら？」

部屋にやってきたメイドに姫様は確かにそう言った。

「姫様・・・」

「あなたには負けたわ、ルイズ」

やってきたメイドは床に付いた血に驚きながらも
「はい」
と返事をして部屋を出て行った。

13 お借りしますっ

姫様はソファ―に座って手招きした。

「どうぞ。ルイズも使い魔さんも」

その言葉に嘘ではないと確信し、俺たち三人は笑みを零した。

「それで、話とは？」

アンリエッタは紅茶を一口啜いてから、口を開いた。

キリは、口を開閉することをしばらく繰り返していたが

「えっと・・・わっ私が・・・話して、よ、宜しいんでしょうか？」

と力チカチに緊張した控えめな声で言った。

その声に俺は思わずふきだした。

「サイト、姫様の前よ。慎みなさい」

そんな俺にとんだルイズの厳しい声。すぐに姿勢を伸ばす。

いつも余裕がありそうでなんでもこなせそう・・・というのが俺が持っていたキリの印象だったから、こんなキリは想像外。なんだか不思議な感じがする。

姫様にいきなり頭を下げたところもだけど、案外何を考えているのかわからない。

「あなたはルイズの大切な人・・・そうですね、ルイズ？」

俺と同じく含み笑いをした姫様。

「はい。キリが悪魔であろうとなかろうと私の使い魔であることに変わりはありません。私は貴族として、メイジとして、自分の使い魔を大切にしたいんです」

そんなルイズの言葉に俺は鼻の奥がツンとなるのを感じた。

ルイズは俺たちに雑用をさせているだけだと思っていたけど大事にしてくれるってルイズがちゃんとやってくれたから嬉しい。

「私はルイズの言葉を信じますわ。ルイズは大事なお友達ですから。

キリ殿、さつきは取り乱してしまいすいませんでした。話していただけですか？」

「はい！陛下！」

キリが笑顔で微笑んでいることは顔を見なくてもわかった、いつもより声高いし。なんとなくキリのことを解ってきた気がするし。

「では話させていただきます」

そう前置きしてキリは、図書室で調べたことを姫様に話した。

それは俺に話してくれたときよりまとまっていて、すごく解りやすかった。

これならきつと、姫様も信じてくれる。

「大体キリ殿のおっしゃっていることは解りました。ルイズにそんな力があつたなんて・・・では、その道具をお貸しますわ」
ベルを鳴らして、メイドに頼んだ。

最後は心底不思議そうに言った姫様、それに対してルイズが口を開く。

「まだ本当かわかりませんが・・・姫様、そんな不思議そうにおっしゃらなくても・・・」

その言葉にしばらく考え込むような顔をした姫様だったが

「でも使い魔に人間を連れてきたんですものね。私は楽しみにしていたのよ。あなたがどんな使い魔を連れてくるのか・・・でも、人間は予想外でしたわ。さすがルイズね」

「姫様、それ褒めていらつしゃるのですか？」

「さあ？どうでしょう？」

首を傾けた姫様をキツと真っ赤な顔をして睨むルイズ。

仲いいなあ」

「そうね」

俺の右に座るキリが視線を投げてきた。

「読んだ？」

頷くキリ。

「幼馴染って言ってたし」

姫様と幼馴染かあそれだけでルイズの位が高いことを感じる。

でも、それを考えると・・・キリも同じ公爵家なのにとって思っ
てしまふ。いつかその差別がなくなるといいな。日本のように、平等な
世界であってほしい。平民も貴族も悪魔も手を取り合って、生活で
きるそんな世界・・・いつか、ならないだろうか？

「ならないよ。そんなの」

「・・・結構読んだな・・・」

「ごめん。でも、平等なんて無理だから・・・」

端的に告げるキリ。未来を信じていけないだろうか？もしかしたら、
ありえるかもしれないというのに・・・

俺とキリがそんな会話を繰り返していると姫様が口を挟んできた。

「あら、何の話をしているのですか？使い魔さんたち」

ついでにルイズも

「こら、姫様の前では慎みなさいと言っているでしょ！」

「構いませんよ。いつも堅苦しい貴族の方たちとばかり話している
ので、楽しい会話というのもしたいのです」

姫様がそういうなら

とルイズが呟く声が聞こえた。その後に俺を肘でつついて

「良かったじゃない、サイト。姫様、話してもいいって」

その台詞、頭にくる。っでも、ここで抗議してもしようがないし。

「平民とか貴族とか関係なく平等な世界が出来ないかなとおもって
いたでございます」

くくくつと、キリの笑い声が耳元で聞こえた。姫様も同じく。

ルイズは真っ赤になって震えている、どうやら怒っているらしい。
最悪だ・・・姫様と話すって一体どう話せばいいんだ!?

「サイト殿でよろしかったでしょうか?」

「は、はい」

姫様の声にピンと背筋が伸びる。

「いつも通り・・・さきほどキリ殿と話していたときと同じように
おっしゃってければ良いのですよ?」

「姫様!? そんな、平民が口をきくだけでもー」

そこで、声を遮った。

「使い魔が大切と言ったのはあなたでしょう、ルイズ? 構いません
わ。あなたの使い魔ですもの」

俺は少し姫様を見直した。さっきは怖いと思ったけれど、本当は凄
くいい人なんだ。

「えっと、平民も貴族もみんな手を取り合って生活できる世界が出
来ないかなって」

「・・・それは、難しいですね。でも、私は能力のあるものが治め
る国を作ろうと思っていますの。ですから、平民出の騎士も私の護
衛として雇っていますのよ」

全部が全部平等とはいかないだろうけど、貴族が支配している国よ
りはいいだと思う。一変に変わったりなどありえないのだから、姫
様のように少しずつやっていけばいつかは・・・と信じていていい
だろうか?

「陛下、お持ちしました」

扉を開けて入ってきたのは枢機卿。その手には文庫大の本が一冊抱
えられている。

「ありがとうございます」

姫様はそれを受け取った、そしてルイズのほうから字が読める向き

に差し出す。

「これが、始祖の祈祷書よ」

「ありがとうございます」

椅子に座ったままだが、受け取って深く頭を下げる。

次に姫様は自分の指にはまっていた指輪をルイズの指にはめた。

「これが、王家に伝わる水のルビー」

そういつて、取り出した杖を振ると指輪はルイズの指に合うように大きさを変えた。

「おお」

と感嘆の声を上げる俺。

「ここで、それいうと不自然。てか、そろそろ慣れようよ」

キリの呆れた声。

ルイズは受け取ったものを眺めて目をきらきらさせていた。

「このような大切な家宝を貸してくださり本当にありがとうございます！
ます！」

そしてもう一度頭を下げた。

「次に訪ねてくるときで構いませんから。ルイズに力があることを願っていますわ」

「はい！」

ルイズはそう、明るく返事をした。

14 認め合って・・・

その後姫様の勧めで俺たち3人は城で一夜を明かすことになった。

「ミス・ヴァリエール様、このお使いください」

部屋に案内してくれたメイドがドアを開けて一礼した。

「ありがとう」

ルイズはそう言って部屋に入っていった。ルイズに続いて俺も入ろうとしたが、メイドにドアを閉められた。

「お二人のお部屋は隣になります」

へ？いきなりの行動に驚いて反射的に聞き返してしまった。

メイドがドアを開ける。

「どうもありがとう」

キリは頭を下げて部屋に入ろうとした。

「ミス・キセイント」

またもいきなりの行動。キリが立ち止まって振り返ると、眼前に一枚の紙が差し出された。

「アンリエッタ女王陛下からでございます」

キリが受け取ると、ごゆっくりと言ってその場を去った。

「サイト？入らないの？」

「えっと・・・入る！」

ルイズやキリやメイド、姫様・・・彼女たちの会話を聞いていると自分がとてつもなく場違いな気がしてくる。

自分は普通の高校に通っていた一般高校生なのだ。

ここはなんだ？一体どんなファンタジーだっ。もうそろそろハルケ

ギニアに来て60日、地球で言うところと2ヶ月が経とうとしている。なのにまだ夢を見ている気がする。いつまで続くのやら。別に早く慣れたいわけでもないが、このままでは不便だ。
「そつえばさつき貰ったの何だったんだ？」
後ろ手にドアを閉めて窓際においてあるベッド（もちろん二つある）に腰掛ける。

この部屋の大きさはルイズの入っていった部屋と同じぐらい。木枠の窓が一つにシングルベットがそれぞれ左右の壁にくっつくように置かれている。それと、部屋の中心にあるさほど大きくない丸テーブル。そこにいすが二つ。

床で寝ていた俺としては、ベッドは嬉しい限りだ。

「ここは貴族の護衛が泊まる部屋だと思うよ」

俺の思考を読んでかキリが唐突に言った。先ほどの俺の質問には答えていない。

「遠くから馬で来た貴族はその日のうちには帰れないから泊める部屋が必要なわけ。それで、そんな貴族には護衛がいるのよ」

「だから、護衛を泊める部屋も必要なのか」

「そういうことです。それと」

突然キリは俺に向かってさっきの紙を投げてきた。

「っと」

右手でそれを受け取る。

紙だけど布みたい不思議な手触りな紙。姫で丸められていて

こんな紙アニメで見たことあるって思いまくりな俺。

なんていうか、小瓶に入って海とかに流れてそんな感じ？

あけて。キリがそう言ったので結わえてあった紐を解いて広げてみる。

そこにはミミズがのたくっているようなものが書かれていた。多分ハルケギニアの文字だろう。

唯一俺がわかったのは印。これは押印だとわかった。歴史でやった気がしないこともない、覚えているんだしきつと習ったんだろう。百合のマーク。これは姫様が書いたという証拠。百合はトリステインの国の・・・国旗みたいなものだろう。

「なんて書いてあるんだ？」

そう。俺はこっちの文字が読めない。言葉は通じるのに文字は違う（通じない）

不便だ。魔法学校の授業を見ていてわかったのは英語みたいに母音と子音があるということだけ・・・見ていたって読めるわけにはならないから文字を見ても面白くもなんともないが。

「簡単に言うと、私を殺すなって感じ？」

「ずいぶん掻い摘んだなあ」

「悪魔だつてばれたときに見せればそれを理由で殺されない・・・かな？」

「それじゃ少し安心、みたいなの？」

「うん。頑張つて来てよかった」

キリは微笑んだ。

一方そのころ隣の部屋のルイズは・・・

さつきから丸テーブルの椅子に腰掛けて、メイドが運んできたワインの薄紫色の液体を見つめながら、考え事をしていた。

液体に沈んでいるチェリーの表面についていた気泡が浮かんでくる。それは今のルイズの思考の様・・・。

考えているのは当然のごとく使い魔のこと。

とくにキリのこと。

知らなかった、キリが悪魔の子だったなんて。何故言ってくれなかったんだろう・・・

ルイズにはそれはわからなくもなかった。自分も悪魔の子はエルフと同等に危険な存在であることを母親父親から聞いている。

父親は昔悪魔の子を殺したということで姫様から謝礼を受けたこともある。

———それだけ危険な存在———

だからだろう。きっとキリは家でもいい扱いを受けていなかったと思う。

折角自分は他の貴族と同じになった・・・
だからなのだ。

今度は1人の貴族としていきたい・・・
そんな願いがあったのだと思う。

それに・・・

もし召還したときそのことを聞いていたとして。
多分、いや絶対にだ。契約しない、という選択肢を考えただろう。

でも。それでも、言って欲しかった——

確かに拒絶しなかったという自信はないけど・・・。

自分はキリの主人なのだから。

キリとサイトは私の初めての使い魔。

だから、大切にしたいと考えている（こんなこと2人には絶対に言わないが）

私はそれを証明した。

あの時、キリが姫様に殺されそうになった時。

自分は無意識だがキリを庇った。

悪魔という事を聞いて、気絶して——目が覚めたと思ったら勝手に体が動いて・・・

次の瞬間には視界に真っ赤なものが映って、刺されたんだって自覚するにはちよつとかかったけど。

——大切にしたい——

もちろんサイトも。

あの時ゴーレムから私を助け出してくれた・・・

一緒に踊ってくれた（下手だったけど）・・・

あの時の彼の嬉しそうな、そして恥ずかしそうな表情は未だに私の眼に焼きついている——

洗濯とか、そういうことは半人前かもしれないけど、使い魔としては・・・

認めてあげてもいい

——そう、思っている。

ルイズがそんな思考をめぐらせていた頃。
サイトの脳内ではある疑問が浮かんでいた。

——キリと2人きりなわけだけど、何も起こらないのか？——

別にサイトがいかれているとか、頭がおかしいとか、案外何か期待しているとか……

そんなことは無い、多分、きっと。

一応、若い男女が……と、お決まりの文句を付ける。
別に何か期待しているとかそういうわけじゃないぜ？
だけど、何かあってもよくないか？

「ん？何、サイト？」

へ？そんなことを考えていたからだろうか俺はキリを見つめていたらしい……

「別に、何でもねえよ？」

「ふーん」

てか、今思っただけさっきの思考キリが読んでいたらどうしよう……

いや、それはないな多分、そう思いたい。

キリは場所を移動して俺が座っているベッド窓際（窓に一番近いところ）に座っている。

もう外は暗い、赤と青の月が上空で輝いている。

こうやって見ているとキリが可愛いということを再確認する。

ルイズも可愛い、すつごく。

でも、なんていうかそれとは違う。ルイズとは違う可愛さがキリにはある。

月明かりに照らされていつもより色白になる肌。

首を傾げるたびに揺れる漆黒の黒髪。

こつというの綺麗って言うんだろうな・・・

それに黒髪だからかもしれないが、なんとなく懐かしい気がする。

日本では桃色とか、赤とか、青とかあまり見ないし。黒や茶色が多いから。

あと、一番気になることは・・・

普通、同じベッドに座っていること自体ありえないんだけど。

多分キリは、男とか女とか性別なんて気にしていない。

昔からそうだったんだろう。

あつちに行け、こつちに行け、

あれをやれ、これをやれ・・・。

だからさ、別に気にしないのはいいいことかもしれないけど――

俺は気にするんだよね、そういうこと

ああなんかかなり心臓がうるさい、絶対心拍数右上がりだし。

なんで俺こんな焦ってるの？キリのせい？

多分そうだろうなあ。

なんか許せないぞ、そんなの。

ちよつと教えてやろうか？キリ――

やばいな俺の脳みそ、細胞死に始めてるんじゃないのか？

理性保たないとちよつとやばいぞ。

こんなこと考えている事態、もうやばいんだらうけど。

そんな感じで俺は自分の思考と戦っていると

「・・・サイト、どうしたの？息あがつてる・・・」
キリが俺の顔を覗き込んだ。俺の視界にキリ大きく映る。
何故だろう？

自分でも不思議なほど自然にそこに視線が行っていた。

気づいたら俺は、キリの唇に自分のそれを重ねていて・・・
キリが驚いて眼を見開くのがわかった。

その勢いのままキリを肩をおして、壁に押し付けていたんだ。

「サ、サイト？」

震える声で俺の名を呼んだ。

その表情は明らかに恐怖の色を湛えていた・・・

それが煮え立っていた俺の頭を急激に冷やした。そして、

ルイズの悲しそうな顔が頭に、浮かんだ気がした。

「ご、ごめんっ」

急いで腕を引つ込める俺。

キリはそのまま動かずに目だけを伏せた。

今、もの凄く俺は不味い事をしたんじゃないか？

そう自分の心に問いかけてみる。

なんか俺、調子乗っていたかも・・・

もの凄く自分が不味いことをしたんだと自覚して、ちゃんと謝ろう
と顔を上げて口を開けると

キリの頬に涙が一粒光ったのを見た。

思わず俺は、開きかけた口を閉じてしまう。

「今日は、もう寝る・・・」

ポツリと呟いて俺から離れるように隣のベッドに潜り込もうとする
キリ。

「あ、ああ」

不味いことをして雰囲気の不味くしてしまったのは俺なので、頷いた。

でも、なんとなくここでちゃんと謝っておかないと不味い気がして腕を伸ばしかけるが・・・

キリの背中が止めるなって言っているみたいで、伸ばした腕はキリを掴むことが出来なかった。

あれから俺はキリの寝息が聞こえるまで、動くことが出来なかった。だらしなく腕をたらし、ぼおっとキリが寝ているであろうベッドをじっと見つめていた。

「はああ・・・」

長く、そして深い溜息を吐き静かに体を倒した。

スプリングで体がきしむ。

ギツギツと古そうな音が静寂の保たれていた部屋に響いた。

生まれたのは後悔。

そして、どうするべきかという疑問。

その問いの答えはすぐに見つかるものではなく、俺はもう一度深い溜息を吐いたのだった。

15 感覚のずれ

それからしばらくして、ドアをノックする音が響いた。

「サイトー、キリー」

ルイズだった。

そろそろ飯の時間かと、回りすぎてショートしかけている頭で考える。

立ち上がってドアを開ける。

「もう、遅いのよっご主人様を待たせる気？」

腰に手をあててお決まりの姿勢。

「悪かった、悪かった」

乾いた笑い。

すっかりしなきゃ。ルイズにばれたら大変なことになる——
別に、そうでもないか。こいつには関係のないことだった。

「メイドに食事を運ばせたから私の部屋で食べましょ。あれ？キリはどうしたの？」

開けっ放しのドアから部屋を覗くルイズ。

「キリなら寝たぞ」

「そう・・・きつと疲れたのね。このまま寝させてあげましょ」
扉を閉めてルイズはそう言った。

疲れたか・・・そうだといいんだけどな。

まあ、変に追及されるよりはいいか。

その日の夕飯はそれはそれは豪華なものだった。

俺らの部屋より2周り大きな丸テーブルにこれでもかっというくらい料理がひしめき合っていた。

ローストビーフ、カルパッチョ。滅多に食べられない高そうな肉料理。

アクアなんとか。貝や魚が入っている、俺的にいうとイタリア料理。ほのかに香る白ワインの香り。

このパンも見たことある。なんだっけ？ブルスケッタ？こっちもイタリア料理だ。朝ごはんに食べたい・・・パンにソースとバジルが載っている。

丸テーブルの真ん中にはワインが一本置かれていた。

なんていうか、凄いとしか言いようのない料理の数々・・・

「キリには申し訳ないけど、食べましょ。冷めちゃうわ」

「あ、ああ。そうだな」

グラスにワインが注がれる。透き通った綺麗な色をしたワインだった。

これって未成年者が飲んでいいものなのか？

と地球（日本）が抜け切っていない頭が考えるがルイズが普通に何食わぬ顔で呑んでいるので、恐る恐る俺も口を付けた。

食べ終わるとメイドが絶妙なタイミングでデザートを運んできた。

デザートはミルフィーユ。パイ生地とパイ生地間にカスタードクリームがかかっている。

それもペロツと食べきって、夕飯は終わった。

「美味しかったわね」

「そうだな。なんていうか、豪華」

「そろそろ慣れなさい。私たち貴族にはこれが普通」
俺は苦笑いするしかなかった。

「ねえサイト」

「何だ？」

既に机を埋め尽くしていた料理は消え、さっきのが夢のように思えてきたとき、唐突にルイズがこんなことを言った。

「今日、こっちの部屋で寝ない？」

ガンッ

「あだっ！！」

本当に唐突過ぎるルイズの提案に驚いて、思わず座っていた椅子から落っこちた。

「ちよつと、平気？」

心配して歩み寄って来たルイズ。

一体どうしたってんだよ。

ルイズ、いつも俺に色々命令してばっかじゃねえか。
なんで今日に限って豹変？

てか、ここまで期待させておいて床で寝るとかなしだろ？
それくらい常識的にわかるだろ、いくらルイズでも。

この時既にさつきキリに不味いことをしたという出来事が脳内から抹消されていた。

「平気、平気」

ずっと、自分でもありえないくらい滑らかな動作で立ち上がる。

「キリも寝てることだし、あんたが行って起こしちゃ可哀想なもの。それにね、それにちよつと大事な話があるの」

そういつて真直ぐ俺のことを見たルイズの瞳に強い意志を感じた。

ベッドに座ったルイズの隣に腰を下ろす。

なんだか緊張。

心臓が早く鼓動を刻む。

なんか今日は凄い一日だなあ。煮え始めた頭でそんなことを考える。あれ？なんで凄いなんだっけ？

「この話はすつごい、大事なことなの。ちゃんと聞いてね？」

「聞いているよ」

俺の言葉を聴いて安心したようでよしと一人で頷いて、でも恐る恐る口を開いた。

「キリのことなんだけど・・・」

キリ・・・あれ？なんか俺忘れていることがあるような・・・。

「あああああああ！！！！！！！！」

「ちょ、何よ！いきなり！」

突然大声を上げて立ち上がる俺。

ルイズは耳に手をあてていた。相当大声で叫んだらしい。

「そうだよ、キリのことで悩んでたんだっ」

さつきと打って変わって、脱力してベッドに背中から沈んだ。
勢いあまって一瞬息ができなくなった。

ワイン飲んで、ルイズが態度豹変したからって大事なこと忘れちゃ駄目だろっ。

だから単細胞馬鹿とか言われるんじゃないか、俺！！

「サイトも悩んでたの？そりやそうよね、同じ使い魔が悪魔だって知ったら驚くわよね」

「？俺、前から知ってたぞ？」

起き上がってルイズに視線を合わせると。

え？とでも言いたげな表情・・・

「こつちに来たとき色々と話したんだよ。たしか、初めて会っ」
そこで言葉を切った。

何故って明らかな殺気を感じたから。

これは動物の本能。

シマウマがライオンを見てしまったときのようなあれ。

俺の脳内でけたたましい警鐘が鳴り響いた。

逃げろっ

ここにいたら危険だ。

数秒後には別に俺は悪くないのに殴る蹴るの一方的な乱闘パーティが始まる。

ルイズに脇目も振らず目の前のドアへ猛ダッシュをかけた。

「ねえサイト」

いつもよりワントーン低い声が部屋に響く。

その声に怯えてかドアに触れられる距離にもかかわらず転倒。立ち上がるまでに数秒の時間を要する・・・が、しかし腕は前に伸びなかった。立ち上がるうとする力さえもすべて吸い取られていくように感じた。

——逃走不可能——

俺の脳内の警鐘もあきらめたようで、サイレンを鳴らすのをやめてしまう。

「知ってたってどういうことかしら!」

びくびくと震えながら顔を上げると、そこには不敵に微笑むルイズの姿が・・・

その日俺は散々説教され、殴られ蹴られ主人のお許しが出るころには次の日になっていた。

結局何の話をしたかったのかわからずじまいだ。さて、これからど

うしょう？

ルイズには部屋から追い出され、非常に不味いことをしたわけでキリの隣のベッドで寝られるはずもなく・・・
しょうがないのでベランダで夜を明かすことにした。

キリはゆっくりと眼を開けた。

隣の部屋からルイズのものと思われる罵声とサイトのものだと思われる叫び声が聞こえていた。

泊まらせてもらっていてこれは不味いよね・・・

キリは枕元においておいた杖を手にして立ち上がった。

ドアを半開きにしてそこから上半身だけを出す。

そして、杖を伸ばしてサイレントの呪文を唱えた。

一瞬にしてあたりに静けさが戻った。

ただし、対象は自分ではない。隣の部屋を囲む壁、ドアにキリはサイレントを掛けたのだ。

これでもう心配ない。

ふうつと一息ついてまたベッドに潜り込もうとして、ふと思い出したように時計を見た。

もうは12時を回ろうとしている。

そつと自分が寝ていたのとは別のベッドに触れてみる。

冷たい・・・戻ってきてないんだ。

サイトがご飯を食べにルイズの部屋に行ったのはなんとなく聞いていた気がする。

それからもう5、6時間くらい経つのに・・・
外気に触れた肌に鳥肌が立ってきたのでキリは自分のベッドに入
た。

ガチャ

ドアノブが回った。

サイト、戻ってきたのかなあ

「おかえり」と言いそうになったが抑える。
なんとなく声を掛けるな一人にしろと聞こえた気がして、開きかけ
た口を閉じて布団を頭の上まで持ち上げた。

ドアが閉まる音がして、足音が聞こえた。

気づかれないように布団を持ち上げて、サイトの行動を見ていると・
・

その足はベッドを通り過ぎて窓で止まった。
窓を開けて、ベランダにでて、腰を下ろした。

もしかして？外で寝るの？

キリの予想通りサイトはそこで寝るようだった。
だってそこから動かなくなったんだもの。

どうして？

キリは答えるはずのない背中に問うてみる。
だいぶ春に近づいているといってもまだ肌寒い。現に私も鳥肌立っ
たし・・・

外はもつと寒いはずだ・・・

キリには理解出来なかった。

キリは視線を横に移すと空いているベッドが目映る。

確かに使い魔はベッドで寝てはいけなとの主人ルイズの命令ではあったが、女王陛下は私たちの分（使い魔の分）のベッドも用意してくれたのでここでの効力はないと思える。

しかし、サイトは床でもなく外で寝るようだ。

背中が規則的に上下していた。

異世界人ということもあるだろうがサイトには自分たちとは決定的に何かが違うように感じている。価値観や考え方の違いであることは間違えない。

しかし自分には何かわからなかった。

けど、それでも別に構わなかった。

だが自分がそれを魅力的に感じていることはなんとなくわかった。自分にはない考え。

そして差別の少ない、階級制度のない世界で生きたことによる自分と違う価値観。

もつと知りたい。

サイトをもつと見てみたい。

初めて自分を人間と同じ扱いをしてくれた人。

悪魔だということを気にしない人。

一つの個人として認めてくれた人。もう一人いるが今はふれないうきたい。

サイトと会って生きていてよかったと思った。

生きているということを教えてもらった気がした。
何年かぶりに作り笑いではなく心の底から笑った。
それはとても気持ちがよかった。心の中で硬くなっていたものが柔
らかくほぐされていくように私は感じている。

サイトは元の世界に戻りたいと願っていた。
ならばそれまでサイトの隣で生きよう。

ルイズが明日私に何と云うかはわからない。
けれど、何とかなる気がした。
出て行けと言われてもサイトがどうにかしてくれる気がする。

不思議に思っている。
自分が自分でないものを頼るということに私は違和感を覚えた。
しかし、それもたまにはいいだろうと思った。
人生はまだ長いはずだ。
一度、一時だけ他人に頼ることはそれほど変だとは感じなかった。

しばらくして思い出したようにベッドから抜け出した。
キリのベッドの隣にあるサイトが使わずだった毛布を抱えてベラ
ンダに向かった。
思ったとおりベランダは寒くてすぐに肌に鳥肌が立った。

抱えていた毛布をサイトに掛けてあげた。
手を握るとやっぱりその手は冷たかった。

握った手を毛布の中に入れて杖を握りなおした。

呪文を唱える。杖を振る。

ウォームの呪文。

サイトが少しでも暖かくなるように・・・

空の双つの月を見上げたキリの顔は、ルイズに召還された日とは別人のような顔だった。

生きること誇りを感じ、目には意志の灯火が揺れていた。

16 新たなる決意

どこからか懐かしい声が聞こえた。
と、思ったら次の瞬間に俺は勢いよく後ろからど突かれた。
あまりに予想外だったので前のめりに倒れてしまった。

顔に触れたのは土でも、芝生でも、ましてや硬いコンクリートでもなかった。

それは柔らかくて・・・冷たくて・・・真っ白で・・・。

それは雪だった。

「冷てえ！」

叫び声をあげて上半身を起こすと

「少しは気づけて（笑）」

俺の目に映ったのは1ヶ月ぶり以上になる親友の姿だった。

俺は慌てた。

いつの間に元の世界に返ったんだ？

もしかしたらはじめから夢だったんだろうか？

「いつまでそうしてんだよ？帰ろっぜ」

「お、おう」

立ち上がって雪を払って歩き出してしまっている親友のもとに急いだ。

一面が雪に覆われていた。

道路に降り積もっている雪ははじに寄せられてしまっていて少ないが屋根の上は真っ白だった。

ここまで雪が積もっているのを見たのは久しぶりだ。

俺はさっきのお返しとばかりに雪を丸めて背中に投げつけてやった。
ばん。

いい音がして、親友が振り返る。

まるで俺の考えを察したような笑い方をして

「雪合戦、するか？」

見え始めた公園を指差した。

公園に行つて通りがかった友達を誘つて雪合戦をした。

まだ誰も踏んでない雪を踏みしめて公園中を駆け回った。

ずっとずっと笑い声が絶えなかった。

ずっとずっと聞こえていた。

ずっとずっと笑っていた。

小1時間程してみんなと別れて自宅へ向かった。

門をくぐるときもドアを開けるときも懐かしいなんて砂粒程も思わなかった。

本当に夢なんじゃないかと思った。

「ただいまー」

家のどこにいても聞こえるくらい元気よく言つて（叫んで）荷物を玄関横に投げ捨てて

学ランを脱ぐのもどかしくリビングに置いてあるコタツに足を差し入れた。

寒い冬に駆け回って冷えた体を温めるには最高だった。

そのうち肩までコタツに入って温まっていた。
すると全身がぽかぽかと温まり次第に眠くなって・・・

俺は目を開けた。

目の前を一匹のふくろうが飛んでいった。

ドラゴンの声も聞こえてきた。

「・・・夢か」

数秒考えてそう結論を出した。

酷く腰が痛みベッドで寝るべきだったと思った。

そこで不思議に思ったことがある。

俺、毛布なんて掛けてたっけ？

昨日の事を思い返してみる・・・キリにキスしてしまつてルイズと2人で夕食を食べたもののその後、俺が悪くないのに（重要）日付が変わるまで殴られて蹴られて部屋を追い出されて。

キリの隣で寝る気にはなれなかったのでベランダで寝たんだ。

やっぱり自分で毛布なんか掛けた覚えはない。

となると・・・キリが？

いやまさかと思ったが、消去法でも自分でなくルイズでもなくなると、やはりキリしか残らない。

振り返るともう起きていたらしくキリが見えた。

俺は途端に目をそらす。いろんな意味で。

どうしよう・・・やっぱりお礼を言つていたほうがいいのだろうか？

でも、次振り返ったときには部屋を出ていたらどうしよう。

俺に会いたくないとかだったら困るな・・・

さっき一瞬帰ったけど、まだもとの世界には帰れないし、しばらくはここにいないてはならない。すると必然的にルイズが浮かぶ。仕方がない。生きるには下僕だろうと犬だろうと頑張らなくてはならない。働かざるもの食うべからず、だ。

それに同じルイズの使い魔であるキリと一緒にということも忘れてはならない。

必ず俺たちは3人で行動することになる。

やはり仲直り、というか俺が謝らなければ生死が危うくなることになりそうだ。

「さつきからずっとそこで何してるの？」

いきなり背後からかった声に驚いて本日2回目ではあるが前のめに倒れた。

雪の変わりに今度は毛布があつたのでまたしても俺は無傷ですんだ。

「平気？」

「ああ平気」

反射的に立ち上がってしまつてキリと目が合いキスしたことを思い出して目をそらした。

なんと言えはいいかわからない、言つべき言葉がわからなくなつてしまった。

「昨日はごめんなさい」

俺は驚いた。

謝ったのは俺ではない。キリなのだ。

「え？」

反射的に口をついて出たのはそんな言葉だった。

「えって？」

「謝るのは俺のほうじゃないかと思って・・・」

小さな声でボソツと呟くとキリは驚いたような顔をした。

「なんで？」

「なんでって、だって・・・」

「だって？」

「俺が悪いことしちゃったから・・・」

そこでまたしてもキリが驚いたような、そして意外そうな顔をした。

「・・・私こそ驚いて逃げちゃったから謝ろうと思ってたの」

どうやら俺とキリはちよつとばかり（かなりだが）考えにずれるらしい。

俺が黙り込んでいたのでキリがもう一度口を開いた。

「だって、サイトは私を虐めたとか嫌がらせしたとかそういうのじゃないじゃない？だから、

私が逃げちゃって凄いいいことしたなって思ってたの」

やはり俺とキリにはかなりずれがある。

キリがそういうのにうといという可能性が高い。

キリにはそんなに自由が無かったと思える。だからだろうが。

この考え方も困るな。

つまりは嫌じゃなかったってことじゃん？

キリが意味わかってないだけで・・・まあ昨日のに深い意味は無いが。

「じゃあ仲直りしてくれる？」

そう言って上目遣いで俺を見上げたキリに、さっきまでの思考の原因もあってドキリとしたが

その感情は無視することにする。

「そうだな。じゃあ」

言いつつ小指を差し出す。

「ふーん。わかったわ」

出してから気づいたがこっちにその文化は無いのかもしれない。しかし、キリは俺の思考を読み取ってくれたらしい。

そつと自分の小指を俺のそれに絡めた。

柔らかい指が触れてまたドキツとした。

女の子の手を握るなんて小学校の時以来だ。

「「指きりげんまん、嘘ついたら針千本飲ーます、指切った!」」

指を離したくないと思ってしまつて、離れた指を無意識に目で追つてしまつて、キリが声をかけた瞬間慌てて目をそらした。

「変わっている、サイトの世界の文化つて」

「そうか?でも、面白いだろ?」

「ええ。とつても」

ふんわりとキリは微笑んだ。長く綺麗な黒髪がの背で揺れる。

「そのほうがいいよ」

「何が?」

「俺は今の笑い方のほうが好きだな」

「え?」

「いつものもいいけど、今のほうがいい。気に入った」

「あーえつと・・・そう。ありがとう」

今、ほんの一瞬頬が紅くなつたように感じた。

もう少し言つてみるか。

「今の自然な感じしたし、今までののはなんか作り笑いの見えなくも無かつたから・・・」

「うん・・・」

「無理に笑わなくても、キリならすぐ友達とか出来ると思うよ」

「悪魔でも？」

「ああ。俺だって貴族でも平民でもないんだぜ？」

「うん！」

一緒という言葉にキリが反応してぱあっと表情が明るくなる。

「これからも、使い魔頑張ろうね」

キリはもう一度さっきの笑みを見せてくれた。

17 いきなり何だよ・・・

キリと仲直りもできたし今日からまた頑張りますかと
と気合を入れなおし伸びをする。

すると視界いっぱい青空が飛び込んできた。
今日も綺麗な、雲ひとつ無い快晴だった。

どんなに自分が悩んでいようと困っていようと酷い目にあっていた
としても、空は変わらずにここにある。

結局、自分というちっぽけな存在が小さな頭をフル回転させて考え
ていただけなのだ。

キリやルイズと何かあっても、夢の中で故郷の親友たちに会っても
世界は何も変わっていない・・・そう思うと自分が悩んでいたこと
が馬鹿馬鹿しくなってくる。

長々と伸びをして

「よし。今日も使い魔やりますか！」

そう呟くと

「まずは、ルイズを起こしてこようよ」

毛布を拾い上げキリが俺の独り言に答えた。

「だな」

俺もうなずいてキリと共に部屋に入ろうとしたそのとき・・・

耳を劈くような轟音が空気を激しく震えさせた。

間髪あけずに4、5発。

キリが掴んでいた扉のガラスに亀裂が走る。

慌てて音のしたほうを振り返るとさっきまで快晴だった空に煙の塊
のような雲がいくつか浮かんでいた。

「い、一体なんだ?!?!?」

感嘆符だか疑問符だか何だか自分でもよく解らないふうに叫んで部屋に入るのも忘れて空を見ていると、背後で勢いよく扉が開いた。

「サイト！キリ！起きてる?!?!?」

そこから飛び込んだきたのは……。

解ると思うが、ルイズである。

「ルイズ今のは……」

キリはそこで言葉を切った。

まさか一人で起きてくるとは思わなかったが、あの音なら目を覚ますか。

そんなことを淡々と思いながらも、部屋に入って扉を閉めるとまだ体の方はさっきの音を忘れてなかったように。

力の加減を間違えて亀裂を深くしてしまった。

「そうよ、キリ。あ、あなたは解ってると思うけど……し、しゅしゅしゅ……」

ルイズは俺に鞭を打つときのようにつの音を連呼する。

「何だよ？」

俺が聞いてやると、一言こう答えた。

「襲撃よ」と。

しばらく……と言っても2、3分だが誰もしやべらなかつた。

しかし、開けっ放しの扉の外から男の太い声（たぶん騎士）や女の人の叫び声（幹部のほうの人の声だろうか）が聞こえてきて。

それが襲撃を受けた、ということが嘘ではないとわかったが……襲撃とは一体どういうことだろうか。

沈黙をやぶり再び口を開いたのはルイズだった。

「とにかく、私は着替えてくるから2人は出発する準備をしていて。

もしかしたら、出撃に加わるかもしれないから」

それだけ呟いて開け放していた扉から出て行った。

ルイズの声は実に淡々としていて珍しいくらい感情のこもらない声。もしかしたらルイズ自身もまだ信じられていないのかもしれない。

だが、今はそれをおいて置いてしなければならぬことがある。

「どういうことか聞いてもいいか？」

まずなによりも、キリに説明をしてもらうことが先決であり、そうしてから考えても今は遅いとは思わなかった。

「うん。話すよ」

答えた声はルイズと似て淡々としていたが、感情がこもっていないわけではなかった。

「このトリステイン王国は隣国・・・空に浮いている国アルビオンと条約を結んでいたの」

空に浮いている国！？

驚いて質問しようとするのとそれより早くキリが話しを再開した。

「それについては後で詳しく話してあげるから今はごめんね。条約は攻撃しない・・・みたいな感じかな」

「不可侵条約？」

「そう！そんな感じ。だからお互いが戦わないようにしましょうって結んだんだけどそれをアルビオンが破ったの。それで今さっきのがたぶん空砲だと思う」

その言葉に俺は恐怖を覚えた。それにさっきのルイズの言葉も合わせりその恐怖は余計に膨らんだ。

不可侵条約をやぶる・・・空砲・・・もしかしたら出撃するかもしれない・・・

それはつまり・・・

「戦争か」

「ええ」

戦争なんて自分には絶対に関係ないと思っていたけれど、今はそれが目の前で起きようとしている。

しかも自分もそれに加わるかもしれないのだ。

日本にいたときはそんなこと考えもしなかった。

「あともう一つ。アルビオンは今国内で内乱が起きているの。王党派と貴族派が戦っているんだけど、王党派は押されていて・・・でもまだ、ギリギリ生き残ってる。本当は姫様も助けてあげたいんだと思うけど、不可侵条約のせいで駄目だから」

「それを利用して王党派を貴族派が押してたわけか」

「そう。貴族派はレコンキスタって名乗ってる。・・・なんとなく解った？」

「ああ。大体は。つまりは不可侵条約を破って攻めてきたからこっちの人たちは驚いているんだ。それに戦争だから」

俺の言葉を聞いてキリは少し意外そうな顔をした。

「戦争なんてこの世界ではよくある事なの。サイトの世界のようにずっと平和じゃないから」

一瞬キリが頼もしく見えた。

そりゃあいつも色々こつちのこと教えてもらっているし、強いから頼もしいけど今は別の意味で。

「怖くないのか、戦争？」

「・・・サイトは怖いのか？」

ここまでたくさん聞いておいてキリの質問をはぐらかすわけにはいかないだろう。

それに今の俺にはそんな余裕なんて無い。

「怖いよ」

キリは少し考えるように黙っていたが

「大丈夫だよ」

そう呟いて俺に近寄った。

そしてキリは俺の手を握ってそれを腕ごと抱きしめた。

「私がついてるから。大丈夫」

驚いて数秒固まっていたが、一度脳が復活するといつもの3倍ましで回転をはじめ、と思っていた。

しかし、そんなふうにはならず・・・むしろゆっくりと回転を再開し始めた。

この行動に勘違いはしていない。

キリは俺を本当に安心させようとしてやっている。

それがちゃんと伝わってくる。

けれど、少しくらいはその・・・ときめいてもいいだろうか？

いつもこんな行動やルイズのようにツンデレがない分ギャップを感じてしまったり、腕にルイズより豊富な胸があたっているとかが。

ふうー。

一息立つと落ち着いてきた。

そうだ、俺は守らなくちゃいけない。

キリの笑顔と大事なご主人様ルイズを。

「大丈夫」

俺の言葉にキリは顔を上げた。そして、安心したように微笑む。

キリは握っていた俺の手を離れた。

やはり、思ったとおり俺を安心させて大丈夫だと思わせるためにやったようだ。

どこまでも俺に優しいキリ。

そんなキリを愛おしく感じて・・・

手離された手を掴んで引き寄せた。

驚くキリは無視して、2、3秒だけ抱きしめる。

離してキリの表情を見るとちゃんと伝わったようで、力強く頷いた。

そして満足げにマントを掴んで出発の準備を始めた。

キリのことを愛おしいとは思ってたけれど、そういう意味で抱き寄せたんじゃない。

キリがしてくれたように言葉だけじゃなくて、もっとほかの方法でも伝えたかったんだ。

だから、大丈夫といってくれてありがとう。と、その気持ちをこめた。

「大丈夫」

キリに聞こえないぐらい小声でもう一度呟いた。
途端に心の中に暖かい何かが広がる。

それは、キリからもらった安心と勇氣。

自分のやりたいことがちゃんとこなせそうだ。
というより、こなせなければ困るのだが。

「準備できたかしら？」

今度は勢いよくでなくゆっくりと扉を開けてルイズは入ってきた。
どうやら覚悟を決めたようでいつものルイズに戻っている。

さすが、俺たちのご主人様だ。

「結局出撃するの？」

「ええ。姫様がさつき部屋に来たわ。私は女官だから。もちろん2人にもついてきてもらっわ。いいわね？」

キリは頷いた。俺も頷く。

「よし。行くわよ」

マントを靡かせて先人をきって部屋を出て行った。
キリもそれに続く。

その2人の行動が最初に襲撃を受けたと言っていたときは180度違って（特にルイズ）なんとなく、こんなときにも関わらず苦笑いした。

いつまでも笑っているわけにも行かないので壁に立てかけておいた

デルフを引つつかんで2人を追って部屋を出た。

18 見つけたもの

俺とルイズとキリは城の長い廊下を進んでいた。

昨日も思ったがこの城はでかい・・・

多分東京ドームぐらい（そんなにあるかわからないが）の大きさはあるんじゃないかと思う。

それに中々複雑で俺が見た中でもっとも複雑な国会議事堂に引けを取らないだろう。

・・・というか何故こんなことを呑気に考えていられるのだろうか？
やはり、さっきのキリとの会話が効いているようだ。
初めに襲撃と聞いたときとえらい違いだ。

「何笑ってんのよ？」

そんなことを考えていたからだろうか。

知らずのうちに笑っていたらしく、ルイズが半眼で睨んでいた。

「なんでもねえよ」

気楽な口調で返す。

「あんまりなめてないほうがいいわよ。小さな油断1つで何が起くるか分からないんだから」

「はいはい」

俺とルイズとの会話を聞いて笑いだしたキリ。

「サイト、もう余裕ね」

軽い口調で言う。

「？キリ、サイトになんか吹きこんだわね？」

「さあ、どうかしらね」

はあー。とため息をつきながらもルイズも微笑む。

「今回の相棒は余裕だなあ。攻められてる城で笑ってたからなあ」
俺たちの場違いな笑い声を聞いて次に口を挟んできたのはデルフ。

「まったく、てえしたもんだぜ」

そんなこんなでようやく馬小屋にたどりついた。

馬小屋といっても外ではなく、城と繋がっている。

「ルイズ」

声を掛けてきたのは姫様だった。

いつものドレスを脱ぎ、鎧を着こんでいる。

「姫様、遅れてすみませんでした」

ルイズが駆け寄っていく。

話が終わるまで俺たちは壁際で通行の邪魔にならないよう待機でいいだろう。

キリは頷いた。

「サイト、本当にいつも通り・・・いつもより余裕ありそう」

「キリのおかげだよ」

俺は苦笑いした。

「私たちが行って役に立つかは別として、ルイズを守りましょう。精一杯」

「ああ。そのつもりだ」

と一度頷いてから、改めて俺は言いなおした。

「・・・キリも守るよ」

俺のその言葉にキリは即座に言い返した。

「サイトは私が守る」

そして顔を見合わせて笑った。

「まあそういうことにしておくよ」

「じゃあそういうことにしておいて」

その時俺の視界の端で何かが鈍く光った気がした。光った方向を見る。

すると、確かにそれは鈍く光っていたが、

それはあまりにも意外なものでこんなところにあるのが不思議に思えるものだった。

「サイト、キリ、行くわよ。姫様から命令が……って何やってるのよサイト！！それは国宝よ！！あんたなんか触っていいものじゃないわ」

ルイズが何か言ってきたが俺は聞いていなかった。

光っていたものはゼロ戦だった。

まさかこんな所でこいつに会えるとは……

と感動していたからだ。

「ちよつとサイト、聞いてるの！！」

近寄ってきて耳元で叫ぶ。

その声で俺は我に返った。

「わあ！びつくりした」

「びつくりしたじゃないわよ。いい？これは国宝なの。こ・く・ほう！！わかる？この国の宝なの。」

あんたみたいな平民が触っていいはずないのよ」

早口でルイズは叫び散らした。

言い終わって肩で息をしている。

そんなに大きな声で言わなくてもわかりましたよ、ルイズさん。

ていうか、普通に耳が痛いです。

「どうしたの？ルイズ。そんなに叫んで」

ルイズの声に驚いたのか、姫様が走ってきた。

「ひ、姫様！申し訳ございません。使い魔が国宝に触つ……」
「どうやら息が切れたらしい。」

はあはあと必死に酸素を吸いこんでいる。

姫様は安心したように微笑んだ。

「ルイズ、いいのよそんなこと。使い魔さんはこれに興味があるようですから？」

何と優しい姫様なんだろう。

わざわざこつちに話を振ってくれるとは・・・

「姫様、まだ出発までに時間ありますか？ちよつと興味あるんで色々見てたいんですけど・・・」

「ちよつと、サイト！」

俺の言葉にすぐさま鋭い声を上げるルイズだったが

「いいのよ、ルイズ」

との姫様の声に遮られた。

「出発まではまだ一時間くらいあるから構いませんよ。それに置く場所がなくてここにあるので使い魔さんに差し上げてもいいのですけど・・・」

「えつと、じゃあ借りていいですかね？」

「ええ。どうぞ」

「アンリエッタ女王陛下」

いきなり姫様が呼ばれ何事かと思ったが、呼んだのは高そうなマントをはおった人だった。

上級階級の人だろうか？騎士には見えないからな。

「では、ルイズ1時間後に」

「はい、姫様」

姫様はマントをはおった人と共に外へ出て行った。

「まったく、何を考えているのかしらこの使い魔は」

ルイズが得意の仁王立ちを繰り出した。

しかし俺はその声を聞かずに口戦に夢中で攻撃は効かなかった。

「もう！！」

ルイズは地団駄を踏んだ。

それをキリが慰める。

俺はしばらくゼロ戦に手をあてていたが、色々な情報が直接脳に送り込まれてきて驚いた。

きつとこれがガンダールヴの力なのだろう。

そうやって手を当てていると自分でも動かせるのではないかと思っ
た。

このゼロ戦は固定化の呪文を掛けられているようだし、多分機銃も
まだ使えるだろう。

弾は十分にある。

ガンダールヴの能力で敵の艦隊を撃ち落とす自身は何故があった。
しかし、このゼロ戦には最も重要なあるものがなかった。

「燃料がない」

例え、機銃が何十発ついでいようとどんな天才操縦士がいようと燃
料であるガソリンがなければ話にならない。

「やつぱりダメか・・・」

手を離してため息とともにき捨てた。

「何がダメなんだい？」

と背中からデルフの声。

「燃料が無いんだ。動かすための」

「そっか、確かに燃料が無きゃただの鉄の塊だな」

何とかならないものか・・・

燃料さえ何とかなれば戦力になるのだが・・・

「何とかならないかなあ」

俺がそうぼやくと、デルフはまじめに何かを考えようとしてくれた
らしく俺の背後で「うーん」と言う低い声が聞こえてきた。

しばらくそうしていたがデルフはふと思いついたように言った。

「そういえば悪魔の子の能力に“再生”ってのがあった気が・・・」
再生・・・もしかしたら無くなってしまった燃料を元に戻すことが
できるかもしれない。

「“再生”か・・・。サンキューデルフ。キリに聞いてみるよ」

俺はキリを呼んだ。

19 信じるということ

「なあキリ」

「何？」

呼んだのはいいが普通に“悪魔”という単語を使っているものなのだろうか・・・

キリはその能力を持って生まれたせいで色々と辛い思いをしてきた。はたして、俺が簡単に言っているものなのだろうか？

そう悶々と考えていると、なんだか言い出せなくなってしまった。

そんな俺を見かねてデルフが助け舟をだす。

「なあ魔女っ子、確か悪魔の子の能力に“再生”ってのがあったよな？」

デルフの言葉にキリは眉をひそめた。

聞かれたくなかったのだろうか？それは予想していたが

「あるよ。でも、今なんでその話？」

デルフの言ったとおりその能力は存在するらしい。

ということはまだ望みはある！！

「あとは相棒に任せませ」

「つえ！？おいデルフ！！」

鞘に入る音がした。

いきなり振りやがって。まあ話だしてくれたデルフには感謝だが。

「キリ、ちよつと来てくれ」

俺はキリを燃料を入れるところへ連れて行き、キャップをはずした。とたんにガソリンのなんともいえない匂いが漂ってくる。

キリも匂いを嗅いだようで苦い顔をした。

「これは俺の国にあった兵器なんだ」

「それはなんとなく読んだからわかった。それで燃料が無いって？」
さすがに呼んだからには何かあると思ったらしく俺の心を読んでい

たらしい。

「ライバシーとか完全無視だな、と思いつつもわざわざ話さなくていいのでそこは助からなくも無い。」

「ガソリンっていう燃料で動くんだけど、それが無くってその“再生”ってやつで何とかならないかな？」

「これって武器として使えるのよね？」

「ああ。俺の国ではこいつに乗って戦ってたんだ」

その言葉にキリは頷く。

「わかった。やってみる。この中にそのガソリンってのを入れればいいのね？」

「ああそうだけど・・・すぐできるのか？」

「わかんない。“再生”は怪我の治療に使ったりはするけど、こういうものの再生はしたことないかな・・・でも、人形を直したことはあるかな？」

「頼むよキリ。ちょっとやってみてくれ」

キリはもう一度頷き、燃料を入れるそこに手をかざした。

すると、突然そこが光だした。

よく見ると光っているのはキリの手。

そこから眩い光が放出されている。

「・・・“再生”！」

キリがそう言うのと光はさらに輝き、数秒でそれが嘘のように消えた。

漂ってくるのは先ほどより強烈なガソリンの香り。

中を覗いてみるとそこには並々とガソリンが入っていた。

どうやら成功のようだ。

「サンキューキリ。凄いよ！！一瞬でこんなにしちゃうなんて！！」

「良かったあ上手くいつて。これってこんなことも出来るんだ」

2人でわいわいと喜んでいると、そこにご主人様がやってきた。

「今度は何なのよ？」

「ルイズ！これで戦場まで行こうぜ。敵は空に浮いてる艦体なんだから？だったら空から行ったほうが絶対有利だと思うんだ」

「何？もしかしてこれが飛ぶとか言っくんじゃないかしら？さすがに魔法でもこんな鉄の塊は飛ばないわよ」

ルイズは人を馬鹿にしたように笑う。

俺は何とか言い返そうとしたが自分が異世界人だといった覚えはない。

変にものを言っていると面倒くさいことになりそうだった。それだけは避けたい。

「これは飛ぶよ」

唐突にキリが口を挟んできた。

「？なんでそう思うの？」

「それは・・・えっと、サイトが言ってるから？」

「・・・何それ？」

折角言ってもらったキリには悪いが俺もルイズと同じことを思った。俺が言ったから？何なんだろうその理由は・・・

まあ確かに飛ぶんだが・・・

「ルイズは自分の使い魔の言うことが信用できないの？」

「え？何よそれ？そういう話じゃないでしょう」

「そういう話よ。ルイズがサイトのことを信用してるなら彼が飛ぶと言ったら飛ぶって思えるはずよ。だから、私は飛ぶと思う。サイトが飛ぶって言ったから私はこの鉄の塊が飛ぶと思う。思えるよ」

ああなるほどね、そういう理由か。

これは少し喜んでいいのだろうか・・・そんな疑問を持ちつつ、なんの疑問も無く飛ぶと信じてくれたことを嬉しく思う。

「別に私はサイトを信用してないわけじゃない。サイトもキリも大事な私の使い魔だもの。・・・そうね、サイトが飛ぶって言ったなら飛ぶ。悪くないかもねそういうのも。信じてあげるわよ」

「本当か!？」

まさかすぐに信用してくれるなんて!!

キリにはまた助けられたな。今日だけで何回目だろうか？

「それで、これに乗ってアルビオン軍の艦体に近づけるのね？そうしたら何で攻撃するの？」

「虚無よ。ルイズの虚無で多分いけると思う」

「でもまだ使ったこと無いわ。そんなものを期待するのは間違いじゃない？それに私は・・・ぜ、ゼロのルイズなのよ？私は、魔法なんて使えないわ」

自信なさ気にうつむく。

確かにそれは一理ある。ルイズが魔法を成功したところなど見たことが無い。いつも爆発するだけだった。

「大丈夫。きつと上手くいくよ」

キリの目は本物だった。絶対にルイズは成功させると信じていた。

「な、何でそう思うの？魔法の才能ゼロの私が何で絶対出来るって思うの？」

「サイト、わかるでしょ？」

キリは俺に話を振ってきた。

一体なんだろう？キリがそこまでルイズを虚無が使えると信じているわけは・・・

「相棒、ヒントをやるのか？お前さんはガンダールヴだろ？」

ガンダールヴ・・・ああそういうことか

「何？ガンダールヴって？」

ルイズはもうわけがわからないようだ。

それはそうだろう。話したか話してないか覚えていないが、多分話していないと思うから・・・

「俺はガンダールヴ、キリはヴィンダールヴ。そしてルイズは虚無の担い手。歴史では、ガンダールヴとヴィンダールヴは虚無の担い手に仕えてたんだ。だから、俺たちの主人であるルイズは虚無が使えるんじゃないかって」

「虚無には色々あるらしいから爆発っていう魔法があってもおかしくないのよ。だからそれに特化していたら、他の魔法が使えない可能性は十分考えられるよ」

俺たちの言葉を聞いてルイズは目の色を変えた。

そうではないかと思い始めたのだろう。

「私、姫様に話してくるわ」

駆け出そうとするルイズにキリは言う。

「虚無のことは言わないでよ。勝ったら、伝えよう。ね?」

「それはわかってるわ。3人で行っていいか聞きに行くのよ」

ルイズは上機嫌でスキップしつつ、振り向いてウインクをした。

それは、俺がみたどの表情よりも可愛くて・・・

まるで、天使の笑みだった。

20 やるしかない・・・（前書き）

久しぶりの更新です！

全体的に見て各話が同じくらいの長さになるように編集しました。
この20は新しく更新したお話です。

コメント、感想待ってます。。。

20 やるしかない・・・

ルイズが俺の視界から見えなくなつて、俺はすぐに行動を開始した。ゼロ戦の翼部分からよじ登つて風防を開けてみる。

そついや昔戦闘機のプラモをよく作つたなあ。

そんなことを思い出しつつコックピットに座つて見た。

夢みたいだった。絶対に実物を見ることはないなと思つていたゼロ戦が今目の前にあつて、

それをこれから操縦するなんて・・・

おそろおそろ正面の操縦棒に触れてみる。すると、途端にルーンが輝きだした。

同時にこのゼロ戦の操作方法はもちろん、性能や長所短所そんなことまで脳に情報が流れてきた。

目を瞑つてそれを“楽しんだ”。今の俺にはそんな表現があつてゐる。

数秒して目を開けると、さっきまで思つていた疑問がよりいっそう強くなった。

俺はこれを操縦できるのだろうか・・・

はじめからそれが頭に引つかかっている。

初めて飛ばすのに後ろにはルイズとキリが乗っている。けして、失敗など許されない・・・

もし、飛ばなかったらどうしようか？

それはガソリンを再生して（いれて）もらう前から思つていた。そうなれば、せっかく聞きに行つてくれたルイズ、わざわざ使いたくない悪魔の力を使つてくれたキリに申し訳ない。

となると・・・本当に失敗することは出来ない。

「ねえサイト、これ本当に飛ぶの？」

考え事をしていた俺にいつの間にも上ってきていたのだろうか、キリが問いかける。

今ちょうどそれを考えていたところだった、また読んだのか？

「ああ。俺の世界ではこれで戦争をしたんだ。空中戦ってやつだ」
「ふーん」

聞いてきたくせにあまり興味がなさそうだ。

それなら、少し放って置いてほしい。今、答えが出なかったとしても自問自答しておきたいことだ、これは。

それだけ言つとキリは翼の上に座った。俺に背中を向けているので表情は見えない。

黙ってルイズを待っているのだろうか・・・

とりあえず、俺は操縦棒に向き直って計器類を確認し始めた。もちろん自問自答をしながら。

「・・・不安なんだ？」

唐突に言つた。まるで独り言のようだったが、ちゃんと疑問符はついている。

俺は動かしていた手を止めた、というよりその言葉に止められた。思考が一瞬停止する。

「サイト、不安なんですよ？」

答えが来なかったからだろう、主語を付け直してもう一度言つた。だが、けして振り返りはしなかった。

不安だよ、確かに。

そう心の中だけで答える。だが、けして口にはしない。キリが振り返るまでは。

こういう時のキリは絶対に心を読まない。それは、断言できる。
だから、振り返るまでは絶対に口にしない。

「・・・・・・・・・・」

数秒の沈黙。

「・・・・早くしないとルイズが戻ってくるんだけど？私あんなこと
言っちゃったし、不安にさせて虚無に支障が出たら困るんだけど？」
キリにしては珍しく挑発口調。そっちがその気ならこっちだってひ
かねえし。

「そうだな。でも、何の根拠も無く言ったお前が悪い」

初めてキリをお前って行った気がするなあと頭の端で考えつつ、“
あんなこと言っちゃった”というところでやっぱりなあーと凹んで
いる俺がいてそれが何故か悔しくて仕方ない。

「・・・・・・・・・・」

数秒の沈黙。

「・・・・心配ないみたいだから私も何かしようかな。とりあえず
人乗れるように後ろのこれはずさない」と立ち上がってコックピ
ットを覗き見る。

いきなり話をずらされて釈然としなかったがとりあえず作業をしな
くちやと手を動かし始めるが“不安なんですよ？”とのキリの言葉
が再生されて仕方ない。必死に頭を振って追い出そうとしたときだ
った。

ギーと少々耳障りな音が耳に届いた。まるで金属を何かとすり合わ
せたような音。

「きゃっ」

その声に顔を上げるとキリが下に落ちてくところだった。足を滑ら
せたのだとすぐに理解し手を伸ばす。伸ばした手は空を泳いでいた
キリの手と繋がった。

「うっ」

掴んだ瞬間車体が少し傾いた。杵に腹がぶつかった。

手に力をこめて一気にキリを引き寄せる。思った以上にキリは軽かった。

「危ね、落ちたらどうすんだよ」

「・・・あ、ありがと。私もどうしようかと思った」

顔を上げると目と鼻の先にキリの顔があって反射的に目をそらす。

「危ないから下にいろよな」

「ごめん。それとかそうと思って」

キリの指差した先にあったのは、他のゼロ戦と通信をする無線機。つまりは3人乗れるようにしようということだろう。

「俺がやるし」「私のほうが早い」

と即答。

「とりあえず落ちられると困るから気をつけてくれよ」

それだけ言って作業を再開しようとするといきなり抱きしめられた。抱きつかれたというほうが近い。そういえば手掴んだままだったなあと驚く前に思った。そしてすっかり驚く。

「がんばれ」

呟いてキリは手を離れた。きれいにジャンプしてコックピットに乗り込むと杖を取り出しあの呪文。

「レビテーション」

無線機は宙に浮いてゼロ戦の外へと運ばれた。杵を飛び越えて下に飛び降りるのを見て、慌てて捕まえようとしたが同じ呪文でぶかぶかと浮いて、運んだ無線機に近づいていった。

そのあまりの動きの早さに呆然としていたが結局それが言いたかったのかと頷く。

「キリ！」

俺の声にキリは振り返る。親指を立てて“がんばれ”の返事をする。キリも親指を立てて返した。

もう一度頷いて、「大丈夫」と小声で唱えると心に暖かいものが広がった。

ルイズが戻ってきてどこから乗ればいいのかと聞いてきた。

キリのように途中で落ちそうになっても困るので――

「キリ頼む」

「言われなくても・・・レビテーション！」

ルイズはキリと同じ席に座った。2人とも小柄なので1つのシートで座れるのだ。

「3人で行っても良いそうよ。それで、全員が出撃したら来なさい
つて」

「行けそうで良かった。もし駄目だったらこの作戦は失敗だし」

「だな」

それに俺は頷いた。

「本当に飛ぶのよね？」

キリと同じこと聞いてくる。俺は苦笑。

「大丈夫大丈夫」

「なんであんたはそう気楽なわけ？」

「そんなことよりお前のほうはどうなんだよ」

「どうつて・・・」

やはり考えることは一緒か。ルイズも不安だろう。今まで魔法は失敗してばかり・・・

それを切り札として使おうっていうんだからな。

「大丈夫だよ、ルイズ」

「なんでキリも余裕なのよ？あんた達絶対おかしいわ」
ため息をつくルイズ。

俺は完全復活をとげたためそんなことは関係ない。

「“大丈夫” って言ってみて」

「はあ？」

キリ、いきなりそれかよ・・・ルイズに効くのか心配なところだ。
「とにかくっ」

「だ・・・だいじょうぶ」

ルイズは渋々といった感じた。キリ、俺に効いたから誰にでも効くって勘違いしてんじゃないかな？

「よし、もう平気ね」

「全然平気じゃないわよ！！」

「やっぱりな」

絶対不思議そうな顔してるだろうなあと思いつつ

「とりあえず後向きじゃなくって前向きに考えろって言いたいんじゃないのか？駄目だ駄目だって思ってるんじゃないや成功しないものものじゃないだろ？」

「そう気楽に考えられないから困ってるんじゃないっ！」

「・・・平気。ルイズが失敗したら私が責任取る」

「はあ？何よそれ」

「てかさ、ルイズが失敗したところで姫様たちの部隊が消えるわけじゃないんだからそう焦るなよ」

俺の言葉にルイズは一度言葉を呑む。

「・・・まあ言われてみればそうだけど」

いつの間にか見渡す限り草原で、人の姿は無くなっていた。話しているうちに出撃してしまっただろうか。辺りを静寂が支配していた、俺たちのところを除いて。

俺は何の心配も不安も疑問も無くゼロ戦のエンジンに火をつけてやると、ベテラン操縦士のような滑らかで自然な操縦でゼロ戦を空へと飛ばした。

後ろの2人から感嘆の声が上がる。・・・やっぱり完全には信用してなかったんだな2人とも。

「どっち？」

方角だけ聞いてルイズの示した方向にゼロ戦を飛ばした。一定の高度を保ち飛行を始める。

そつえば。と思い出し足元からあるものを取り出すとそれを後ろ

の席にまわす。

「キリ、つけて」

「つけてって言われても」

「一体何に使う機械だろうと困惑しているのだろう。使い方を教えようと口を開くと、

「これ、便利ね。通信機って言うの？雑音入らないし会話しやすい耳もとからキリの声が聞こえた。どうやら読んでくれたらしい。俺が渡したのは無線機。」

「2つ在ったから必然的に俺とキリかなあと別にそれだけが、キリとは連絡取れると便利そうだし。」

「何よ、私の分は無いわけ？」

「やっぱり聞いてきたか・・・」

「別にいらないだろ？お前はとりあえず現地に着くまでそこに座っててくれよ」

「おい相棒！見えてきたぜっ」

「立てかけておいたデルフがまもなくの到着をつげた。」

「ああ、俺にも見えた。じゃ、気合入れていくぜっ」

「うん！」

キリの力強い返事が俺に届いた。

21 虚無発動

空中に浮かぶ巨大な船。船の周りを飛び交うドラゴン。辺りに響く巨大なエンジン音。

そこに浮かんでいたのはただの巨大な船ではない。何本もの巨大な筒、大砲が乗っている。ドラゴンは火を吐きこちらを威嚇してくる。そのたびにサイトは手に入れたばかりの同じ故郷育ちのゼ口戦を操った。かわしてかわしてかわして・・・どんな方向からの火でもゼ口戦に当たることはなかった。ドラゴンが一度に何匹も襲ってくるわけではないが、もし襲われてもゼ口戦のスピードには追いつけないからだ。

「サイト！いつまでかわしてるつもり！？」

おとなしく座っていたルイズが相手の攻撃をかわしているばかりのサイトの戦い方に文句をつけ始めた。

「そんなこと言ったらこれ以上近づいたら大砲に狙われるんだ。

何も考えずに来たから策なんか無いし・・・何か策は無いか？」

ルイズのように大声で叫ぶと集中が途切れそうなので無線でキリに話しかけた。

「あんたねえー」

思ったとおりルイズにも聞こえていたようなので問題無い。

「・・・これにも銃器は積んであったはず。それを使えない？」

「あのドラゴンを殺せつてのか？」

「何甘いこと言ってるのよ！そんなこと言っていると私たちが先に殺されるわ！」

無線のマイクにルイズが無理やり割り込んだようだ。耳が痛い。

殺される・・・か。確かにそうかもしれない。ここに来て自分が思っていたものとは違うということを思い知らされた。それに相手は確実に俺たちを殺そうとしている。だからやられる前にーになるんだろうけど、ここにきて俺は殺すことを戸惑っている。迷っている。すごく、息苦しい。

「無理だよ・・・俺には出来そうに無い・・・」

言おうとは思っていなかったがぼろりと言葉が零れ落ちた。

「・・・・・・・・」

俺の弱音を聞いて2人は何も言わなかった。ルイズは呆れてるのかもしれない。キリは・・・きつとほかの策を考え出してるだろうな、俺は役に立てそうに無いから。

「相棒ちよつといいか？」

コックピットに立てかけてあるデルフだ。いつものカシャカシャという音はエンジン音に隠れて聞こえてこない。

「何だ？」

正面から放たれたブレスを機首を傾けてかわした。

「あの戦艦の上は死角になって大砲はあたらねえ。ドラゴンさえ何とかなればあそこから娘っ子の虚無がぶつ放せるんじゃないか？」

「確かに・・・サイト、大砲をかわしてあそこまで行ける？」

「ああ。それなら出来る！」

「ちよつと待つて。じゃあドラゴンはどうするのよ。大砲だけかわせてもブレスでやられるわ」

ルイズの言うことはもつともだ。本来ならドラゴンをゼロ戦で打ち落としてから向かえばいい。だが、俺はそれが出来ない。ならドラゴンはどうするのか・・・

「心配ない。ドラゴンは私に任せて」

「キリが？」

「私はルイズの虚無にかけてる。けど射程範囲に入らなければ撃て

ないから意味が無い。ルイズに虚無を唱えてもらわないと何も始まらない。そのステージは私とサイトがセッティングする」

「そんなの危険だ・・・」

「ならサイトがドラゴンを倒してくれる？」

「それは・・・」

無理だ。発射レバーをもう一度握ってみるが上手く力が入らない。でも、キリに危険なことをさせるわけには・・・

「大丈夫よ。私だってルイズの使い魔。獣を操るヴィンダールヴ。これくらいどうにか出来なきゃやってられない」

俺たちに言うというより自分にそう言い聞かせるとキリは風防に手をかけて、それを開けた。風を切る冷たい風が頬をなぶった。その強い風に俺は目を瞑り掛けるが必死に我慢し操縦を続ける。

「振り落として！」

右手を近くのドラゴンに向けて少し強めの口調でそう言った。するとそのドラゴンは背に乗っていた自分の主人文字通り振り落とす。

「凄い・・・」

ルイズが何か呟いたみたいだったけど何を言ったかは俺には聞き取れなかった。

けど次の

「ちよっと！」

は聞き取れた。

「どうした？」

俺が前を向いたまま声を投げるとルイズから驚きの言葉が返ってきた。

「キリが飛び降りようとしてるのよ！！」

「何だって！？」

冷静に考えてみればゼロ戦から魔法を放つのは俺の操縦に異常をきたすと思っただろうから、ルーンの力で操ったドラゴンを使おうと

思ったのだろうけど・・・さすがにいきなりやられたので俺たち2人は慌てた。それにキリがルーンを使って操っているところを俺はあまり見ていない。だから失敗したらと思うと余計に不安になった。しかし。

「うるさい」

キリはそれだけ言うとゼロ戦から飛び降りた。まるでスキューバーダイビングをやっているようにゆっくりと落ちていく。ドラゴンは落下してきたキリを見事にキャッチすると上へ上へと急上昇を始め、ゼロ戦がいる位置より高度へ上がっていった。

ドラゴンの腹の部分がここからはっきり見えるようになったとき急上昇をやめ、旋回を始めた。それと同時に何か今までこの場に無かった、あえていうなら場違いな音が聞こえてきた。音というよりはメロディーのような。流れるようでかつ躍動感のあるメロディー。俺はそれを知っていた。聞いたことがあった。

これはキリの横笛の音だ。デルフと共に学園でもらったあの横笛の音だ。

「おう。上手いじゃねえか」

「知ってるのか？デルフ」

「おうよ。もう1000年は経つがな。前のヴィンダールヴがこれを吹いてるのを聞いたことがある」

「綺麗な音ね。でも何でこんなに良く聞こえるのかしら・・・」
「言われてみればそうだ。風防は閉じてあるはずだし、何よりエンジンの音のせいでお互いの声も叫ばなければわからないのだ。それなのに横笛の音ははっきりと聞こえる。聞こえるというより、身体の中で響いている。」

「耳から入ってるんじゃない。心に響いてるんだ」

「心に・・・響く・・・。なんだか不思議な感じね」

「あれを使えば一度に大量に操れるんだ。こういうときにはもってこいの武器さ。さあ相棒、邪魔なドラゴンは居なくなっただぜ。娘っ子を連れて行くんだろ？」

「よし、ルイズ捕まってるよ！踊れ、じゃじゃ馬っ！！」

ゼロ戦はもうサイトの身体の一部のようだった。

「こんなものか」

キリは吹いていた横笛を下ろした。

ようやく辺りにいたドラゴンたちの主人を落とさせ、ここから離れるよう命じ終わったところだった。この方法は思った以上に精神的につらい。精神を研ぎ澄ませるのは雷を軸とし風や氷を操るキリにとって不得意なことでは無かったが、ルーンの力も合わさりあまりに鋭くなりすぎていたようだ。細部まで感じとりすぎて、脳がついていけない。

途切れそうになりながらも精神の糸を編み、頭を振って気持ちを切り替えると先に行ったサイトとルイズを追って、一匹のドラゴンを飛ばそうとした。

「ドラゴンは片付け終わったよ。今そっちに向かうから」

無線でそう伝ええると、制止の言葉が返された。

「もう大砲の死角まで来たから大丈夫だよ。ステージは出来た。後はルイズだけだから」

「わかった。ここから見てる。ルイズに後は頼んだって伝えてほしい」

「りようかい」

キリはドラゴンを制止させてそこでルイズの成功を祈った。

風防をあけると、やはり風は冷たかった。

いよいよルイズの番。ルイズは席を立つとコックピットに侵入してきた。

「なんだよ？」

「両手が塞がって立つてられないの。支えてて」

そう言っただけの足元に立つたがするとゼロ戦の操縦が出来ない。

ふと思いついてルイズを肩車してみた。これなら片手はなんとか空くので大丈夫だろう。

ルイズの太ももが首筋に当たってよくわからない変な気分になったが、この際無視だ。ルイズが唱え終わるまで耐え抜いてみせる。

「私本当に出来るのかしら」

杖を取り出して、始めるか？と思っていたが、ルイズは弱音を吐き始めた。初めての魔法がこれでは緊張も不安もする。

「キリが後は頼んだって」

「わかってる。でも、失敗したら・・・もし失敗したら・・・」

「失敗なんかしないよ。俺だってこいつを飛ばせるか凄く不安だった。けど飛ばしてみたらこんなに簡単にいうことを聞いてくれる。

俺みたいな馬鹿な使い魔だって出来たんだ。やることは違うけどお前に出来ないわけがない」

言い切った。深く考えたわけではないけれど自然とそんな応援メッセージが言えた。

ルイズにこのメッセージが伝わっただろうか・・・

「当然よ！私を誰だと思ってるの？ルイズ様よ。任せなさい！」

「よっ！言うじゃねえか娘っ子」

「サイト！しっかり捕まえといてよ」

「ああ。ルイズの力をやつらに見せてやんな」

長々とした呪文の暗唱。高いはずのルイズの声が、腹に低く響いた。ルイズが杖の先を戦艦に向けた。そして、最後に

「エクスプロージョン！！！！！！」

叫んだ。

光り輝く球体が戦艦を包み込む。

ばちばちという雷に似た音が聞こえた。何かが爆発する音と人の悲鳴も聞こえた。

光が収まるとあつたはずの戦艦が消えていた。どこに行つたのだろうと辺りを見回すと高度の低い位置に見つけた。どうやら動力源を上手く破壊できたらしい。煙を出して落下を始めている。不思議なことにあの爆発の後でも戦艦の上で走り回る人間を確認できた。

「殺してない？」

肩から下ろしてやるとルイズはそう言った。

「生きてる。不思議だよな、あんなに大きな爆発だったのに・・・」

「誰も殺したくないって思いながら撃つたの。叶ったかしら？」

「そうかもな。お疲れ」

「ありがとう。本当に疲れたわ」

ルイズは後部座席に座ってだるそうに髪をかき上げた。

22 達成感悲観

一隻の飛空戦艦が煙を上げながら落ちてく。

その上で叫び慌てる人の声と遠くから聞こえるゼロ戦のエンジン音を聞いていた。

終わった

出来た

私にも出来た

私にも、誰かが守れるんだ

ドラゴンの上で座りこみ戦いの行方を見守っていたキリは飛行戦艦が落ちていく瞬間、ふとそんなことを思った。

自分に誰かが守れるなんて思わなかった

自分が誰かを助けることなんて無いと、それは出来ないことなんだと、前から思ってた

それはもう決まっているんだと思ってた

自分を嫌い、避けていく人達を見て自分には出来ないことだと、確定されて決まってるんだったずっと思ってた

変わらないんだって思ってた

けど・・・私は出来たのだろうか。

キリは呆然と自分の手のひらを見つめる。

これが、私が行ったことがルイズやサイトを守ったか。というとうだろうとは思ってしまったが役に立ったことは確かだろう。

いつもギルドの依頼を解決クリアしたときだってこんな感情ない。

なんだろうかこれは。

達成感？

そう知っている言葉に置き換えてみるが、私はたぶん純粹に嬉しいのだろう。

なんだか初めて自分が自分じゃない気がした。

キリの手のひらをやつと雲から出てきた太陽が明るく染め上げた。もしかしたら変われるかもしれないとキリは自分にある可能性を初めて見た気がした、あの2人といると。

キリは勢いよく立ち上がって大きく深呼吸をした。

そんなとき、サイトから連絡が入った。

「キリ見てたか？」

「うん見てた。凄かった」

「俺も思った。・・・キリ悪いけどちょっと下見てくれ」

サイトに言われるまま地上の草原を見ると兵士達の姿があった。

村人の姿もある。

さっきまでは気づかなかったが、先に降りていた兵士たちだろう。

キリは先ほどぼーっと座って感情に浸っていた自分を呪った。

「気づかなかった。今すぐ降りる」

「頼む。俺もすぐ行く」

無線が途切れるとキリは指示を出す。しっかりとドラゴンの背にしがみついた。

サイトはゼロ戦を無事に着陸させるとすぐにデルフを抜いた。

下が草原で本当に助かったと思う。

ルイズに一声かけると村に残る残党を探して走り出した。

残党を見つけると死角からタツクルをしてデルフで杖をぶった切った。

とりあえずこれでやつらは身を守る術がなくなるのだと前にキリに教えてもらった。

それを何度も繰り返し返して少しずつだが確実に倒していると、先に降り立ったキリを発見した。

「魔女っ子囲まれてるみたいだな」

デルフのその言葉を聞いてさらに速く走り出す。確かにキリは1、2・・・5人に囲まれていた。

「キリっ！」

叫んで一人に衝撃波を放った。

背中に直撃して男を吹き飛ばす。

一瞬彼らの意識がこちらに向いた。

だが、キリにはその一瞬で十分だ。

「トルネード！」

キリは俺が衝撃波を放った瞬間にはもう杖を振り下ろしている。

猛烈な風が吹いてあつという間に竜巻を起こす。

どうやら暗唱は終わっていたらしい。

空中から4人の男が落ちてきた。

大分酷い有様ではあるがとりあえず息はしているようだ。

キリのトルネードは雹のおまけつきだから傷痕が生々しい。

「まだ残ってる」

残党がすべて倒し終わっていないという意味だろう。

「ああ。いこうぜ」

俺はキリに追いついてその背中を追いついていく。

「きゃー！！」

そんな悲鳴が林の向こうから聞こえた。

木々の間から兵士と村の人間の姿が確認できた。

一人の女の子が兵士に剣を向けている。

早く行かなければ・・・

だが掻き分けて行くには時間がかかる、どうすればいい・・・

「サイト掴まっつて」

「は？」

いきなりすぎて何て言ったか聞き取れなかった。

何？掴まれっつて言ったのか。

キリは言い直さなかった。

その代わりに後ろから抱きついてくる。

え？なに？なんなの？

それを言葉として発する前にキリは勢いよく飛び上がった。

「フライ」

飛行の呪文。

なるほど林を飛び越えようってわけか。さすが魔法使い。

安心したのもつかの間ずるっとキリの腕が緩んだ。

「ごめん。落とす」

「うああああああ！」

寸前のところでキリの手をつかまえる。

「誰か！誰か助けて！」

先ほどの女の子の声が聞こえた。

やばい、急がなければ！

女の子と兵士がすっかり見える位置まで来た。

ここからなら、デルフで・・・

仕方が無い、キリの眩き。

“我が瞳を黒く染め上げる”

一瞬誰の声かと思った。なんて低く響く声なんだろう。

辺りが一瞬静まり返った感じ。

「サイコキネシス」

「な、何だ！！？」

兵士が声を上げる。そちらに意識を戻すと目を見開き剣を振り上げたまま男は動きを止めていた。

腕は固まったように動きを止め、剣先は空を指していた。

「ライトニング」

いつもより１トーン下がった冷たい声により放たれた雷が男の手から剣を弾く。

「誰だっ！」

男は顔を上げてこちらに視線を投げる。
途端に大絶叫してその場に崩れ落ちる。

「あ、あああ悪魔」

キリは男の前に降り立つ。

ひつと声にならない悲鳴を上げて男は意識を失った。

俺は男の言った言葉が解らず

「キリ一体どういうこと・・・と・・・？」

顔を上げると最初に映ったのは漆黒の翼。

「どういふことって私が悪魔なだけ」

こちらを見たキリの目はいつもと違う色をしていた。

真っ赤な赤、血の色。

そこで初めて、キリは本当に悪魔だったのだと思った。

案外嘘なのではないか、と置いていたがどうやら嘘ではなかったらしい。

「あの、助けてくれてありがとうございました」

先ほどまで悲鳴をあげていた女の子がキリにお礼を言った、その容姿に怯えることなく。

後ろの村人達は怖がって小さく固まっていたが。

なんだか嫌だ。

恐れられて怖がられている気分を俺は多分人生で初めて味わった。
孤独だった。

周りは集団でこちらを見ている。けれどこちらは一人だった。

キリはルイズに召還されるまでいつもこんな気分だったのだろうか。

「ほら皆さんもお礼を言わないとダメですよ。助けていただいたのですから」

だが後ろの村人達は動かない。

ただ冷たい怯えた目でこちらを見るだけ・・・

「もう・・・ごめんなさいね、ミス・キセイント」

「私の名前」

「私学院でメイドをやっているんです。今日は里帰りをしてたので」

「そう。怪我は無い？」

「ご心配ありがとうございます。大丈夫です。あなたに命を救われましたから」

メイドはにこりと笑った。

どうやら残党はすべて倒し終わったようで、辺りには静けさが戻っていた。

キリとサイトは林の中をゼロ戦に向かって歩いていった。

「とりあえずこれでひと段落だな」

「うん」

「てかルイズの虚無凄かったよな」

「うん」

キリはうなづくだけ。

「何か言いたいことがあるのか？」

立ち止まって問うと数歩歩いた後キリは振り返った。

「私ってそんなに怖いかな」

「悪魔のことを言ってるのか？」

「うん。いつものことだけど、この頃サイトやルイズといてあの視線を忘れてたからちよつと」

「お前いつもあんな目で見られてたのか。俺初めて味わったよ、今日。辛いな。なんていうか悲しい」

「・・・」

キリは手を伸ばした。サイトは手をとってキリを抱きしめてやった。顔を埋めてキリは言う。

「サイトお願い。私を嫌いにならないで。私、もう2人の優しさを知っちゃった。だからもう前のように戻れそうに無い」

「そんなの心配ねえよ。俺もルイズもキリが大事だから」

「うん」

「だから大丈夫だ」

サイトはキリの頭を撫でた。

サイトは思った。

俺より2つも小さいこの子は今までどれだけあんな思いをしてきたのだろうと

どれだけ悲しく寂しかったのだろうと。

「キリ、もう一人で抱え込まなくていいから何かあったら言え。何も出来ないけど、1人より2人の方がいいだろう？」

キリは少し名残惜しそうに手を離すと

「ありがとう」

と少しだけ涙目でそう言った。

まさかこんなことになるなんて・・・

「相棒、考え事なんてしてどうしたよ？」

側の壁に立てかけたデルフがカシヤカシヤと音を立てる。

「別に」

俺は空に輝く二つの月を見上げた。

残党を片付け終えた俺たちはゼロ戦に乗って城へと戻ってきていた。そこで迎えてくれた姫様に何度もお礼を言われて美味しい夕飯を食べた後、俺は部屋のベランダでぼーっと月を眺めていた。

身体に感じる夜風は気持ちがいい。

グラスに残るワインを揺らした。

こうぼーっとしていると浮かぶのはキリのことだけだった。

“我が瞳を黒く染め上げる”

あの時間こえた低く響く声は、きっと力の解放の呪文だろう。

黒い翼。真っ赤な瞳。

見たときは驚いたが、今思い返すとそうでもない。

怖いとは思わなかった。

逆に綺麗だったかも・・・と思える。

戦っているときは無口で冷酷なくせに、不安になると抱きついて泣き出す。

今のサイトにはそんなキリがとても可愛らしく思えた。

抱きしめたときのキリの細い身体を思い出す。

今はキリの方が強いかもしれない・・・でも、守ってやりたいと思う。

「でも中身は弱い気がするんだよな」

ぼそりと思考が外に漏れた。

「何の話だい？」

「キリのこと。凄く強いと思う。あんなにたくさんのドラゴンを引きつけて、一撃で残党を吹っ飛ばして、さらには悪魔だ。多分普通に戦ったら俺やそこらの魔法使いじゃ相手にもならないだろうな。でもさ」

「でも？」

「中身は脆い気がするんだよ」

「まあ、わからなくも無いね。あの魔女っ子、ずっと一人だっただろうからな。頼るものはねえ。溜め込んじゃまうんじゃねえか」

「そうそう。俺は言うというよりかは呟いて残っていたワインを飲み干した。」

そして決心したように言う。

「俺、強くなりたいよ」

「おう。頑張れや」

そう言ったデルフは嬉しそうだった。

一方室内。

アンリエッタ女王陛下とキリとルイズはベットに並んで腰掛けて話をしていた。

「本当に今日はありがとう。ルイズ、それにキリ。あなた方はこの国を救ってくれました。もう何度お礼を言ったらいいか」

ルイズは首を激しく横へ振ってとんでもないです、と言った。

「恐れ多いです陛下」

キリも頭を深々と下げる。

「そんな、いいんですよ。私が言いたいただけですから」
アンリエッタはくすくすと笑う。

「今夜はその活躍を聞かせていただだけませんか？」

ルイズは今度首を縦に振った。

「もちろんです」

ルイズがそう言った時ノックの音が聞こえた。
「どうぞ」

今まで見せていた少女らしい笑みを一瞬で女王の顔へと変え、ベツトから立ち上がる。

それを見てキリとルイズも立ち上がった。

「エルゼ・コンフィートです。今日の戦闘の報告をしに参りました」
聞こえたのは若い声だった。まだ20を過ぎていないだろうと思われる。

そんな年で陛下の部屋にこられるのだから相当の腕の持ち主なのだろう。

「えエルゼ？」

返答したのはアンリエッタではない。ルイズだ。

それを聞いてアンリエッタは思い出したというように頷く。

「入りなさいエルゼ」

「はい。失礼いたします」

ドアを開けて入ってきたのは金髪の男だった。

年は予想通りだろう。キリはこの男に見覚えがあった。

入ってきたエルゼは一瞬目を疑うように瞬きしたが、すぐに真面目そうな顔になってアンリエッタに持っていた書類を手渡す。

「ごくろうさまでした」

「いえ」

そう一礼した時キリはその男と目が合った。

キリは鋭い視線を投げて目をそらす。

「では失礼しました」

男は身を翻して部屋を出て行こうとしたが、待ってとアンリエッタは引き止めた。

「あなた確かルイズの婚約者では無かったかしら？」

予想していなかったであろう問いかけに男は驚いたようだ。

「はい。確かにそうです」

「よかったわ。ルイズに与える部屋が無くて困っていたの。あなた

の部屋を一緒に使わせていただけないかしら」

「ちょ、ちよつと姫様！」

今まで黙っていたルイズが声を上げる。

「私の部屋はちゃんとしたきました。お忘れですか!？」

まさか忘れていたわけがあるだろうか、いやそれは無い。

「いいではありませんか？」

「良くないですっ!!」

ルイズは面白そうににこにこ笑っている姫様に向かって真っ赤な顔で叫ぶ。

そんな二人を尻目にキリは男に近づいていく。

「久しいね、エルゼ」

「そうだねえ。なんだい？こんどは女王陛下に付け入ろうつてのか？」

「違う」

キリは今すぐにも殴りかかってやるとも言いたげに男、エルゼを睨めつける。

「この頃どうも会わないと思ったら、もしかしてルイズと一緒にいたのか。まったく、しょうがないやつだな」

エルゼの瞳はまるで怖がっていない。それどころか今すぐにも殺してやるうかとキリを睨み返す。

「見なさい。私、使い魔になったの。あなたにそんな物言いされる筋合い無い」

ようやく桃色（真っピンク）のオーラを出していたルイズとアンリエッタは、どす黒いオーラを部屋中に撒き散らしている二人に気がついた。

「ちよつと、キリ何してるのよ！」

近づいてお互い杖まで構えていた二人の間に割ってはいいる。

「ルイズ、私こいつが婚約者だなんて聞いてない」

「そ、そりゃ言っていないからね」

一瞬いつもと雰囲気の違いに身を引くが速く止めなければと言
い返す。

「エルゼも杖しまつて」

「わかったよ」

ルイズの雰囲気気分に気落とされエルゼは杖をおろす。それを見てキリ
も杖をおろした。

「まったくもう。何なのよ」

「まあまあルイズ。じゃあエルゼ今晚ルイズをお願いね」

姫様はそれだけ言つてエルゼとルイズの二人を部屋から出した。

「どうもすみませんでした」

とりあえず頭を下げるキリ。

「良いのよ、彼と何かあったのかしら？」

「はい。依頼を受けていたときにときどき会つたので」

「彼はあなたが悪魔だつて知っているの？」

キリは頷く。

「きっと、ルイズが話してくれるわ。ルイズはいなくなつちやつた

し、今夜は二人ね」

「そうですね」

「そんなところに立つてないで、こつちへ」

アンリエッタはベットに転がって自分の横の空いたスペースをたた
く。

「今夜は今日の戦闘のこともそうだけど、あなたのこと色々聞かせ
てくれないかしら？」

キリは迷っていたが、ベットの淵に腰掛けると

「もちろんです」

と言つた。

その夜、キリはアンリエッタに戦闘のことから始まり、自分が生ま
れてから今までどんな扱いを受けてきたか、どんなことをしたか、

ルイズに召還されてから何があつたかを話して聞かせた。

アンリエッタは相槌を打ちながら真剣にその話を聞いていた。そして「悪魔の方たちを助けてあげたいわ」

と言った。

「私、あなたがそんな扱いを受けてきたなんて全然知らなかった。でも、悪魔だつて同じ人間よね。私たちと同じように感情がある。辛かったり悲しかったり、そう感じることも多かったでしょうね。

私はそんな悪魔たちを助けてあげたい。一体誰かしらね。悪魔は殺さなくちゃいけないなんて決めたのは・・・。

昨日は本当に悪いことをしたわね、ごめんなさい」

キリはにこりと微笑んだ。

「いいんです。それよりも、今わかっていただけたことが嬉しいです」

「用事を思い出したから、先に寝ていてくれるかしら」

「はい。今日はありがとうございました」

「聞かせてと頼んだのは私のほうよ。こちらこそ。では、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

キリはいつもより二周りは大きいベットに横たわった。

まさかこんなことになるとはなあ。

と思った。

朝。

目が覚めたキリは起き上がる。

隣に女王陛下が寝ていて驚いたが、そうだ昨日一緒に寝ようってことになったんだと思い出しつつ、ベットから出た。カーテンを出来るだけ音を立てずに開けると朝日よりかなり高くなってしまった太陽が部屋に差し込んだ。

どうやら少し寝すぎてしまったらしい。

というか、姫様がこんな時間まで寝ていていいのだろうか・・・

まあ昨日の夜は話しすぎてしまつて確実に日が変わっていただろうが。

一度大きく伸びをしてから貸して貰った寝着をぬいで、魔法学園の制服に着替える。

そろそろ他の服にしたいなあ。

と自分には贅沢すぎるくらいの欲が出たことに驚いて慌てて首を振る。

せっかく、ルイズが学園長にいただいて来てくれた服に私は文句をつけるっていうのか。

いやでも、他の服が欲しいと思つていたのは事実だ。

別に生徒でもない自分が制服を着ているのが、ちよつと申し訳無いと感じているだけのこと。

最後にマントを纏うとベットから物音が聞こえてきた。

「起こしてしまいましたか？」

キリの声に目をこすりながらアンリエッタは起き上がる。

「いいですよ。もう、結構な時間でしょうしね」

「ですね。私、ルイズのところに戻ります。明日は授業があるので午前中にはここを出発したいと言っていました」

「え、午前中？もう時間が無いですね。行きなさい。帰る前に執務室に寄るように伝えていただけませんか？もちろん3人で。大事な話がありますの」

「はい。承知いたしました」

キリはびしつと一礼してアンリエッタの部屋を後にした。

一方のサイトはというと・・・朝早く部屋に戻ってきたルイズと本人曰くなぜか言い合っていた。

「だから私は今気分が悪いの！放っておいてよ！」

キリに用意されていたベットの上で布団に包まったままルイズは叫

ぶ。

「知るかよ！誰だ、朝早くきて殴りかかってきた奴は！お陰で俺が大惨事じゃねえか！」

そう。いきなり部屋に入ってきたルイズはまだすやすやと寝息を立てていたサイトに向かつて飛び掛り、殴りかかってきたのだ。それも真っ赤な顔して。

サイトは意味がわからなかった。

昨日の晩もルイズには殴られていたので、体がそろそろ堪えてきたようだった。

この状態で馬に乗って帰るのだ。堪ったもんじゃない。

昨晚のエルゼとの会話を聞いていれば原因はわかっただろうが、それを聞いていないサイトにわかる術などない。

加えて言うなら、ルイズは部屋に来てから口を開くと、馬鹿。何なの。最悪。しか言っていなかった。

「一体、何があつたんだよ？」

そろそろ言い合つのが疲れてくる頃である。

サイトはため息をついた。

「いろいろあつたのよ！」

「エルゼと？」

まったくもっていいタイミングで帰ってきたものだ。

ドアを開けてキリは2人の会話に参戦した。

「う、うるさいのよ」

「凶星だな」

3人で進行を始めた会話に混ざってきたのはデルフである。

「何で言ってくれなかったの？」

キリはルイズに近づいて合い向かいのベットに腰を下ろす。

「・・・だってまさか会うだなんて思わないもの」

ルイズはもともと布団から顔を出す。

個人的にキリはエルゼのことが嫌いだった。それも大がつくほどに。いちいち突っかかってくるあの男は毎度毎度よく自分の邪魔をした

ものだとキリは思う。

なので、きつとあの男のことを考えて赤面しているであろうルイズに無償に腹が立った。

「どういうことだよ、エルゼって誰？」

とりあえず、話に置いてきぼりのサイトにエルゼがルイズの婚約者であることを教える。

婚約者ってどんだけファンタジーなんだよ、とサイトは独りでつつこんだ。

「ちゃんとエルゼにはあなたのこと、説明しておいたわ。だから心配しないで」

「ならいいけど、あいつ私が悪魔だって知ってるからやりずらくて昨日も今すぐ殺してやろうかなっていったのよ、言葉に出してないけど。ほんとにあいつにはいいイメージが無いよ」

愚痴愚痴と文句を言い出すキリ。

わかったわ、ちゃんと言っておくから。と言うルイズには先ほどの赤面は消えていた。

「絶対だからね」

「話変えるけど、いきなり今晚一緒の部屋で寝なさいって言う姫様もどうかと思わない？おかげで昨晚散々だったわよ」

「いい思いしたくせに。来た時にやけてたよな、娘っ子」

「あんたは黙ってなさいよ」

「一緒に寝たってまさか・・・」

「あんたが考えたようなことは何も無いわよ、残念だったわね」

「別に残念がつてねえ」

「そうだ。キリはどうだったの？」

「姫様と話せて良かったよ。最後にね、悪魔の子達を助けてあげたって言うてくれたの。嬉しかった。救われた感じがしたの」

「それは良かったわ。あなたを残してきちゃって心配してたのよ」キリは笑った。

「ルイズに心配されるようなことじゃないじゃない。逆にルイズの

方が心配だった」

「私？同じく心配されるようなことは無かったわよ。久しぶりだったから会話が盛り上がっただけ」

そう話すルイズをサイトは冷めた目で見つめていた。
ならなんで殴るかな、と。

ていうか、いつもよりキリの喋り方が碎けているように感じる。
気のせいかな？

「会話が盛り上がるって……。まあ私もだけど。なんか夢みたいだったよ、一晩中姫様と話が出来るなんて」
やっぱり、気のせいじゃない。

普通に女の子同士が話しているようにしか感じない。

別にキリが女の子らしくないというわけではない、絶対。

てかもしそうだとしたら、気がつくときりの事を考えてる俺って何だ？

変態か？

それこそ絶対違う。キリは女の子だ。これ確定事項。

でも、こうやって喋れるんだ。可愛いじゃん。

「そうだ、姫様が帰る前に3人で執務室に来るようになって。大事な話があるって言ってたよ」

「じゃあ学院に帰る準備して。執務室に向かうわ」

「はい」「おう」

そんなこんなで執務室。

そこにはドレスに着替えたアンリエッタがいた。

「早くここを出たいでしょうにごめんなさいね」

「いえ、そんなことは。・・・それで話とは？」

「これですわ」

「紙？」

手渡されたのは一枚の羊皮紙であった。左上にはトリステイン王国の百合紋花押が押してあった。なんらかの公式書類なのだろうが、サイトには読めない。

しかし紙を受け取ったキリとルイズは大きく口を開けて固まっていた。

「騎士の叙任状ですって！」

「姫様これは一体？」

サイトにはさっぱりだったがこの羊皮紙にはなにか凄いことが書かれていたのだろう。黙って事の成り行きを見守ることにした。

「昨日キリと話をしていたって思ったんです。どうにか、悪魔という存在を殺す対象ではないものに出来ないかと。それで、思いついたのです。王国の近衛騎士に任命すれば見方が変わるのではないかと。そこで急遽各庁にふれを出したのです」

「本当によろしいのですか？私のような存在が近衛騎士になっても・・・」

キリにとってそれは本当に夢でも見ているかのようにであった。

「もちろんですわ。最初はかなり色々言われたんですけど、上手く言いくるめましたから。頭が固いんですよ、あの人は。前例が無いから出来ないって、なら作ればいいではありませんか。私は家名や血統にこだわらず、有能な人間を集めたいのです。キリ、あなたはどう思います？」

「私の口からはなんとも言えません。でも、騎士になれるのは凄く嬉しいです。どうもありがとうございます」

アンリエッタは嬉しそうに頷いた。

「ではさっそく”騎士叙任”を行います。キリ、そこへひざまづいて」

キリはひざまづいて目を瞑り頭を伏せた。

ずしりと、右肩に重いものが乗せられた。

それはアンリエッタの杖であった。

まさか自分が騎士になるなんて・・・

そんなこと考えたことも無かった。

考えている間にも儀式は進んでいく。

「我、トリステイン女王アンリエッタ、この者に祝福と騎士たる資

格を与えんとす。高潔なる魂の持ち主よ、比類なき勇を誇る者よ、並ぶものなき勲し者よ、始祖と我と祖国に、変わらぬ忠誠を誓うか？」

「誓います」

「高潔なる魂の持ち主よ、比類なき勇を誇る者よ、並ぶものなき勲し者よ、難儀の魂の在り処、その魂が欲するところに忠誠を誓いますか？」

「誓います」

「よろしい。始祖ブリミルの御名において、汝を騎士シュヴァリエに叙する」

アンリエッタは、キリの右肩を二度、左肩を二度叩いた。

なんともはや簡単に儀式は終わる。

アンリエッタはキリを立ち上がらせるとまっすぐ目を見てこう言った。

「この国を変えられたらいいですね」

「はい」

嬉しそうに頷くキリにマントが手渡された。

手渡してくれたのは、女騎士だった。騎士シュヴァリエのマントをしているところを見ると近衛騎士なのだろう。

「共に頑張ろう」

彼女の目はそう言っていた。

「纏ってみろ」

早速今のマントを脱いで、新しいものをつけてみる。

黒字のビロードの上、小さく青い百合紋があらわれ、胸元にトリステインでの”シュヴァリエ”の称号を表す、銀色の星が描かれている。

「似合うじゃないの。おめでとう」

ルイズが笑う。

「おめでとう」

何だかわからないが、騎士シュヴァリエというのは凄いものらしい。つまりは格が上がったのだろう。今まで散々な扱いを受けてきたキリにとって

それは素晴らしく嬉しいことなのだろうと思う。サイトは笑う。
「本当にありがとうございます」
キリは改めて深々と頭を下げた。

24 友達 知り合い

街から帰ったその翌日。

まだ太陽が登り始めたばかりで、眩しいというほど明るくない。けど、明るい。そんな時間帯。

いつもより早く目が覚めてしまったキリが水場に居た。

夏がすぐ側に迫っているこの季節。

水の流れる音と、指に触れるまだ温かくなっていない水が冷たく感じて気持ちがいい。

「よしっ」

一人で呟いて腕をまくり、洗濯を始めた。

そんなキリに近づく人がいた。

黒いショートヘア、白のカチューシャ、長く黒いスカート。白のエプロン。

そう学園のメイドであった。

彼女は水場の近くの火の塔の陰から洗濯をするキリを見ていた。

たまに顔を出して様子を伺っている所を見ると声をかけるタイミングを伺っているようだ。

彼女が何回目か顔を出したときだった。

ばしゅっ

足元でなにやらそんな音がして視線を移すと、白い煙が立っている。

あれ？

「何か用？」

声を話したのはキリだった。立ち上がることなく顔だけをこちらへ向けていた。

手に杖が握られている。

気付かれていたんですね。

彼女は地面に置いていた服の入った籠を持ち上げてキリに近づく。

「すいませんでした。じろじろ見るようなまねをして。．．．ミス・キセイントですよね？」

「そうだけど」

キリは立ち上がって露骨にいやそうな顔をした。

やっぱり嫌われてるのかな。彼女は少し肩を落とす。

「あの時は助けていただきありがとうございます。もし、ミスがいらっしゃらなかったら私は．．．」

「だから何？」

キリは彼女の声を遮る。

「え、私は、今ここにいらなかったわけだから．．．」

「ふーん」

彼女は驚いた。何につて？

お礼を言っているのに値定めするような視線をあびたのは初めてだった。

それにこんなに冷酷で無機質な瞳を向けられたのは平民の私でも数少ない。

一瞬後ずさるが踏みとどまる。

そこへキリが杖をびしつと彼女の顔面に突きつけて言った。

「私が悪魔だつてしゃべったら殺すから」

キリの瞳の奥に宿る黒いものが彼女の瞳に映る。

恐怖に足が震えた。キリは本当に私を殺せる、そう感じたのだ。

「っ私そんなことしません！」

貴族に杖を向けられるのは好い気がするものではない。

むしろ嫌だ。

けど、キリから向けられるこの杖は貴族の向けるそれとは違う。ただの権威の振りかざしでない、上手くいえないけれど。

「私、あなたとお友達になりたいんです！！」

タイミングは良しか悪しか、ついに本題を切り出した彼女。今度はキリが驚く番だった。

「．．．どうということ？」

「そのままです。私、あなたと話がしてみたくて、ずっと思っていたんです。だからまずお友達になっただけじゃないかって」

「あなたは杖を下ろした。」

「あなた面白いこというね。そんなこと言われたの初めてかも」

「そう言っただけで微笑むキリは先ほどとまるで別人のようだった。」

「いいよ、お友達。それってなにをするの？」

「え、え、えーと・・・」

言葉が出ない。
友達になってくれた。それは嬉しい。問題はその後、もしかして友達というものそれ自体を知らない？

「こういうこと聞くの失礼ですけど、友達いないんですか？」

「いない」

即答だった。彼女は頭を抱えたが、考えてみる・・・

「最初にこう言うのと誤解するかもしれないですけど、本音で言い合えてケンカしてもまた仲良くなれる、

本当の自分をさらけ出せる、一緒にいて、喜び、悲しみ、悩みを分かち合い、競いあえる、つかず、はなれずな関係、ふと思いついた時に自分を支えてくれる存在とかいろいろ人によって感じ方が違いますけど。そういう意味です」

「初めて話したあなたをそんな風には思えないよ」

彼女は必死に首を振る。

「最終的にはですよ。最初からそうなっているわけじゃないです」

「ふーん」

「キリは納得したらしい。半分冗談だろうと思ったがそうではない感じだ。」

「あの、私シエスタって言うんです。ミス・キセイント。その・・・名前でもいいですか？」

「まあ。わかった、シエスタね。よろしく。私はキリ。あ、でも悪魔ってばらしたら許さないよ？」

「は、はい。じゃあ洗濯しながらお話でもどうですか？」

それを聞いてキリは水につけたままだった服に気付いた。

「忘れてた」

2人は並んで、座って話し始めた。

「ねえキリちゃん」

「キリでいい」

どちらかというと、というよりはあきらかにシエスタの話し声のほ
うが多く聞こえた。

「友達が出来た？」

部屋に戻ったキリはとりあえずサイトに話してみた。

「うん」

うなずくとサイトは一言。

「良かったじゃん」

どうやら友達と言うものは悩むようなものではなかったようだった。

それから数日後もキリは水場で洗濯に勤しんでいた。

本当はサイトの仕事なのだが、なんとなく目が覚めてしまう。

きっと騎士シュヴァリエになったからだろうけど・・・

子供か、私は。

と一人でつつこんでしまうくらい、わくわくや興奮が収まらない。

今のキリはまるで、遠足前に眠れない子供のようだった。

「おはようございます、キリ」

そう声をかけてきたのは、メイドのシエスタだ。

最初はキリちゃんと呼んでいたもののそれは最初の数日でキリと、
呼び捨てで呼ぶようになっていた。

「おはよう」

キリは顔をあげてそれに答えた。

隣失礼しますね、シエスタはそう言ってキリの右隣で洗濯を始める。

「今日はいつもとマントが違いますね・・・ってそれ！シユヴァリエのマントじゃないですか！！」

シエスタのその言葉にキリははにかんだように答えた。

「あのとき、シエちゃん助けたあと王宮で陛下に任命されていたのだ」

「凄いいじゃないですか！おめでとうございます」

「うん。ありがとう」

もうキリはシエスタを彼女の言う“友達”のように思っていた。シエスタは話の運び方が上手く、あまりぺらぺらとしゃべることに慣れないキリにちゃんと合わせてくれる。それにまるで自分のことのように喜んでくれる彼女を見て、キリは感じたことのない嬉しさを感じていた。

なのでしゃべりやすく、知らないことをたくさん知っているシエスタをキリは慕うようになっていた。

「でも、それって結構前の話じゃないですか？」

「まあ。もったいなくて・・・」

「キリらしい」

シエスタは笑った。

「そういえば、服が欲しいって言ってましたよね？」

「うん。だって生徒でもないのに同じのはなあって思って」

「どんな服が欲しいんですか？」

キリは少し悩むようなしぐさをした。どうやら、服が欲しいと思っ
てはいたがどんなものかというイメージは考えていなかったようだ。
服を洗うしゃしゃかという音だけが響いていたが、キリはゆっく
り自分のイメージを伝えようとした。

「うーん・・・派手じゃなくて目立たないような・・・」

「難しいですね」

やっぱりとキリは苦笑し、洗濯の手を止めてシエスタをみると、
難しいと言いつつも真面目に考えにふけていた。

「シエちゃん、手が止まってる」

「あーいけない。でも、なんとなくアイデア浮かびました」

「凄い。さすが、メイドさん。家事全般何でもできるんだ」

シエスタは胸を張る。

「それはそうです。大体のことができないとこの仕事は務まりませんから。そういうば、キリの誕生日はいつなんですか？聞いてなかったですよ？」

「誕生日？えーと・・・」

キリが洗濯を終わらせて部屋に戻ったときには、すでに太陽は上のほうへあがっていた。

今日は授業がないので、ルイズを起こす必要がなく、ついおしゃべりが弾んでしまったのだ。

さすがにバツが悪いのでドアを少しだけ開けて部屋の中を見た。そうして、数秒部屋の中を見回していると、

「キリか？」

中から声がかかった。

「ごめん、サイト。ちょっと話しすぎちゃって」

後ろ手にドアを閉めると、さっき見たとおりベッドの上に人影はなかった。

あれ？今日何か言われてたっけ？と思考を巡らしていると、左のほうから声がかかる。

「ルイズはデートに行くんだと」

「デート・・・エルゼか」

「エルゼって・・・ああルイズの婚約者か。そっかだからあんなにおしゃれを」

キリから見て、左の壁際で腕立てをしながらサイトは呟いた。それを聞いてキリは苦虫をつぶしたような顔をする。

「そっぴや、エルゼってやつと何かあったのか？」

いつもの口調でそう問うサイトに、キリは何も答えなかった。2人きりの部屋に沈黙の重い空気が漂う。

「あー、悪い。話したくないことだったか？ならいいや。もう聞かないよ」

キリはサイトと目を合わせることなく窓の外を眺めていた。サイトは居心地が悪くなって中断していた腕立てを再開する。

サイトが100を数えてもキリはそこで立ったままだった。

一通り筋トレを終わらせたサイトは、ルイズに最近買ってもらった、お湯の出るマジックアイテム（サイトはポットと呼んでいる）で何かいれて一息入れようと棚からマグカップを出していると、ベツドに座ってやはり窓の外を眺めていたキリが言葉を発した。

「エルゼとはよく仕事先で会ってた」

いきなりそんなことを言うので不思議に思ったが、先ほど自分が尋ねたことだと気付く。

「なあキリ」

そう言っただけ口をつけると、猫舌の少女が熱いお茶をすするよ

うにちびちびと話し始めた。

「紅茶とコーヒーどっちがいい？」

「紅茶。ミルクたっぷり」

紅茶に一口だけ口をつけると、猫舌の少女が熱いお茶をすするよ
うにちびちびと話し始めた。どうやらエルゼは位で言う子爵家の人間らしい。コンフィート家は、軍事の強い人間が多い家柄で、この学園に入り始めたころ位から、魔法隊と共に色々なところに足を運んでいたエルゼ。そしてその行く先が重なることが何度かあり面識があったのだという。

今は仲が悪いが、最初からそんなに仲が悪くはなかった。会った時、何か情報を交換したり、一緒に紅茶を飲んだりしていた。けれど、悪魔だとばれて以来、前のように穏やかに話すことはなくなっ
たらしい。それでも、殺されないのはいいほうなので、そこまで悪

い奴だとは思っていない。キリはそう語った。

「じゃあなんでそんな嫌そうな顔すんだよ」

サイトがそう聞くと、キリはいきなりシャツを脱ぎだした。

「ちょ、おいキリ!？」

急いで止めようと、キリに近づくが、一瞬見たいかもという欲が出てしまい行動が遅れた。

その結果、気がつくときキリは上半身に何もまとわぬ恰好でサイトの前に立っていた。今、まわっているのはスカートと靴下くらいのものだろう。

反射的に目をそらすとくびれたウエストが映って一瞬どきりとしたけれど、細っこい身体と黒のスカートのせいで強調されている白い肌を視界の端に移したとき、どきどきしたのと同じくらい痛々しさを感じた。

とりあえず目のやり場に困るので後ろを向かせる。

それでも前を想像して、胸が高鳴った。

「そこ」

いきなりの指示語。

思考を素早くリターンさせて無事帰還を果たさせると、サイトはキリに尋ねる。

「そこって」

「背中。よく見て」

別にいつもと変わらないキリの声に脳内は少しだけ落ち着いてきた。キリに言われた通り背中を見るとそこには。

「これ、火傷？」

「そう」

キリの背中には大きな火傷のあとがあった。かなり大きい。いったい何があったのか、そう考えて話の流れ的にエルゼ絡みだろうと推測出来た。

「くしゅんっ」

キリは可愛らしくくしゃみをして、腕をさする。

そろそろ夏になりかけているといっても裸で外気に当たっているのはやはり寒いのだろう。

サイトはキリの脱ぎ捨てたシャツを拾って肩にひっかけてやる。

「わかったから冷える前に服着て」

ん、そうする。そう呟いて元通りに服を重ねていく。

サイトは紅茶を腹に流し込んで、とりあえず苦いブラックコーヒーを淹れなおした。

「やっぱエルゼにやられたのか」

「もう結構前のことだよ。一度、エルゼを助けた・・・自分でそう思ってるだけかもしれないんだけど、ドラゴンに襲われてるエルゼを見つけて、助けようと思って攻撃したんだけど、そのとき私ごと炎で焼かれて。爆風で飛ばされたから後ろだけで済んだんだけど、やっぱり思い出すと色々考えちゃって」

キリはうつむいてもう冷めてしまった紅茶の入った、カップをはじいた。

「その傷、もう痛くないのか？」

「うん、まったく。でも、見た目が気持ち悪いよね。皮膚よってて」
サイトは少しだけ驚いた。なんでかって、キリはそういうのをあまり気にしないと思っていたからだ。

「うーん、確かに、あんまり気にしてないけど・・・サイトはどう思う？」

こういう言い方するってことは少なからず、気にしているってことなんだろうか？

そう考えるとなんだかギャルゲの選択肢みたいに思えて笑えた。いきなり笑いだしたサイトを見てキリは不信な顔をする。

「ごめんごめん、そんな顔すんなよ。ただそういうこと考えるキリっておかしいなって」

「おかしい?・・・よけいそんな顔するけど」

「違う、そういう意味じゃないよ。正直始めはちょっと、うって来たけど、別に俺そんなの気にしないし。てか、むしろ話してくれて嬉しいよ」

「そっか、それならいい」

キリは冷めた紅茶を飲みほしてベッドのほうへ歩いていく。また、いつものようにベッドに座って、いつもと違う本、ルイズの教科書をぺらぺらとめくり始めた。

まあ今日はルイズがいないからなあ。

サイトはマグカップを片づけながら思い、さてこれから何をしようか。とまた思考を巡らす。

サイトが選んだ選択肢はあたりかはすれか。まあどちらにしても今日1日2人きりなのに変わりはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5070f/>

悪魔とゼロとガンダールヴ

2010年12月23日14時19分発行